

大

学

2025

11

時

No.

425

報



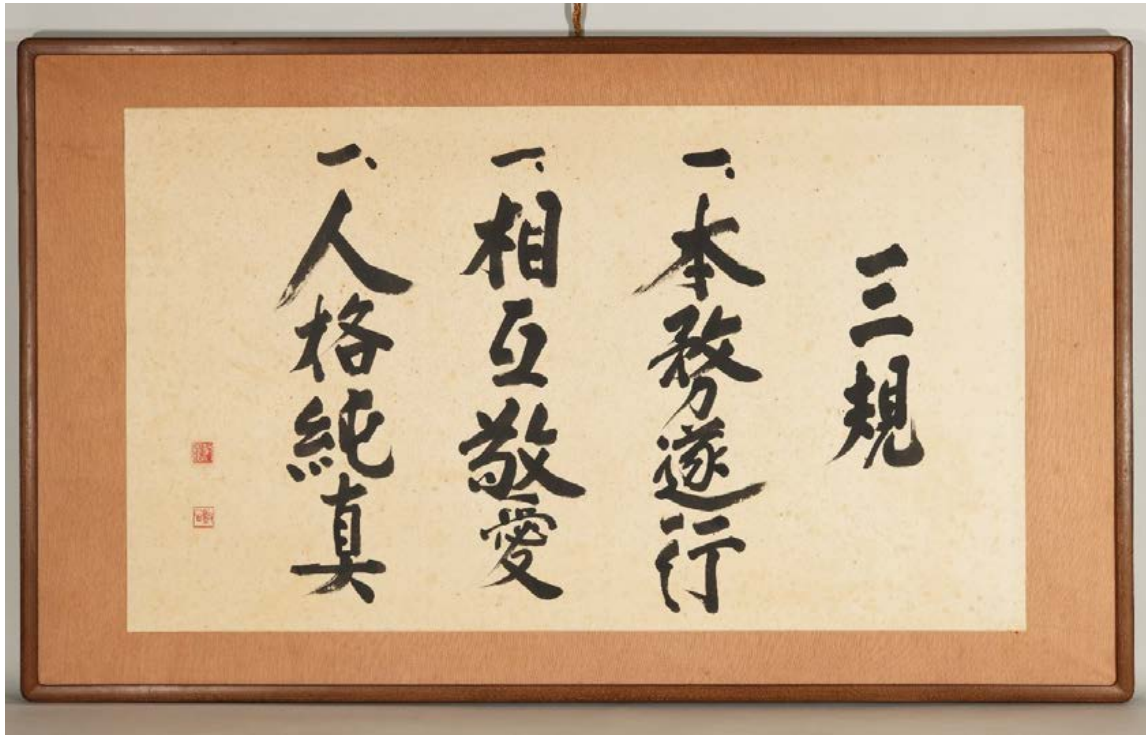
｜特集｜

専門ミュージアム
—大学の知と文化の発信拠点—

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2025(令和7)年11月20日発行【隔月刊】

大谷大学



第3代学長の佐々木月樵(げっしょう)「大谷大学樹立の精神」に掲げられた三モットー
(第20代学長の松原祐善(ゆうぜん) 筆)



1913年に現在地へ移転した当時の「本館」
(現在の「尋源館(じんげんかん)」
【国・登録有形文化財 第26-0058号】)



2018年に竣工した
新教室棟「慶聞館(きょうもんかん)」と尋源館

大谷大学の人間育成

「国宝とは何物ぞ」と問いを立て、「道心有るの人」を国宝だと言い切ったのは伝教大師最澄である。これになぞらえるならば、大学の宝は建物、文物、図書も大事ではあるうが、やはり「人」であると言わねばなるまい。

大谷大学は江戸時代の学寮開設以来、今年で360年を迎えた。また、近代の大学として東京の巣鴨に「真宗大学」の名で開学してから120年あまりの歴史を刻んできた。その後、1913年に京都の現在地に移転し、今年で112年となる。その間、仏教の精神に基づいて、多くの人物を世に送り出してきた。

本学の人間育成の3つのモットーとして、第3代学長・佐々木月樵は「大谷大学樹立の精神」において「本務遂行、相互敬愛、人格純真」を掲げた。自らの本務を遂行すること、お互いに敬愛すること、自他をこまかさず純真であること、の3つである。本務とは本来のつとめを意味するが、単に与えられるも

のではない。自分が何のために生まれてきたのかを問うことを通して、初めて明らかとなる。それは他者との関係の中で見えてくるものでもある。本学は、この精神を現在も大切にして教育に当たっている。

「人」は大学にとって宝であるというだけでなく、世間にとっても宝であり、何よりその人自身の人生が何物にも代えがたい宝である。

今年は「大谷大学樹立の精神」が出されて、ちょうど100周年に当たる。あらためて大谷大学の人間育成の願いを確かめる時である。

CONTENTS

76	72	68	66	64	60	56	52	46	40	32	30	14	10
だいがくのたから 大谷大学 大学点描 天理大学 巻頭言 まごころで道を照らす「優しい」を超える100年に 永尾比奈夫 視点 歴史の中の大学 小原克博 座談会 アカデミック・ライティング支援のいま 小林至道／飯野朋美／太田裕子／土屋和代／（司会）松田美佐 特集 専門ミュージアム―大学の知と文化の発信拠点― 京都国際マンガミュージアムの20年―京都精華大学の取り組み― 勝島啓介 都会で感じる海と人のつながり 茂木正人 時をこえて響く音―活用と保全の調和を目指した知の発信― 不動真優 都心で見学できる化石の水族館 宮田真也 創立100周年を迎える演劇博物館の活動 児玉竜一 小さくてもきらりと光るミュージアム ―学習院の歴史と知の集積を未来に伝える― 長佐古美奈子 ずいそう 建学の精神に支えられる「無形資産」 西中利也 小特集 大学を起点とする「出会い」のデザイン 「ゆる婚」―同窓会主催の婚活イベント 渡邊英司 愛大ビジネスクラブ―基本理念は、『出会い』『絆』『相互扶助』― 八木好郎 現代に生かす福澤諭吉の「人間交際」 ―新事業創出を支援するメンター三田会― 宮地恵美													



78	マツチング理論による大学業務の改善	野田俊也
84	寄稿「私立大学のミライー研究編」	
92	「みる・つかう・つくる」デジタル地図の現状と参加	瀬戸寿一
98	寄稿「私立大学のミライー教育・地域連携編」	
102	共通基礎科目「人間学」での全学的挑戦	赤澤清孝
104	私の授業実践く教育現場の最前線からく	
106	社会に役立つ人材を育てる	八木茂典
108	明日への試み	聖カタリナ大学健康社会学部
110	心・社会・身体 の健康づくりに寄与する	大黒屋貴稔
120	加盟校の幸福度ランキングアップ《銀杏並木編》	
123	キャンパスを見守り続けるイチヨウ並木	青山学院大学 政策・企画部 大学広報課
124	紡ぐ繋ぐハーモニーロードー個性が奏でる美しいハーモニーー	吉田輝美
125	苗木から育てた銀杏並木	伊藤泰彦
126	クローズアップ・インタビュー	
127	銭湯ペンキ絵師	田中みずきさんに聞く
128		(聞き手)川島葵
129	新会員代表者紹介	
130	専修大学	
131	執筆者・出席者のく紹介(掲載順)	
132	私大連ニュース	
133		
134	編集後記	



2025年、天理大学は創立100周年





天理大学



100th ANNIVERSARY
CONNECT 「つながる」を、始めよう。





100th ANNIVERSARY
CONNECT「つながる」を、始めよう。



100th ANNIVERSARY
CONNECT 「つながる」を、始めよう。



6つのCONNECT

"気づきと成長"をもたらす「つながり」の接点



世界とつながる。
CONNECT



社会や地域とつながる。
CONNECT



学生同士が つながる。
CONNECT



学部学科が つながる。
CONNECT



卒業生と つながる。
CONNECT



ビジネスとつながる。
CONNECT

知の探究

University Current Review

大学時報

2025.11/NO.425



まごころで道を照らす
「優しい」を超える
100年に

永尾 比奈夫 天理大学学長

天理大学は創設当初から、多様な人々が助け合い共生する「陽気ぐらし」世界の実現に寄与する人材育成に取り組んできた。

100周年を迎えた2025年からは、その理念を揺るがすことなく、加えて「優しさ」を超えた「たすけあい」を促進する。次の100年に向けて、世界的な視野に立ち、さまざまな「つながり」のなかで学びを実践し、社会と人との接点を結ぶ方法を自ら見つけ躍動できる人材の育成を目指す。

まごころを指針に。受けた恩を力に。「他者への貢献」を加速してゆきたい。

歴史の中の大学

小原 克博 同志社大学学長

1. 危機の予測と対応

このところ、めっきりと、話の枕詞に「急速な少子化の時代に」といった表現が使われるようになった。2040年には約17万人の入学者が減少することなどを示す各種統計データがセットで示されることも増えた。ちなみに、大学教育を取り巻く危機的状况を伝える情報が溢れており、不安な思いで15年後の大学の姿を想像する機会も増えたのではないか。しかし同時に、中央教育審議会答申「我が国の『知の総和』向上の未来像」の冒頭において「この危機を、大学をはじめとする高等教育機関の活動を強じんなものとし、国内外の社会課題の解決に貢献することにより、社会全体の活性化を促す好機と捉え」とあるように、時代の危機を、変化を促す「好機」として捉える姿勢が今ほど求められている時代はないと

も言える。

目先の情勢に振り回されずに、15年後どうなっているのかを長い時間軸で考える必要性を強く感じることがある。そのきっかけとなったのは、同志社が今年、創立150周年を迎え、私自身、その起源や歴史を振り返る機会を多くもったことにある。明治の新時代を迎え、当時の知識人たちは挑戦的とも言える目的を掲げ、学校（私塾、私学）を設立した。同志社の創立者・新島襄は「自治自立」、「智徳並行」などの人物育成の理想を掲げたが、150年後の今、当時掲げられた高邁な目的の中で達成できたと言えるものは何一つない。まだまだ道半ばである。新島は、勝海舟に大学事業に必要な年数を聞かれた際に「大学の完成には200年」と答えたと言われている。長大な時間軸で教育事業を考えていたことに驚嘆する一

方で、正直なところ、2000年で「完成」に達するとも思えない。同志社大学の重要なパートナー大学であるドイツのテュービンゲン大学は、2027年に創立550周年を迎える世界最古の大学の一つである。どの分野も世界トップレベルの実力を持つ名門大学であるが、そのような大学であったとしても550年で完成するわけではなく、今もアグレッシブに挑戦を続けている。また、その長い歴史は大学そのものの歴史をも想起させる。

2. 大学の来歴と社会的役割

現代の大学の起源は12、13世紀の中世ヨーロッパにある。当時の学生は、教育の基礎としてのリベラルアーツ（自由7科）の学びを経て、神学・医学・法学を含む上級学部に進学した。リベラルアーツを含む古代ギリシアの知見はヨーロッパでは忘れ去られて久しかったが、11世紀にイスラーム圏から、翻訳された古代ギリシアの学問がヨーロッパに再流入することになった。そして、キリスト教の伝統とヘレニズムの新たな出会いが、知の化学反応を引き起こし、リベラルアーツの復興だけでなく、大学システムそのものを生み出していったのである。

このように、「知の爆発」を誘引・牽引し、社会そのものを変えていくポテンシャルを大学教育は持っている。どの国や地域にも危機的な時代はあった。産業革命以降に限っても、技術革新や産業構造の変化は、伝統的な職業を淘汰し、人々に大きな危機をもたらした。労働環境の急激な変化と共に、新しい知識と技能を修得することが求められたが、いつの時代も、教育を改善・改革することによって、その変化に対応してきたのである。

そして、それは西洋に限ったことではない。日本では江戸末期から明治初期にかけて、全国各地に私塾が起り、従来からあった漢学（儒学）、国学だけでなく、医学、天文学、地理学、化学などを含む洋学・蘭学も積極的に学ばれた。私塾は、単なる古典教育の場だけでなく、西洋学問の導入や実学の普及にも重要な役割を果たした。そして、その卒業生たちが明治維新後の政治・産業・教育の担い手になっていったのだ。こうした社会の激変期にあって、福沢諭吉や大隈重信、そして新島襄らは、教育の新しい可能性を夢描いたのであった。

3. 世界観と歴史観を養う

戦後80年となる今年、日本社会はその80年を総括できているのだろうか。戦争の記憶は遠のき、戦中・戦前の何が問題であったのかを検証するのは決して簡単なことではない。同志社はキリスト教主義学校であるため、戦争の時代には、敵性宗教を掲げる学校として軍部からの厳しい監視と弾圧を受けた。戦時下の危機を生き延びるために、同志社では当時の国家体制に順応しようとする努力もなされた。学徒出陣（1943年）以降、数多くの学生が犠牲となった。同志社もまた戦争の時代を十分に総括できているわけではないが、多くの過ちを含め、これらの出来事が学校史の中に刻まれていることは、歴史を振り返る上で大切な手がかりとなる。

今、国際化やグローバル化は、どの大学にとっても重要な課題として認識され、学生を世界の各地に送り出し、また世界の各地から学生を迎え入れている。研究上の交流もおのずとグローバルなものになっている。国境を越えて、世界とのつながりを深め、世界観を豊かなものにしていくことは、次世代を担う若者たちにとって重要な課題である。世界観と共に大切なのは歴史観である。歴

史と世界に対する認識は、それぞれが縦糸と横糸になって絡み合っており、緻密で柔軟な知的世界を織り上げていく。歴史認識を欠いたままでは、今、世界が直面している複雑な問題を俯瞰したり、掘り下げたりすることが難しくなるだけでなく、世界、とりわけアジアの人々との信頼関係を構築することもできないだろう。

私は宗教研究を専門としており、一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラーム）世界を主たる研究対象としてきた。一神教の歴史を通じて、人類と紛争・戦争の係について研究してきた。考古学的証拠によって遡ることができる最古の戦争は1万年以上前のものであるが、それ以降も、戦争は途絶えることなく今に至っている。

何とも気の重くなる話であるが、人類にとっての未完の課題に取り組むべく、文部科学省「21世紀COEプログラム」に応募し、採択され、「一神教の学際的研究―文明の共存と安全保障の視点から」（2003―07年度）というプログラムを主導したことがある。中東、アジア、米国等で国際会議を開催し、問題の根深さを身をもって経験した。何千年も続く対立や紛争の解決方法を5年のプログラムで提示することなど到底不可能であるが、世

界の生々しい現実を知ると同時に、自分自身の歴史認識が深まったのは大きな収穫であった。

4・天空の彼方から少子化を見る

20～30万年前、ホモ・サピエンスは現れた。大脳皮質が他の動物と比べ肥大化した人類は、自分の行為がどのような帰結をもたらすのか、あるいは、目の前で起きている現象の原因は何なのかを推測する高度な力を得た。それゆえ、太古の昔から、人間には自分の経験や疑問を納得させてくれる「物語」（理論と言い替えてもよい）が不可欠であった。そのための重要な役割を担ったのが、この世界にも見られる数々の神話である。

太古の人類は、星空を眺め、天空に織りなす神々の世界や、神による天地創造の物語などを自らの存在に重ね合わせながら、豊穡なコスモロジー（世界観・宇宙観）を紡ぎ上げていた。しかし、現代人はもはや星空を見上げることはなく、もっぱらスマホを見ている。宇宙と人間が切り離されているような状況と言える。他方、様々なイデオロギーの対立が今も紛争や戦争を引き起こしている。気候変動や経済格差のように、国の違いを越えて

取り組まなければならない地球規模の喫緊きつぎんの課題もある。地球規模の課題を「自分ごと」として受けとめるためには、かつて人類がもっていた豊穡なコスモロジーを現代にふさわしい形で回復・再構築する必要があるのではないかと思索している。イデオロギーではなく、新たなコスモロジーによって、より包摂的な人類社会を目指すことができないかと。

天空の彼方から見れば、少子化などちっぽけな問題に過ぎない、などと言うつもりはない。しかし、目の前の危機を必要以上に過大視して、内向きに萎縮してしまうのではなく、大きな歴史観と世界観の中で、大学が果たすべき固有の使命を見出すことができれば、その危機は「好機」に見えてくるかもしれない。それは目の錯覚であろうか。いずれにせよ、日本の近代教育を切り拓いていった先人たちのように、危機の時代においてこそ、教育の新しい可能性を大胆に夢描きたいものである。

アカデミック・ライティング支援のいま



MEMBER

小林 至道

青山学院大学アカデミックライティングセンター助教

飯野 朋美

津田塾大学ライティングセンター客員講師

太田 裕子

早稲田大学グローバル・エデュケーション・センター准教授、
アカデミック・ライティング教育部門長

土屋 和代

東京大学大学院総合文化研究科教授、
駒場アカデミック・ライティング・センター長

司会

松田 美佐

中央大学文学部教授、
広報・情報委員会大学時報分科会委員

自立的な書き手を育てる ライティングセンター

松田 欧米の大学では1950年代から、レポートや論文執筆などにおいて学生の文章作成を支援するライティングセンターが設置されました。日本では、2004年に早稲田大学でライティング・センターが開設されて以来、各大学での設置が進められてきました。そして現在、多くの大学では、文章の添削だけではなく、書き手の自立を目指す文章を書くプロセスを指導していく、アメリカで誕生したライティング指導の理念を踏襲したライティン



グセンターの運営が行われています。その一方で、生成系AIの登場により、アカデミック・ライティング支援は新たな局面を迎えています。書くという行為は、学生時代のみならず卒業後の人生においても不可欠な行為であり、論理的な思考力を磨く手段にもなります。今回は、各大学でライティングセンターに関わる先生方にお集まりいただき、運営方法や課題、生成系AIへの対応、学生にとっての「書く」ことの意義まで、幅広い話題について議論を交わしたく思います。まずは、各大学におけるライティングセンター設立のきっかけや趣旨、目的などについてお話しただければと思います。

小林 青山学院大学の小林です。私は、2017年度から青山学院大学「アカデミックライティングセンター」（以下、AWC）の専任教員として、運営・管理を担当しています。AWCは、本学が策定した「AOYAMAVISION」の取り組みの一環として、2017年10月に設立されました。大学図書館に属し、正規課程に在籍する学部生、大学院生、留学生を対象にした授業外の学習支援施設として位置付けられます。「自立的な書き手を育てる」「国際的に通用する文章の書き手を育てる」「普遍



的な書く力を有する学生を育てる」という3つの理念を掲げて、学生の「書く力」を高める目的で運営しています。支援対象は、日本語あるいは英語で書かれたアカデミックな文章（レポート・論文・発表資料・留学の志望理由書など）です。開設当初は対面のみでしたが、コロナ禍を経て、現在は対面とオンラインの両形式で行っています。

飯野 津田塾大学の飯野です。本学の「ライティングセンター」は、文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に採択された取り組みの一環として、2008年に設立されました。採択された取り組みのテーマは、「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」というものでした。社会に出ると多様な人に自分の考えや思いを伝える力、相手の意見を理解して受け止める力が必要になります。その力は「書く力」に支えられているのではないかと考え、テーマを設定しました。日本語の相談では、アカデミック・ライティングだけでなく、エントリーシートや企画書をはじめ、手紙や成人式のスピーチ原稿などあらゆる文章を対象にライティングの指導を行っています。そうしてキャリア支援につなげ



ることで、社会でリーダーシップを発揮できる女性の育成を目指している点も特徴の一つです。

きっかけは英語学習支援から

ニーズに合わせて支援の幅を拡大

太田 早稲田大学の太田です。本学の「ライティング・センター」は、2004年に国際教養学部専用の機関として設置されました。英語学位プログラムを導入した国際教養学部では、英語によるレポートや論文の執筆を支援する必要がありました。そのため、設立当初は英語文章を英語で検討する「English paper discussed in English」、略してEEセッションだけを実施していました。しかし、日本語を母語とする学生の多くにとって、英語で会話をするEEセッションはハードルが高い状況でした。そのため、英語の文章について日本語で話し合うEJ（English paper discussed in Japanese）セッションを開始しました。本学ライティング・センターが最も大切に行っている理念は、『自立した書き手の育成』です。つまり、セッションが終わった後に、書き手が自分で文章を書



小林 至道氏

けるよう支援することを目指しています。そのためには、チューターとの対話の中で、書き手が自分の意図や考えを言語化することが大切です。EJセッションでは、書き手が自分の得意な日本語で、英語文章について議論することができのです。「EE」「EJ」セッションに加えて、日本語で文章を書く学生のために、日本語の文章

を日本語で検討する「J-J (Japanese paper discussed in Japanese)」セッション、留学生が日本語で文章を作成するための支援として「J-S (Japanese session for 2nd language learners)」セッションも開設されました。設立当初は国際教養学部専門機関でしたが、現在は全学の学部生、大学院生、教員が利用できるようになっています。

土屋 東京大学の土屋です。私は、2025年度4月から「駒場アカデミック・ライティング・センター（以下、CAWK）」のセンター長を務めております。本学教養学部では、1、2年生が英語の必修科目を学ぶ際の支援組織として、2008年から「駒場ライターズスタジオ（以下、KWS）」を運営してきました。英語の必修科目は大きく3つに分かれており、「FLOW (Fluency-oriented Workshop)」というアカデミック・ディスカッション、「ALFESSA (Active Learning of English for Students of the Arts)」という文系学生向けのライティング、「ALFESSS (Active Learning of English for Science Students)」という理系学生向けのライティングがあります。「ALFESSA」と「ALFESSS」では、1学

期間かけて英語の学術小論文を作成するのですが、KWSはそのサポートを行ってきました。その後、2022年に、KWSを組み込む形で全学レベルの組織として新たに設置されたのがCAWKです。当初は、1、2年生の英語学習支援が主な目的でしたが、徐々に支援の幅を拡大しており、初修外国語の学習サポートや留学生向けの日本語学習サポート、大学院生のピアサポートなども行っています。こうした取り組みにより、1年次から自立的、自発的な書き手を育成することを目指しています。

ライティングセンターの財産は人 チューター育成を重視

松田 中央大学では、2011年度に多摩キャンパスで「ライティング・ラボ」が開設されました。当初は大学院の留学生を対象に日本語で文章を書くためのサポートを行っていましたが、その後は各大学と同様に日本語を母語とする学生も対象にするなど支援の幅を広げています。本学でも自立した書き手を育成することを目指しており、対話を通じて理解を促すことが重要だと考えてい



飯野 朋美氏

ます。大学院生がチューターとして指導する形をとっていますが、希望者が減少傾向にあり、チューターの確保が難しくなっているのが現状です。続いて、どのように指導体制を構築しているのか、またどのような課題があるのかをお聞かせいただきたいと思います。

土屋 CAWKでは、所属するスタッフが教員に呼び掛

けて、関心のある大学院生をチューターとしてリクルートしています。原則としてチューターと学生は、1対1の対面でセッションを行います。複数人で学術小論文を作成する場合などには、グループ対チューター1名でセッションを行うこともあります。研修にも力を入れており、「TA（ティーチング・アシスタント）」として雇用する大学院生に対しては、教員と専門職員によるオリエンテーションに加えて、授業の見学やレポート報告、研修への参加を課しています。TAは経験を積むと「TF（ティーチング・フェロー）」になり、TAに助言しています。その後も、教員や専門職員からフィードバックを得ながら経験を重ね、学生の支援に当たっています。

太田 本学のアカデミック・ライティング・プログラムでは、学部生向け授業「学術的文章の作成」とライティング・センターという2つの教育実践を行っています。双方において、大学院生のTAが文章の個別指導・支援に当たっています。日本語文章担当のTAは、専任教員が開講する14週の授業を履修し、優秀な成績で合格した人です。ライティング・センター付きのTA（チューター）を希望する場合は、面接審査に合格する必要があります。

英語文章担当のチューターは、全学から募集し、書類と面接によって審査します。採用された新人チューターは、先輩のセッションの見学、先輩の監督下でのセッション実施を各5回以上行います。「独り立ち審査」に合格してある程度経験を積んだ上で、安定して質の高いセッションができるかどうかを見る「教育補助審査」を受けます。また、全チューターが毎週ワークショップ形式で1時間15分の研修に参加し、セッションの質を高めます。ライティング・センターの財産は人ですので、このようにチューターの研修・育成については、多くの力を注いでいます。

ライティング教育の学びがベースに 支援のコツをつかむヒント

飯野 本学では、現在は専属教員のみですが、センター設立から数年間は大学院生がチューターとして携わっていました。相談の実践に関する本で独習し、教員のセッションを見て学び、その後教員同席の下、1人でセッションを行って、フィードバックをもらう形で育成を

行っていました。ポータルサイトでの相談報告書の共有は、チューターにとって重要な学びとなります。また、チューター・ミーティングで課題とその解決法を話し合うことで、実践に対する自信を付けていく様子も見えて取れました。アメリカのライティングセンターをいくつか視察したことがあるのですが、印象に残ったのは、学



太田 裕子氏

部生がチューターをしていたことです。それが可能なのは、初年次教育としてライティング教育がしっかり行われているからだと思いました。そうしたベースがあれば、チューターを志望する学生が多く出てくるのではないかと思います。私自身、学部時代の必修科目で英語の論文の書き方を学んだのですが、それが英語で論文を書く時はもちろん、社会に出てさまざまな文章を書く際や、現在のライティングセンターの仕事でも役立っていると感じています。やはり、ライティングの授業を受け、執筆のプロセスをしっかりと学ぶことが、まずは重要だと思います。

小林 本学もAWCでのセッションを担当するのは、大学院生のチューターです。チューターは毎年度前期と後期に1回ずつ、学内の公募に加え、研究科や先輩チューターからの推薦で募集しています。チューターは、ライティング支援・教育の専門性を有するAWC教員が作成した研修プログラムの受講を通して、1〜2カ月かけてライティング支援方法の基本を学びます。AWCでの支援は、一方的な添削ではなく、対話を通じて書き手本人の気付きを促すという独特の方法を取ります。そのコツを

つかんでもらうために、まず講義形式で支援方法の要点を学び、その後に模擬セッションを行い、研修後のOJTと合わせて、チューターとしての経験値を積むことを重要視しています。現状の大きな課題の一つは、英文のライティング支援をできるチューターが集まりにくいということです。本学は規模の割に大学院生が少なく、英語論文の執筆経験が豊富なチューターの確保が開設以来ずっと困難な状況です。その点に関して、打開策を考えなければならぬと思っています。



ライティングセンターへの入り口

セッション参加の前に、気軽なスタイルから

松田 本学では、昼休みにライティングのオンライン講座を開催するなど、1対1のセッション以外にもライティング支援を行っています。各大学でそうした例があ



土屋 和代氏

れば教えてください。

太田 本学では、学部初年次生を主な対象として、「学術的文章の作成」という単位科目を開講しています。この科目は全学の学部生が履修でき、4つの学部1年生の必修科目となっています。また、全学部の新入生を対象とした視聴必須セミナーとして、レポートや論文の書き方を20分程度の短い動画で配信しています。他にも、1学期に1〜2回のワークショップを開催して、問いの立て方、研究計画書の書き方、引用の仕方等、ニーズの高いテーマでワークショップを開催しています。

飯野 本学では、『レポートの書き方』という小冊子を作成して配布しています。A5版の薄い冊子で、論文の書き方をコンパクトにまとめています。元々、PDF版もWebサイト上に掲載しているのですが、中には小冊子がポロポロになるまで使っている学生もいます。また、週に2回、ライティングカフェというイベントを開催しており、英語話者の先生とオンラインで気軽に英語でしゃべりできる場を作っています。予約不要でハードルが低いので、それをきっかけにライティングセンターへ相談に来る学生もいます。

小林 本学でも2018年度以来、昼休みの時間帯に、アカデミック・ライティングの基本的な作法・ルールを1回30分で気軽に学べる場を設けています。コロナ禍を機に、教室での実施からオンライン動画の配信に切り替え、現在は1回30分の動画7本を大学のLMS（学習管理システム）にアップし、学生がいつでも・どこからでも視聴できるようにしています。また、専任教員から依頼があった場合、授業の1コマ（90分）を使って、AWC教員がレポート・論文の書き方に関する出張講義をするという連携も行っています。

留学生の増加と多言語化への取り組み

松田 各大学のライティングセンターがさまざまな形で支援に取り組まれていることがよく分かりました。日本語を母語とする学生向け支援が充実していく一方で、近年は留学生の増加に伴い、多言語化への対応も求められています。その点に関して、どのような取り組みをされているかをお聞かせください。

土屋 本学の駒場キャンパス自体が、例えば「グローバ

ル・スタディーズ・イニシアティヴ（GSI）」というプロジェクトを実施するなど、複数の言語・地域にまたがる研究・教育を推進しています。CAWKは、そのような環境下で留学生や日本の学生を支援する一方、外国語クラスの先生方の支援・協力も得ながら、さまざまなバックグラウンドを持つ留学生の方にもTAとしてライティングやスピーキングの支援を行っていただいています。長年にわたり多言語化に向けた努力を重ねてきた、と言えます。

太田 本学のライティング・センターでは、4つのセッションカテゴリーに加えて、会話の言語を多言語化しています。2025年秋には、英語文章をベトナム語で検討するEVセッション、日本語文章を中国語で検討するJCセッションを開設します。過去にも、同様の取り組みを実施していましたが、セッションを審査できるスタッフがいらないという理由から、取りやめた経緯がありました。これからは、ライティング・センターの理念をしっかりと研修した上で、多言語化を推進していく方向で考えています。

小林 AWCでは留学生に対しても一般の学生同様に、



日本語での対話によるライティング支援を行っています。ただ、留学生の日本語のリテラシーは個々人で大きな差があり、ネイティブと変わらない日本語のリテラシーを持っている留学生もいれば、文法の基礎から学ばなければならぬ人もいます。そのため、日本語でアカデミックな文章を書く以前の基礎的な日本語教育は正課授業で、日本語で書かれたアカデミックな文章の支援はAWCで……といった具合に、正課授業とAWCで役割を分担しながら、留学生の支援を行っています。しかしながら、留学生にとっては、そのすみ分けが分かりにくく、AWC

を利用するハードルが高い印象を持たれることもある点は、現在の課題です。

生成系AIの登場

「書くこと」にもたらした影響

松田 近年の生成系AIの登場は、本学でも悩ましい問題となっています。大学としての方針は定めているものの、生成系AIで作成したと思われるレポートや論文が目につきます。ライティングセンターとしても大きな影響を受けているかと思いますが、現状や課題についてお聞かせいただければと思います。

飯野 生成系AIで書いたと思われる文章を読むと、一見、上手に書けているようで、どこかのっぺりとした印象を受けます。その理由は、文章の中に自分が考えた「思考の跡」が見えないからだと思います。ある学生が何かの志望理由を生成系AIに書かせたところ、「自分の志望理由に感じられない」と思ったそうです。それこそがまさに生成系AIが書いた文章の特徴だと思います。試行錯誤して書いた文章であれば、どこかにその形跡が見ら

れ、実感を伴った言葉が出てくるはずです。本学のライティングセンターの役割の一つが、学生が持っている潜在的な力を引き出すことだと考えています。問い掛けを重ねて、学生が考えていることを引き出していくことが大切ですし、自分自身に問い掛けながら書くことで、自立した書き手になっていくのだと思います。ライティング教育は、ただ文章の書き方を学ぶだけでなく、資料を読み解いたり、クリティカルに考えたりするなど、大学教育に必要な大切な要素が詰まっています。そうした学びをライティングセンターとして支援していきたいと考えています。

太田 生成系AI利用への対策については、まだ手探りの状況です。授業で指定の参考文献を引用して文章を作成する課題を出した際、参考文献の内容を改ざんしたり、実在しない文献を捏造ねつぞうしたりした文章が見られました。生成系AIに文献を読み込ませ、引用するよう指示したことで起きた事象です。生成系AIは参考文献を勝手に要約したり、架空の文献を作成したりする性質があるため、原文と異なる内容が記載されていたのです。学生が生成系AIを使う理由は、「時間がなかった」「楽を



松田 美佐氏

したかった」「文章を打ち込むのが面倒」「長い文章を読むのが面倒」というものでした。自分で読んで考えたり、手を動かして書いたりすること自体を放棄する学生が一定数いるのです。他者が懸命に考えた文章を改ざんすることは著作権を侵害する行為ですし、生成系AIであっても他者の情報を使う場合は引用し出典を示す必要があります。

ります。ライティング・センターとしても、自分の考えや文章と、生成系AIを含む他者の考えや文章を明確に区別することの大切さ、自分自身で思考することの大切さを、これまで以上に伝えていく必要があると痛感しています。生成系AIは一瞬で情報を提供してくれますが、ライティング・センターのセッションはじっくり時間をかけて行います。書き手が考え、迷い、決断するプロセスに寄り添って待ちます。この、時間のかかるプロセスが、生成系AIにはない、ライティング・センターの強みだと思います。また、生成系AIは書き手を批判しません。人間の読み手からは素朴な疑問や批判的な問い掛け、「分からない」という反応が返ってきます。そうした「人間の『読者』の視点」を持ち、自分が書いた文章を批判的に振り返る大切さも伝えていきたいと思っています。

生成系AIの限界 重要性を増す人間の「書く力」

小林 生成系AIの登場とともに、直近2年間のAWC

の利用者が少なからず減少している実感があります。生成系AIはボタン一つですぐに答えを出してくれますが、大学生にとっては、自分の頭で考えて、自分の手で文章を書くというプロセスが重要なことは間違いありません。こうした時代的な変化を鑑みて、AWCとしては、人々とのコミュニケーションを通してしかできないことがあるという強みを自覚し、その強みを前面に押し出す形で、組織的な運営をしていかなければならないと考えています。

土屋 本学では、2023年に生成系AIの使用に関する全学的な方針を打ち出しました。生成系AIの使用を一律に禁止することはせず、使用については各担当教員に判断を委ねつつ、大学での学びにおいては知識生成の過程や洗練化の過程を通して思考能力を高めることが重要である、という大原則を確認しています。生成系AIの可能性を積極的に探りながらも実践的な注意喚起も重視しています。具体的には、生成系AIが作成した文章をそのまま使わず、誤りやアルゴリズムに基づくバイアスが存在する可能性に注意を払い、必ず自ら文章を吟味して修正するよう促しています。他にも、著作権や情報漏洩の問題などに配慮した方針を打ち出しており、C

AWKではそれらの方針に基づいてTA・TFの指導を行っています。ところで、先日、2026年には生成系AIの性能向上に必要なWeb上のテキストデータが枯渇する可能性がある、との報道がありました（「データが足りない、ChatGPTも伸び悩み？」 業界が探る対応策」『朝日新聞』2025年8月31日）。その解決策として、生成系AIが出力したテキストを再び生成系AIが学習する方法が検討されているようです。しかし、その場合、生成系AIが生み出した誤りや偏りが学習に取り込まれ、将来の出力に影響する恐れがあります。そもそも幅広い知識の獲得を十分にできない可能性も指摘されています。そうした報道を見て、生成系AIの進歩によって人間が文章を作成する必要が減るどころか、人間が書いた良質な文章がより一層求められる、という逆説的な状況が生まれていると感じました。アカデミック・ライティングは生成系AIの登場により、これまで以上に重要性を増しているように思います。

書くことは考えること

情報共有からライティング教育の発展へ

松田 非常に参考になるご意見をありがとうございます。最後に、ライティングセンターの今後の展望について、皆さんのお考えをお聞かせください。

太田 本学のライティング・センターの利用者数は、生成系AIの影響もあってか、減少傾向にあります。あらためて、存在を周知するための広報活動にもっと力を入れなければならないと感じています。本学は規模が大きく、ライティング・センターの利用者もそれなりにいますが、それでも全学生の3%に満たない状況です。人と対話するライティング・センターの存在や良さを周知できれば、自分で考え、書くことを楽しめる学生に、もっと利用してもらえるようになると思っています。

土屋 皆さんのお話を伺い、アカデミック・ライティングとは、近年よく議論されている「ネガティブ・ケイパビリティ」、つまり答えの出ない事態に耐え抜く力を鍛える方法ではないかと思いました。文法的な正しさや、文章としてのもっともらしさだけでなく、独創的な発想力、

それを支える確かな検証能力や根拠の示し方、そして自分らしい文章やスタイルを育むことがライティング・センタールの役割である、とあらためて感じました。

小林 今回の座談会を通して、各大学がさまざまな創意工夫の下、素晴らしい試みを実践されていることを知りました。ただ、せっかく培われた実践知が、各大学の取り組み内で埋もれてしまいがちになっていると感じています。そのため、そうした創意工夫や具体的な実践をもっとオープンに情報共有して、各大学の関係者が相互に交流していけるようなコミュニティが必要なのではないかと思っています。

飯野 ライティングセンターの取り組みは、成果が見えにくいところが課題だと感じています。また、正課科目との連携もまだ進んでおらず、学内での認知度も十分ではありません。そうした課題を解決するためにも、小林先生がおっしゃったように、ライティング教育に関して大学間で情報共有していくことが重要だと思います。そうしてコミュニティが広がることで、日本のライティング教育やライティング支援がより良いものになっていくことを期待しています。

松田 私自身、常日頃から本学のライティング・ラボを利用して、ライティング支援の有用性を実感しています。その活動をさらに広げていくためにも、先生方がおっしゃるような情報共有を進めていく必要があると思います。今回の座談会を機に、そうした動きが始まることを期待しています。本日はありがとうございました。



専門ミュージアム

—大学の知と文化の発信拠点—

大学におけるミュージアムは、学術研究や教育活動の中で蓄積された資料を保管・公開する場であるとともに、大学が有する知的資産を広く社会に発信する役割も担っている。なかでも、特定の学問領域に特化したミュージアムは、専門性に根ざした展示や企画を展開し、学術的な価値に加えて、教育的・文化的な意義を併せ持つ場として注目を集めている。こうした専門性は、大学固有の歴史や強みに支えられており、その大学の個性や魅力をかたちづくる要素ともなっている。

近年では、展示手法の工夫や体験型プログラムの導入に加え、教育課程との連動、地域との協働など、活動の幅はより多様で開かれたものとなってきた。また、学生

CONTENTS

京都国際マンガミュージアムの20年

—京都精華大学の取り組み—

勝島 啓介

京都精華大学 京都国際マンガミュージアム事務局長

都会で感じる海と人のつながり

茂木 正人

東京海洋大学 海洋環境科学部門教授・
マリンサイエンスミュージアム館長



University Museum

が展示企画やガイドに関わる事例も増え、学びのフィールドとしての可能性も広がっている。

本特集では、こうした大学ミュージアムの取り組みに焦点を当て、専門性を軸とした理念や運営の工夫、教育・社会との関係性などを紹介する。展示や来館者との交流を通じて見えてくる、大学と社会の新たな接点にも注目したい。

芸術の秋に刊行する本号を通じて、大学から生まれる知と文化のかたちをあらためて紹介し、大学ミュージアムが持つ潜在的な力と今後の可能性を展望する機会としたい。



時をこえて響く音

―活用と保全の調和を目指した知の発信―

不動 真優

国立音楽大学楽器学資料館主任学芸員・課長補佐

都心で見学できる化石の水族館

宮田 真也

学校法人城西大学

水田記念博物館大石化石ギャラリー学芸員・理学部助教

創立100周年を迎える演劇博物館の活動

児玉 竜一

早稲田大学文学部教授・

演劇博物館長

小さくてもきらりと光るミュージアム

―学習院の歴史と知の集積を未来に伝える―

長佐古 美奈子

霞会館記念学習院ミュージアム、
学習院大学史料館学芸員

京都国際マンガミュージアムの

20年

—京都精華大学の取り組み—

勝島 啓介

京都精華大学

京都国際マンガミュージアム事務局長

1—大学ミュージアムの設立背景と運営理念

「京都国際マンガミュージアム」は、京都精華大学と京都市との共同事業として、2006年11月25日に開館した本学の学外施設で、2026年度には開館20周年を迎える。

設立の背景として、本学が1973年に美術科にマンガクラスを設置したのち、2000年に芸術学部マンガ学科へと昇格、開館する2006年にはマンガ学部を設置していた。マンガ研究のための国内外に向けた拠点を

くる必要性から、2003年に当館の構想は生まれ、具体的な場所として挙がったのが元龍池小学校の校舎だった「写真1」。

京都市と本学と地域との三者間協議を重ね、2004年9月に合意、翌2005年10月に公表されたが、地域の方の不安はすぐには解消されなかった。故河合隼雄文化庁長官を招いたフォーラムを開くなど、説明を続けた結果、「伝統を守りつつ、新たな文化を創造し続けた京都だからこそ、世界から注目をされる日本のマンガ文化の拠点にふさわしいのではないか」と、地元の皆様からの賛同と協力を得ることができた。

JR京都駅から市街地方面に地下鉄で約5分という交通の至便があり、2024年度の年間来館者数は、コ



〔写真1〕外観

ナ禍前の2019年度とほぼ同じ約27万人に回復した。国際観光都市としての京都の知名度による波及効果もあるが、近年では観光地として当館を目的に来日する外国人も着実に増えている。累計来館者数は、2023年に400万人を突破。国内外からの視察や取材も年間約300件をキープする。

2 資料の収集・保管・活用に関する工夫

当館の所蔵資料は大半が寄贈によるものである。開館当初からたくさんの寄贈のご協力をいただいたおかげで、開館10年を待たずに所蔵数は30万点（開館時は20万点）を超え、容量の限界が見えてきた。そのため、現在資料の寄贈は原則受け付けていない。とはいえ、資料の増加が全くストップしているわけではない。企画展をメインに、館内で開催される展示の関連資料や定期的に組まれる特集棚の資料などには、新規購入分もある。その他、当館に設置されている事業推進室が企業や自治体などから受注し、制作している「実用マンガ」もストックしている。その内容は社史や創業者の伝記、医療現場の補助資料な

ど多岐にわたる。一般的な出版物の流通ルートに乗らない資料が収集できるのは、館内で制作している強みの一つであろう。

当館の主な収蔵スペースは、「マンガの壁」と呼ばれる開架と、建物地下にある収蔵庫（＝閉架）である。所蔵資料約30万

点のうち「マンガの壁」

には約5万冊が収められている。収蔵庫は2カ所あり、1つは主に1950年以降の雑誌と単行本による北館収蔵庫、もう1つは明治時代以降の風刺画雑誌や一般書籍の流通とは異なった赤本や貸本、各国で出版された海外マンガなどによる本館収蔵庫がある「写真2」。

「マンガの壁」の資料は、来館者が自由に手に取って読むことができる。「自分で」元の場所に戻すことを暗黙のルールとして、敷地内であればどこにでも持って行ける（トイレなど一部を除く）。人工芝が敷いてあるグラウン



[写真2] マンガの壁

ドで寝ころがってマンガを読む風景は、当館のアイコンのひとつとも言える。資料の持ち運びが自由な分、紛失や盗難を心配する声もある。だが、動きの多い開架資料は年1回の蔵書点検を行っているが、ここ数年の紛失率は0.1%を下回るほど低い（2024年度実施時は紛失率0.02%だった）。一方、開架資料を利用する際は、研究閲覧室を設けており、事前の登録と予約により、その資料を閲覧することができる。

資料の活用という意味では、「何を読もうか？」と迷う方にナビゲーションとなる特集棚をいくつか設けてマンガを紹介・提案している。こちらからアプローチすることで、偏りがちな開架資料の利用を分散させたいという意図もある。このコーナーは「えむナビ」と呼ばれ、館内3カ所で展開している。1つ目の棚では、主に企画展と連動した特集を組んでいる。企画展で取り上げた作家の作品を集めたものから、グルメマンガ、化け猫マンガ、子育てマンガ、アフリカが舞台のマンガなど、これまでさまざまな切り口でテーマを設けてきた。2つ目の棚では、前年に邦訳出版された海外マンガ（IIガイマン）を、3つ目の棚では、前年にマンガの賞に入賞またはラン

キングに入った作品（IIベストマンガ）を紹介している。「ガイマン」と「ベストマンガ」は年1回更新されるため、話題性の高い作品が並ぶ。

館内で開催される企画展では、所蔵資料が展示品として公開されるほか、企画展関連資料を手に取って読めることもある。

3—展示企画の特徴や反響の大きかった事例

当館では年3回の企画展を柱にさまざまな展示を開催しており、所属の学芸室職員や、運営母体である京都精華大学国際マンガ研究センターに所属する教員が順番に担当している。

ラインアップのコンセプトは、研究者による学術的な切り口や、国際的な視点を意識したもの、毎年開催しているKYOTO CMEEX主催による京都国際マンガ・アニメフェアとの同時開催によるものに分かれる。

一例を挙げると、2024年秋から2025年春にかけて開催した企画展「のこす！いかす!!マンガ・アニメ・ゲーム展」は、文化庁「メディア芸術連携基盤等整備推進



「写真3」の「のこす!いかす!!マンガ・アニメ・ゲーム展」フライヤー

事業成果発表展」という位置づけで、2010年より文化庁が実施してきたメディア芸術のアーカイブ（収集・保存・活用）事業がどのような取り組みなのか、マンガ・アニメ・ゲーム分野それぞれに紹介した展示である「写真3」。マンガ分野ではもちろん「マンガ資料」を展示しているが、それは出版された作品の原画や本・雑誌だけではなく。作家自身が参考資料として作ったスクラップブックや、取材時に撮影した写真、または、印刷に使われていた垂鉛版、幼少期のマンガ作品など、作品が生まれ、読者に受容され、次の作り手・作品につながると

いう、一連の過程で生まれるあらゆるものが「マンガ資料」として考え得るということを実感できる。このような中間生成物についても、「いったいどこまで、誰が、どう収集し、保管し、活用していくのか」を考えるきっかけとなることを企図した展示であるが、当館でもさまざまな場面で同じような問いに向き合い、日々試行錯誤している。

4—教育・研究との連動

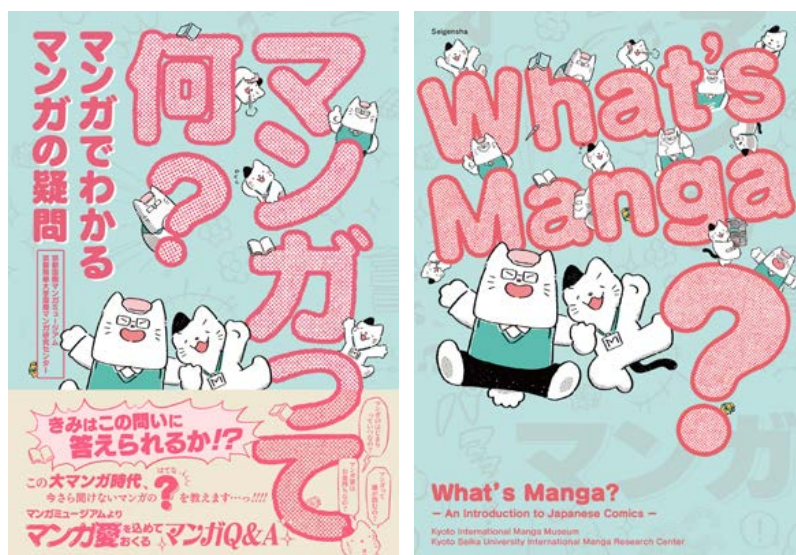
2006年に日本初のマンガ学部を、2010年には日本初のマンガ研究科を開設した、運営母体の本学ではマンガを単なる資料として扱うのではなく、その表現やメディアとしての本質を明らかにしていくことで「マンガとは何か」を追究してきた。さらに本学の研究機関「国際マンガ研究センター」との連携により、教育活動とともに幅広い研究成果をミュージアムでも発表してきた。

このような活動成果をまとめた館の公式ガイドブック「マンガって何？マンガがわかるマンガの疑問」の日本語版を2024年に、英語版を2025年に刊行した「写真4」。

日本語版のあとに出版した英語版の売れ行きが実に好調であることから、海外からのマンガに対する注目度の高さが感じられる。

教育の現場としては、博物館学芸員や図書館司書の資格取得のための実習生

をはじめ、大学コンソーシアム京都の産学連携教育プログラムを積極的に受け入れるなど、後進の育成に取り組んでいる。また、学生に限らず、マンガ資料の保存および活用は、まだまだ手探りの状況であることから、他のマンガ関連施設から依頼があれば、独自で研修プログラムを設け、相互の施設の情報交換など、マンガ資料を取り扱う職員の教育



[写真4] 青幻舎「マンガって何?」左:日本語版、右:英語版

活動にも微力ながら取り組んでいる「表1」。

5—社会貢献・地域連携・市民との協働プログラム

当館は先に触れたように元龍池小学校の校舎を活用し、当時の佇まいを残している。それは長年地域のシンボルであった小学校の役割を引き継ぐという意味であり、地元との連携が極めて重要と考えるからである。館内に設けている龍池歴史記念室では1869年に開校した日本における最初の学区制小学校（番組小学校）の記録と記憶を常設で展示している。少子化の影響による1995年の閉校後も、龍池自治連合会が当館と共存共栄する形で、地域の集会所（通称T'sサロン）や会議室を設け、閉館後のグラウンドや体育館では、これまでどおり地域の活動を続けてもらっている。また、災害時には龍池学区の避難所として開放される。

自治連合会の具体的な活動として、所属する各団体の月例会議をはじめ、なぎなた、卓球、太極拳、ゲートボールなどの体育会系の活動、「ふれあい」、「制作」、「さわやか健康」、「キッズパーク」、「歌声」などのサロンが開催

会期・実施日	過去3年に実施した主な企画展・イベント・シンポジウム・ワークショップなど
2023年3月18日～5月28日	ワークショップ・企画展/あつまれ！マンガワークショップ博
2023年4月30日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート27～
2023年5月28日、29日	国際学術会議/メカデミア（Mechademia）
2023年6月17日～10月3日	企画展/デビュー50周年記念 村上もとか展「JIN-仁-」、「龍-RON-」、僕は時代と人を描いてきた。
2023年8月8日	ワークショップ/夏休みオンラインマンガ教室マンガの“ネーム”を描いてみよう！
2023年8月12日～2024年7月19日	企画展/第11回「大マンガラクタ館」こどものぜいたく、別冊付録だーい！
2023年8月20日	トークイベント・ワークショップ/荒俣宏館長の「こども妖怪教室」
2023年10月26日～2024年2月18日	企画展/「アフリカマンガ展」
2023年10月29日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート28～
2023年11月26日	イベント/荒俣宏館長&京都精華大学 堤邦彦教授と巡る 京都妖怪ツアー ～鬼の反乱と蛇の執念～
2023年12月9日	イベント/マンガカフェ シーズン2 第2回「2023年のマンガ界を振り返るぞ！」
2024年2月11日	トークイベント/荒俣宏館長の節分おぼけ☆仮装百鬼夜行
2024年2月27日・3月5日	イベント/2024えむえむ建築ツアー
2024年3月14日～6月25日	企画展/What an OHINATAful World～この素晴らしいきおひなたごうの世界～
2024年3月23日	ワークショップ/春休みオンラインマンガ教室/マンガの“ネーム”を描いてみよう！（第2回）
2024年5月5日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート29～
2024年6月15日	イベント/荒俣宏館長イベント「栗塚旭出演・最新映画作品を観て語る会～小泉八雲の故地をめぐる、ちょっと「怪談（くわいだん）」な話～」
2024年6月23日	イベント/第23回日本マンガ学会大会 シンポジウム「マンガと〈展示〉」
2024年7月13日～10月8日	企画展/九井諒子展 & 「ダンジョン飯」迷宮探索展
2024年7月20日～現在	企画展/第12回「大マンガラクタ館」「終戦直後の子どもマンガ」特集/すきっ腹もマンガをよんで満腹、元氣も勇氣も出た！
2024年7月27日、28日	ワークショップ/京都国際マンガミュージアム×KAM（カム） 能美市九谷焼美術館「人気キャラクターの九谷焼絵付け体験」
2024年8月11日	イベント/荒俣宏館長の「こども妖怪教室」2024
2024年9月21日	イベント/コスプレパフォーマンスステージ「コスミート102」
2024年9月21日、22日	イベント/アニメ映画上映イベント「KYO-MAF“Anime Cinema Night”」
2024年9月29日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート30～
2024年10月1日～現在	企画展/オンライン展覧会 マンガ・パンデミックWeb展 2024
2024年11月17日	イベント/ルノー・ルメール トークショー/マンガを受け継ぐ：マンガからMangaへ、そしてMangaからマンガへ
2024年11月23日～2025年4月15日	企画展/文化庁メディア芸術連携基盤等整備推進事業成果発表展 「のこす！いかす！！マンガ・アニメ・ゲーム展」
2024年11月30日、12月1日	イベント/マンガ出張編集部@京まふ
2024年12月21日	イベント/マンガカフェ シーズン2・第3回「2024年のマンガ界を振り返るぞ！」
2025年1月12日	イベント/トークイベント「グラフィックノベルにこめたメッセージ」
2025年3月1日	イベント/第10回 日文研－京都アカデミックブリッジ 「岩倉使節団150年：マンガで考える日本の近代」
2025年4月13日	イベント/対談イベント「ちばてつや×養老孟司ミュージアム発・マンガの未来へ」
2025年4月26日～7月1日	企画展/マンガとボードゲーム展
2025年5月4日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート31～
2025年5月24日～6月24日	企画展/台湾の少年と日本の少年～巡り合うマンガ文化の百年
2025年6月7日、8日	国際学術会議/メカデミア（Mechademia）
2025年7月3日～8月17日	企画展/「マンガで考える人権問題：マンガ家が語る10のストーリー」展
2025年7月12日～11月25日	企画展/「琉球新報ギャラリー」（沖縄）～「京都国際マンガミュージアム」（京都）巡回展 マンガと戦争展2
2025年7月13日	イベント/シンポジウム「村上知彦のいない日々のために」
2025年7月26日～8月24日	ワークショップ/オリジナル缶バッジを作ろう！
2025年8月2日、3日	ワークショップ/京都国際マンガミュージアム×KAM（カム） 能美市九谷焼美術館「人気キャラクターの九谷焼絵付け体験」
2025年8月9日	イベント・企画展/終戦80周年記念トークイベント&ミニ原画展 夏とモノクローム ～日本映画黄金期の女性映画人～

[表1]過去3年の主な企画展・イベント・シンポジウム・ワークショップリスト

されており、ミュージアムの来場者は烏丸通から、地域の関係者は反対側の両替町通から入館されることになっている。当館はそれぞれの活動や目的に応じて施設を管理する調整役を担っている。

毎年恒例の催事として、8月のたつつけ夏祭りでは、近隣の学校有志によるバンド演奏、祇園祭山鉾のひとつ鷹山の祭り囃子などが演奏され、当館専属スタッフによる似顔絵サービスの提供や、館内に常設小屋があるヤッ

サン一座による紙芝居も祭りを一緒に盛り上げる「写真5」。ほかにも、10月の体育祭では、当館も町内会のひとつ「えむえむ町」（「えむえむ」は、マンガとミュージアムそれぞれの頭文字Mからとった通称である）として参加し、綱引きやリレーなど出場できる競技に



〔写真5〕たつつけ夏祭り

は当館スタッフが積極的に参加し、最後に行われる抽選会も含め、参加された町内の方々との親睦を兼ねた慰労会が開かれる。

新しい取り組み例として、地元の少年補導委員会との協働による、子どもたちを対象としたワークショップがあり、「地元からマンガ家がデビューしたら良いな」をテーマに「第1回たつつけマンガ道場」を始動させた。

6 国際を冠する施設として

結びに、館名の冠にもある「国際」的な活動について紹介したい。2024年度の来場者のうち約8万人が海外の方で、開館以来はじめて入場者全体の3割を超えた。国・地域数は100カ国を超え、トップ3は、アメリカ（約1万4953人）、中国（約1万4004人）、フランス（約1万3183人）で、いみじくもそれぞれ、アメリカン・コミックス、連環画、バンド・デシネと、日本のマンガとの影響関係を持つ国が並んでいる。受付スタッフが「どこの国から来たのか」を来場者から丁寧に集計したところ、明らかに変わった結果である。

館内表記については、現在は日本語と英語のみに絞っているが、これは解説パネルが増えることで逆に分かりにくくなるのを避ける意図がある。最近はスマートフォンをかざせば、多言語に翻訳してくれるアプリが充実してきたことも大きい。

2025年の国際的な企画として、大阪・関西万博の国連パビリオンにおいて、国連人権高等弁務官事務所との共催で人権をテーマにした展覧会を開催した。ジェンダーや思想と表現の自由など、人権にまつわる10のトピックスをテーマに、10人のマンガ家を描き下ろした作品を展示したが、好評につき当館でも巡回展を開催した。また、同じ万博のイタリア館にて、来日したイタリアのフリウリ・ヴェネツィア・ジュリア州にあるポルデノーネ漫画館と当館との間で、相互協力に関する意向表明書の調印を取り交わした。

今年は他にも、企画展「台湾の少年と日本の少年」巡回合うマンガ文化の百年」を開催した。本展では台湾と日本がたどってきた近現代史を追いながら、時代的、政治的な要因がマンガ文化に与えた影響と、それに抗い表現を切り開いてきたマンガ家・編集者たちを紹介した。開

幕式では台湾から伝統的な人形劇である「布袋劇」の劇団を招くなど、この展覧会の文化的背景を深めるイベントも実施した。なお同展は、台中にある國家漫畫博物館に巡回されることが決定している。

はじめに触れたように、当館は2026年度で20周年を迎えるが、近年では、マンガを取り扱う施設、あるいはこれから計画をしている国や地域から、さまざまな形で協力や連携に関する依頼が増えている。この間の活動を通じて、当館ならびに本学の存在や理念が少しずつ認知されてきたことを大変光栄に感じる。しかし、もちろん現在でも「マンガとは何か」という問いかけは、試行錯誤の中にあり日々実験が続けている。今後も京都から「マンガって何？」を探究しながら、社会や世界ともつながる大学の専門ミュージアムでありたいと願う。

〈参考文献〉

吉村和真（京都精華大学）「学外施設『京都国際マンガミュージアム』による社会連携・社会貢献」「大学評価研究」第16合抜刷（公益社団法人大学基準協会総務部、2017年10月発行）
大谷景子（京都国際マンガミュージアム学芸室）「マンガ資料の収集・保管・公開」とはどういうことか？」「専門図書館No.321」（専門図書館協議会、2025年6月発行）

都会で感じる

海と人のつながり

茂木 正人

東京海洋大学海洋環境科学部門教授・
マリンサイエンスミュージアム館長

1 海の標本が語るキャンパスミュージアム

東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムは、本館、隣接する鯨ギャラリー、そして練習船「雲鷹丸」うんようまるから構成されている。鯨ギャラリーには、巨大なセミクジラとコククジラの全身骨格が展示されている。雲鷹丸は明治時代に建造された3本マストの練習船で、現在は品川キャンパス内で陸上保存されており、登録有形文化財に指定されている。

本館は2階建てで、1階の大部分は標本収蔵庫となり、魚類標本など数万点が保管されている。1階ホール部分と2階は展示室として利用されており、魚類や海鳥類の

はく製、貝類や甲殻類の標本、鯨類骨格標本、歴代練習船の模型、漁網、養殖に関する展示、水産食品など、海洋・水産に関わる多様なコレクションが並ぶ。

コレクションは東京水産大学（東京海洋大学の前身）の研究教育の歴史をそのまま反映しているといっていだろ。大げさかもしれないが、それは日本の水産史でもある。雲鷹丸は建造当時、漁業開発や水産研究教育を担っており、船上でのカニ缶詰加工技術を開発したのも雲鷹丸といわれている。いわば蟹工船のはしりである。練習船「海鷹丸Ⅱ世」うみたかまるは戦後復興の象徴ともなった第1次日本南極地域観測隊（1956～57年）に「宗谷」とともに参加した。このとき南極海で採集されたペンギン類や海鳥類、アザラシなどのはく製は、その直後に発効した南極条約によって保護対象となったため、国内では極めて貴重な標本となっている。

魚類標本の展示は必ずしも充実していないものの、やはり日本の水産史を反映している。例えば、展示の約半分はサケ科魚類が占める。言うまでもなく、サケ・マス類は水産上重要なグループであり、長く研究対象となってきた。現在では外来種問題の方が注目されるが、ソウギョ、ハク

レン、ダントウボウといったコイ科淡水魚の展示もある。これらはかつて成長の早い養殖対象種として中国から国内に持ち込まれ、本学でも研究対象とされたと思われる。

もちろん、教育研究史は現在も進行中である。本館でコククジラの骨格標本が展示されているが、この標本はあえて頭部以外は組み立てずに、さながら収蔵庫の中の

ように、バラバラの脊椎骨などを並べるにとどめている「写真」。これは展示標本といえども、いつでも研究に供することができるようにしているためである。

当館の展示テーマは「海へのいざない」とされているが、実際には「日本の水産業・水産



〔写真〕コククジラの骨格標本

教育研究の発展の歴史へのいざない」といった方が実態に即しているかもしれない。

2—震災と戦争を越えて—博物館の歩み

順番が前後するが、当館の歴史は、東京水産大学の前身である農商務省水産講習所に標本室が完成した1902年に始まる。標本室は整備が進みコレクションも充実していったが、1923年の関東大震災によりすべて焼失してしまった。その後、1936年に再建されたものの、1945年の敗戦に伴い東京越中島の校舎は進駐軍に接収され、標本室も閉鎖される。

1947年には水産講習所が横須賀市久里浜の旧軍施設へ移転したが、このとき多数の標本や模型が破損・紛失した。その後、大学の改組を経て1957年に東京水産大学は現在の品川へ移転を完了し、木造1棟を水産博物館として標本類の収蔵を開始した。現在の建物は1971年に完成し、名称も水産資料館と改められた。2016年には耐震改修と増築を行い、マリンスイエンスミュージアムとしてリニューアルオープンし、現在に至る。

先ほど「歴史へのいざない」と標榜したばかりだが、震災や戦争で多くのコレクションを失ったことは誠に残念である。ここで、もう一つ触れておきたいのが練習船「はやぶさ丸」である。はやぶさ丸の前身は、ビキニ環礁近海でアメリカが行った水爆実験で被曝した第五福龍丸である。被曝後は東京水産大学の係船場で検査・除染され、そのまま大学に払い下げられ、10年以上にわたり練習船として活躍した。引退後は廃棄業者に引き渡されたが、保存を求める市民運動を経て東京都の所有となり、現在は「都立第五福龍丸展示館」で展示保存されている。しかし、はやぶさ丸の歴史については本学の学生の多くが知らず、教職員でも認識していない者が少なくない。現在、本学に残されているのは文献資料のみだが、本学の重要な歴史の一部として、悲惨な歴史を繰り返さないためにも、当館でできることはないか模索している。

3 市民とともに育つコレクション

本学の品川キャンパスには、自然科学系のみならず、文系や工学系の分野もあり、展示内容にもその多様性が反映

されている。一方で、歴代館長は、博物館での勤務経験を持つ教員か、生物分類学を専門とする教員が務めてきた経緯があり、そのため収蔵庫の研究用資料の多くは、魚類や無脊椎動物を中心とした生物標本で占められている。

展示用資料については積極的な収集は行っていないものの、一般の方から寄贈の申し出をいただくことは少なくない。代表的な例として、数百点に及ぶ甲殻類のコレクションや、鯨類ほぼ全種を網羅したミニチュアコレクションなどがあり、これらは展示資料として活用している。

そのほか、特に多いのはウミガメ類のはく製の寄贈申し出である。ウミガメ類はすべてワシントン条約附属書Ⅰに掲載され、国際取引が禁止されている。また、種の保存法でも保護が義務付けられている。かつて土産物として海外から持ち込まれた個体が国内に相当数残されており、不要になって処分困った方々から寄贈が申し出られることが多いようである。

しかし現在では、原則として受け入れを行っていない。理由は、産地や採集年といった生物標本として不可欠な情報が欠落している場合が多く、科学的価値がほとんど認められないためである。そのような個体を多数所有す

る意義は見出し難く、加えて、防虫処理など保管には一定のコストも必要となる。すでにタイムイなど複数ののはく製が収蔵庫に保管されているが、これ以上の受け入れは慎重に判断している。

4 学生が学びを体験する場として

本学には学芸員コースが設置されており、博物館実習の一部が当館で行われている。実習生は、オープンキャンパスや大学祭の際に、館内を紹介するパンフレットの作成をするほか、当日は、受付業務、館内の案内、展示のガイドなどを交代で担当する。こういった日は、1日あたり3千人程度の来館者を迎えることもあるが、実習生が主体的に業務を担っている。

また、講義の一部には当館を利用するものもあり、水産経済史や博物館教育論などがその例である。加えて、当館での実習ではないが、ある英語の授業では、学内で撮影した映像に英語のナレーションを付し1本の動画を完成させる課題が課される。その際、多くの学生が当館の展示を題材としている。

このように、海洋に関する多様な資料が一堂に集まる当館が、学生にとって身近な存在となっていることは、大学博物館の重要な存在意義の一つであるといえよう。

5 地域とつながる海の学び

本学は東京都港区と連携協定を締結しており、その一環として港区立郷土歴史館との共同事業「夏休み学習会《見て・さわって・学ぼう》―東京湾 自然と人―」を毎年実施している。この事業は郷土歴史館と当館でそれぞれ1日ずつ行われ、小学生高学年を中心とした参加者は2日間とも参加することが原則となっている。テーマは「東京湾や港区に関わる自然と人」であり、郷土歴史館が文化や歴史を、本学が自然（生物）を担当する。

2025年度のテーマは「海の植物、海そうを知ろう！」であった。郷土歴史館では「大森海苔のふるさと館」から講師を招き、当館では本学の藻類学の教授に講師を依頼した。2日間にわたるプログラムは、文系と理系を融合させた非常に充実した内容であり、私自身も毎回参加者と一緒に楽しんでいる。講師は「見て・さわっ

て」というテーマに沿って実物を準備してくださるため、子どもたちにとって貴重な体験と記憶となるだろう。実物に触れる（実際に触るというだけでなく、本物に接するという意味でも）体験を提供することは、当館のみならず博物館全般に共通する重要な役割の一つである。

このほか、近隣の保育園や幼稚園児、デイサービス施設からの来館も年間で数十件にのぼる。日々の散歩コースの一つとして当館を組み込んでいただいていることは、地域に根差した存在であることを示している。

6—南極から見える地球のつながり

2025年、当館では南極コーナーのリニューアルを行った。これまで明確なコンセプトやタイトルがなかったため、この機会に「南極海からみた地球の生態系」と題し、展示の趣旨を明確化した。

先述のとおり、本学は練習船「海鷹丸」による南極海の観測が続けてきた。当館には、ペンギン類、アザラシなど貴重ではなく製標本が収蔵・展示されてきたが、これまでは解説文もなく、ただ珍しいものを陳列している印象が否め

なかった。さらに、その他の展示は、分類群ごとに専門家が監修するというスタイルを取っていたため、分類群間のつながり、すなわち食物網や生態系を学ぶ視点に欠けていた。

今回のリニューアルでは、かつて南極海で採集された海鳥類のはく製をペンギンやアザラシと同じコーナーに移し、南極海の食物網を解説するパネルを新設した。さらに、南極海で見られる海鳥類や鯨類など、短期間で長距離を移動する動物を取り上げ（一部の海鳥は日本や北極海まで渡りを行う）、彼らの移動を通じて、地球上の局地的な生態系が互いにつながっていることを解説した。来館者には、身近に起こっている環境問題もまた南極海と無関係ではない、という認識を持ち帰っていただけることを、この展示で期待している。

7—世界の来館者にどう伝えるか

インバウンドの増加により、当館でも海外からの来館者が目立って多くなってきた。また、学内には留学生も数多く在籍していることから、展示解説の多言語化は不可欠の課題となっている。先に述べたリニューアルに際

しては、解説に英訳を付すことも試みた。

近年のAIの普及により、英語解説を作成するハードルは低くなった。同時に、来館者が自身のスマートフォンで日本語を読み取り、瞬時に各国の言語に翻訳できるようにもなっている。そのため、多言語化の方法をどう位置づけるかについては慎重な検討を要する。

日本語と英語を併記すれば、解説パネルのスペースは単純に2倍必要となり、その分文字の大きさも縮小せざるを得ない。これは、読みやすさを損なわずに十分な情報を伝えなければならぬ解説作成のジレンマである。また、音声ガイドの導入といった解決策も考えられるが、導入や維持のコストは大きな負担となる。今後、多言語化にどう取り組むかは、当館にとって重要な検討課題である。

8 都会で海を感じる―小さな博物館の大きな役割

当館では、展示や資料収集の方針について、一貫したコンセプトを持たないまま、学内での位置づけも曖昧な状態で運営が続けられてきた。そのため、時代ごとに教員や数年で交代する館長の判断によって、ある意味場当

たりの資料収集や展示が行われてきたように思われる。しかし、その結果として、期せずして水産業や水産研究の歴史をたどることが可能になっていともいえる。

地球は「水の惑星」である。表面の7割を海洋が覆い、その平均水深は3800メートルに達する。広大な空間を形づくる海は、人類にとって今なお畏怖の対象であり、神秘的な領域でもある。実際、テレビ番組やインターネット上には、さまざまな海洋生物や深海の映像が溢れる。博物館では生きた生物や迫力ある映像をそのまま展示することはできないが、来館者は「本物・実物」に直接に触れ、五感で感じ取ることができる。

当館は総合博物館と比べれば規模こそ及ばないが、専門大学のミュージアムとして、都会の真ん中で海を身近に感じられる場である。散歩の途中でも立ち寄れる距離感で、海洋を実感できるという点は、テレビやインターネットからは得がたい体験であろう。気軽に海を感じながら、日本が歩んできた水産業や海洋学の一端に触れる場所―それが当館の存在意義である。

時をこえて響く音

—活用と保全の調和を目指した知の発信—

不動 真優

国立音楽大学楽器学資料館
主任学芸員・課長補佐

はじめに

国立音楽大学が創立100周年を迎える2026年、附属施設である楽器学資料館も展示室を備えてから50周年という節目を迎える。この半世紀、当館は楽器学の研究拠点のひとつとして、社会に知を発信してきた「写真1」。

本学の楽器資料の収集は1966年にさかのぼる。当初は、チェンバロをはじめ、ルネッサンス・バロック時代の楽器を演奏研究のために購入した。翌年には雅楽や能、箏曲などで演奏される邦楽器も加わった。10年後の1976年には所蔵楽器点数が124点となり、展示室を完備。以降も着実に収集を進め、現在の所蔵点数はお



[写真1] 楽器学資料館の展示室

よそ2600点にのぼる。

「音楽研究に必要とされる楽器に関する資料を整える」という方針に基づき、名器や骨董的価値よりも、地域や年代に偏りのない【系統的な収集】を基本とし、世界各地の民族楽器についても幅広く収集することを目標としている。

1 学びを提供する教育的活用

現在、授業で最も教育活用されているのは、チェンバロやクラヴィコード、フォルテピアノなどの鍵盤楽器である「写真2」。これは、現代のピアノと各時代の鍵盤楽器には多くの違いがあり、鍵盤楽器専修の必修授業や、レッスンにおいて、その違いが取り上げられるためである。

例えば、ヨハン・セバスチャン・バッハは、ピアノのための作品を残しておらず、チェンバロやパイプオルガン、クラヴィコードによる演奏を想定して作曲していた。ピアノは弦を打って音を出す、チェンバロは弦をはじいて発音する構造のため、音色はもちろん、強弱や表現に関わるアプローチの仕方にも大きな違いがある。

本学の学生をはじめ、現代の多くの演奏者にとって、たとえバロックや古典派の作品であっても、それを現代のピアノで演奏することが一般的となっており、当時の楽器へ意識が向けられる機会は多くない。

そうした中で、当館が提供する演奏体験は、作曲家が作品を生み出した当時の楽器と、現代のピアノとの違いを感覚的に捉える機会となり、演奏解釈を深めるための一助となっている。

鍵盤楽器以外にも、世界各地の民族が用いる楽器に触れることは、文化の多様性を学び、音楽の世界観を広げることにつながる。そのため当館では、各地域の伝統音楽の演奏をレクチャーコンサートやワークショップを通じて触れる機会を提



【写真2】展示室内のチェンバロエリア

供している。こうしたコンサートは、これまで基本的に入場無料で一般にも公開しており、地域に開かれた活動のひとつとなっている。また、週替わりで楽器を紹介・解説する「楽器の10分講座」を年間を通じて開催し、見学者に学びの場を提供している。

さらに、日本の音楽教育は長らく西洋音楽が中心であり、自国の音楽を学ぶ機会はどうしても限られていたが、現行の中学校の学習指導要領「音楽」では、和楽器を用いた表現活動を行うことが必須となっている。これを受け、本学附属中学校の生徒を対象に、歌舞伎のお囃子や、雅楽の楽器をテーマとした邦楽体験の機会も新たに設けた「写真3」。



〔写真3〕邦楽体験で篠笛に取り組む附属校の中学生

2—保全を考慮したレプリカの活用

「楽器」とは、音を出すため、音楽を奏するため使用されるものと定義されるが、博物館資料となると、保全の観点からその使用を制限せざるを得ない。なぜなら、演奏によって発音に関わる部位の摩耗や劣化が進み、会場等への移動による環境変化や振動によって楽器全体に影響が出ることもある。目的が「演奏」となってしまふと、よりよい音色を得るために素材を交換する必要があるが、当時のような素材や技法が用いられていたかを示す貴重な歴史の痕跡を失ってしまうことにもなるからである。

一方で、音を「聴く」ということは、その楽器の理解に欠かせないことでもあるため、活用と保全のバランスをとることが常に求められる。

そこで当館では、レプリカ（複製）楽器を活用している。可能な限り当時と同じ素材と技法によって製作された楽器は多くのことを学ぶ機会を与えてくれる。

本学100周年を記念して製作したフォルテピアノはその一例であり、本学のシンボルツリーを楽器の一部に用

い、ウィーンの製作家アントン・ワルターによる1795年ごろの楽器を複製したものである。ワルターのピアノはモーツァルトも所有し、ハイドンや、若き日のベートーヴェンも演奏していたといわれる。古典派の音楽を学ぶ上で極めて有意義な資料となった。

同じピアノとは言え、モーツァルトが演奏していた18世紀後半のフォルテピアノと現代のピアノとは、弦の素材、弦の張力、弦を打つハンマーの素材、アクション（打弦に至るからくり）の仕組み、指で押し下げる鍵の深さなどが異なり、その違いは音色、音量、演奏者が感じる鍵盤のタッチにも如実に表れる。

今年度は、この楽器を用いてレクチャーコンサートの様子



[写真4]サマースクールでの公開レッスンの様子

ほか、サマースクールを開催した。サマースクールは、5日間の短い期間ではあるが、フォルテピアノ奏者の平井千絵氏の指導による公開レッスンを本学学部生および院生、そして附属校の中学生・高校生の有志が参加して行った。また最終日には修了演奏会を実施。参加者は、普段演奏している現代のピアノとの違いに戸惑いつつも、徐々にその楽器の特性を学び、各自の表現を追求した「写真4」。こうしたピリオド楽器（各作曲家が生きていた時代の楽器を指す言葉）の学びの機会は、世界的に見ても少ないことが指摘されており、当館では今後もこうした機会を継続・拡充していく方針である。

3 展示室の構成と企画展示および関連イベント

当館の展示室は広さ442㎡のワンフロアである。壁沿いに配置されたウォールケースでは、世界各地の楽器をホルンボステル・ザックス分類に基づき、発音原理で分けて展示している。フロア中央部には鍵盤楽器を配置し、各所に設置したタブレットおよびキャプションによって、名称・地域・年代・分類番号などを確認できるようにし

ている。ただし、さまざまな授業での利用を前提として
いるため、学生自身が調べることを促すよう、各楽器に
対する解説パネルは最小限である。そこで、学芸員によ
る、ガイドツアーと質問応対は常に行い、さまざまな見
学者の要望に可能な限り応えるようにしている。

また展示室の一角を「企画展示コーナー」として、前
期・後期にテーマを設けた展示を実施している。企画内
容は、当館の研究内容を発表する場とするほか、作曲家
や各国の周年に関連づけることもある。こうした周年に
は、関連する演奏家が来日することがあり、その機会を
捉えた演奏依頼が可能となるためである。

2024年は、トルコ共和国と日本との外交関係樹立
100周年を記念して「トルコの楽器 ―オスマン帝国の
時代から続く音楽文化―」という企画展示を行った。ト
ルコ大使館に協力を仰ぎ、トルコの古典音楽演奏団体で
ある「トルコ共和国イズミル国立古典音楽団」の来日に
合わせ、レクチャーコンサートを開催することができた。
ウッドやカーヌーン、ネイといった、日本では耳にする
機会の少ない楽器の演奏と解説は、学生ほか来場者に新
たな知見をもたらすことができた「写真5」。また、トル

コの音楽団からも日
本の音楽について知
りたいと要望があつ
たため、本学の教員
による日本音楽のレ
クチャーを設け、ま
た本学の長唄三味線
の授業の見学も設定
した。双方にとって
お互いの音楽文化を
理解しあう貴重な機
会となった。

4—教育資料の蓄積と学術調査

当館では、数年単位でプロジェクトを立ち上げ、所蔵
資料を用いた取り組みや、学術調査を行っている。

2016年からは、楽器が演奏されている様子や、演
奏家に対するインタビューを動画で記録し、教育用映像



〔写真5〕トルコ共和国イズミル国立古典音楽団によるレクチャーコンサート

の制作を行っている。映像データは授業利用を目的とした教員に貸し出すほか、学内向けにGoogle Classroomや、一部の動画はWebサイトでも公開している。

また2023年からは、館長である三浦雅展によって、19世紀のフォルテピアノの音響分析を行い、各メーカー



[写真6]音響分析調査の様子

の音色的特徴を捉え、相違や類似性を可視化した「写真6」。こうした調査結果は、毎年発行している当館の「活動報告」にまとめ、冊子およびWeb上で公開している。

楽器は木材や皮革、金属など多様な素材から成るため、温湿度変化や虫や菌（カビ）による劣化リスクなど、多角的な視点で環境を整える必要がある。また、保全の面から考えれば、本来の使用目的である演奏も制限せざるを得ない。しかし、その音色の提供は、楽器・音楽を学ぶ上で必要なひとつの要素となる。

当館は、大学博物館として、活用と保全のバランスを常に考えながら、可能な限り学びの機会を広く提供していきたいと考えている。そして今後は、保全上の課題を十分に踏まえた上で、環境変化に強く、修理可能と考えられる楽器を選び、学外でのアウトリーチ活動にも取り組んでいきたい。こうした活動を通じて、当館での教育的取り組みが、本学の魅力の一端として広く伝わり、大学全体の発信力向上にも貢献できるよう努めていきたい。楽器に込められた知と響きを未来へ手渡すために、活用と保全、その両輪をたゆまず回し続けていく所存である。

都心で見学できる

化石の水族館

宮田 真也

学校法人城西大学

水田記念博物館大石化石ギャラリー
学芸員・理学部助教

1—大学ミュージアムの設立背景と運営理念

水田記念博物館大石化石ギャラリー（以下、当ギャラリー）は、地球生命や自然科学への知的探求心を育てるさまざまな教育プログラムを運営するために、学校法人城西大学が設立した一般公開を伴う博物館施設である。大石道夫東京大学名誉教授、および中国遼寧省古生物博物館より寄託・寄贈を受けた、約200点の実物化石標本と学術標本の保管・展示を行っている。そのほか、実物標本を用いたワークショップや展示解説、近隣の学校への出前講座などの教育普及活動、および自然史や博物館

学の研究を行っている「写真」。

2—展示標本の特徴・活用

当ギャラリーでは、大石道夫東京大学名誉教授が約40年かけて収集した大石コレクションが展示の主体となる。本コレクションは、おおむね200点ほどの実物化石からなり、小さなスペースではあるが所狭しと展示されている。化石は主に魚類が多く、そのほか植物や昆虫などがある。これほど多くの魚類化石が展示されている点は他館では類を見ない当ギャラリーの大きな特色であり、いわば「化石の水族館」である。魚類化石は標本自体も繊細であるため、見学者が魚類化石の細かい部分も観察しやすいように、ケースと標本との間を狭くしている。また、一部ではあるが触れることができる展示もある。

これらの標本の中には、国内では当ギャラリーのみで保管や展示されているものも含まれている。そのため、一部の標本は、他館の特別展などへの貸し出しを通じた学術交流にも活用されている。



[写真1] 館内展示室

3 教育との連動

当ギャラリーが設置されている学校法人城西大学東京紀尾井町キャンパスでは、本法人が運営する城西大学および城西国際大学が、共に研究・教育活動を展開しており、大変賑わっている。城西大学は地学系の学科はないものの、理学部が設置されており、中学校、高等学校教諭一種免許（理科）も取得可能である。そのため、当ギャラリーの学芸員が、教職および選択科目の地学系の科目を受け持っている。授業の内容によっては、化石割り体験などを取り入れ、実物標本に触れることの大切さを学生たちに経験してもらう。また、城西国際大学ではメディア学部が設置されている。古生物はキャラクターデザインのモチーフになりやすいため、年に一度の古生物の特別講義を行うほか、当ギャラリー内での取材実習などにも活用されている。

4 研究

当ギャラリーは、国内では他に類例の少ない海外産魚類化石を、体系的に収蔵・展示している点で特筆される。



[写真2] インドネシア産三畳紀シーラカンスの仲間、ワイティアオオイシイ (*Whiteia oishii*) のタイプ標本 (新種を定義するときの基準となる標本)

そのため、これらのコレクションを用いた分類・記載研究が進められている。「写真2」。また、国内産魚類化石に関しても、他館や大学の研究者だけでなく、市民研究者とも協力しながら、調査・研究が行われている。そのほか、ワークショップを通じた自然史教育のプログラム開発や、博物館学の研究も、他機関と協力しながら取り組んでいる。

5 社会貢献

当ギャラリーでは、随時、事前予約制で化石割り体験を行っている（教材費1000円・現金のみ。学芸員が対応可能日限定）「写真3」。また、学芸員が在席時に限るが、化石に関する質問や相談、展示についての解説も行っている。そのほか恒例行事として夏休み、冬休み、春休みに親子向けのワークショップを行っている。特に夏休みは低学年と高学年以上に分け、学習内容の異なったプログラムを展開している。ワークショップでは「見て、触って、考える」を重要視し、必ず実物標本を参加者に触ってもらい、図鑑やインターネットだけでは知ることの



[写真3]体験用に用いるオルドビス紀の三葉虫。綺麗に出すのはなかなか難しい

できない自然史標本の面白さを実感してもらおう。これまで、オルドビス紀の三葉虫や、30万年前の木の葉の化石を取り出す体験のほかに、現生や化石のサメの歯に触れるプログラムや、琥珀の選別作業の体験などを行ってきた。また、地域の小学校へ出前講座を行ったり、授業などでの見学の受け入れも行っている。また要望があれば、校外学習の見学場所としても活用していただいている。

6 今後の展望

当ギャラリーで展示されている魚類化石の中には、十分に研究されていない種類のものも含まれている。そのため、海外の研究者とも協力して共同研究を進め、大石コレクションの学術的価値をより高めていくことが望まれる。さらに、化石の研究、展示、普及活動を通じて、来館者の皆様に自然史の楽しさや面白さ、自然の身近さを感じていただき、古生物学や地質学を中心に、その面白さや大切さを次世代に伝承していきたい。

創立100周年を迎える 演劇博物館の活動

児玉 竜一

早稲田大学文学部教授・
演劇博物館長

早稲田大学演劇博物館は、1928年に創立された。

坪内逍遙の古稀と、翻訳『シェイクスピア全集』全40巻の完成を記念して建てられたものである。逍遙が博物館構想を持ったのは、大正5（1916）年ごろのこととされ、併せて演劇資料を総合した大展覧会を計画している中で遭遇したのが、大正12（1923）年9月1日の関東大震災だった。逍遙の自邸は無事であったが、俳優や作者の家に伝来していた都内の演劇資料は甚大な被害をこうむった。これによって、個々人が重要な資料を私蔵しているのには限界があるとの持論をますます強め、資料を集約して管理する施設としての博物館の必要性を痛感することになったという。

当時、早稲田大学は大隈講堂建設のための募金活動を展開中で、それと重なる形での募金活動は憚られるところもあったため、別に演劇博物館設立委員会を立てて、発起人として渋沢栄一を迎えて政財界に働きかけるとともに、逍遙自身は、『逍遙選集』の印税をすべて大学に積み立てる形で博物館建設に充てた。建設予定地も、逍遙自邸の余丁町（現在の新宿区余丁町）か、あるいは上野か日比谷かと、いくつかの候補があったが、大学構内の西北隅と決定した。都の西北の西北というわけである。

建築様式については、逍遙の腹案に従って、シェイクスピア時代のロンドンのフォーチュン座を模した建物として、今井兼次ほか設計にあたった。シェイクスピアの本拠地としてはグローブ座が有名であるが、1920年代当時、グローブ座の形状に関する正確な知見は乏しかった。その点、フォーチュン座は土地の売買契約書類が残っており、それに基づく復元図面の研究が海外ではすでに提出されていた。想像に頼るグローブ座より、資料で正確に押さえられるフォーチュン座を選んだということになる。その代わり、グローブ座に掲げられていたラテン語の「Totus mundus agit histrionem」（世界は

すべて劇場なり」を模様として付けた。建物の骨格を半ば外壁に出す形のハーフティンバーの様式で、その線もやや斜めとなるところもあるのは、却って当時の英国風に近いとのことである。

シェイクスピア時代の劇場を模した建物は、世界にくつか現存している。最も有名となったのは、ロンドンのグローブ座跡地の近くに復元された「シェイクスピア・グローブ座」であるが、同座の復元が1997年であることを思うと、それよりも70年近く前に極東日本の地にフォーチュン座の原寸大復元を建てた逍遙の構想が、いかに先見の明があったかを示している。しかも、この建物は、それ自体がひとつの博物資料であるのみならず、劇場としても利用可能で、1947年に前進座が「ヴェニスの商人」を演じて以来、たびたび舞台上演に用いられている。つい先頃も、9月26日にシェイクスピアシアターによって「ロミオとジュリエット」が上演されたが、名高いバルコニーのシーンでは、2階の窓を開放してジュリエットの居室として用いることで、初演当時の空間利用の面影をしのぶことができた。

演劇博物館の収集方針もまた、開会式において坪内逍

遙が宣言している。すなわち、ひとつの国、ひとつの時代に偏ることなく、「古今に東西南北にわたったものでありたい」という念願である。従って、日本だけではなく、江戸時代だけではなく、日本演劇も西洋演劇もアジア演劇も、「演劇」と名がついて関連するものならば、すべてが収集対象ということになる。関連する、ということはどう見るかにもよるが、100年近い歩みの中では、必然的に映画やテレビなども「関連」してくるので、現在では、映画関係資料、テレビ関係資料も、その収集対象に含めている。

自国の演劇に関する博物館、ということなら、世界にいくつもの例を挙げることができる。また、ある時代、あるジャンルに特化した収集ということならば、これはいくつもの例を挙げることができる。だが、古今にわたり、東西南北にわたるといって、総合的な博物館をめざす演劇の資料館は、国際的にも数少ないと思われる。かつて、ロンドンのコヴェントガーデンに演劇博物館があったが、現在では撤退してしまっており、収蔵品はヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に移管されて、演劇コーナーとなっている。ニューヨークにはブロードウェ

イを始めとするアメリカ演劇資料の総合的な宝庫である、ニューヨーク公立図書館パフォーミング・アーツ館が、リンカーンセンターにある。両館とて、古今東西といえるかどうか知らないが、総合性をめざしている点は紛れもない。そこで、演劇博物館は「アジアで唯一の演劇の総合博物館」と唱えている次第である。

演劇博物館の収蔵品については、創立当初から、演劇界各方面からのご寄贈によるものと、予算内で年度ごとに購求し続けているものとから成っている。古今にわたり、東西南北にわたるとはいえ、地理的な条件からも、また坪内逍遙の専門分野からも、歌舞伎や文楽、近代劇に関する資料が最も多く、とりわけ役者絵、歌舞伎台本、歌舞伎番付、役者評判記、人形浄瑠璃の丸本などでは、世界一の収蔵数を誇っている。

演劇に関連する収蔵品の特色は、その形状、形態がきわめて多岐にわたるといふ点にあり、衣裳、小道具、鬘かづりなど、保存と管理の方法がそれぞれ個別に専門性を有している。もちろん、それに加えて、図書資料、美術品に相当する資料、写真資料、映像、音声資料などが、数多くある。資料総数は、数え方にもよるが100万件を超

えている。

物理的に最大のものは、先述した博物館の建物そのものであるが、それに次ぐのが1880年に東京・新富座で引幕として使用された、河鍋晩斎かわなべ きようさい肉筆による「新富座妖怪引幕」で、横17メートル、縦4メートルという巨大なものである。2019年にロンドンの大英博物館で開催されて話題をよんだ「The City exhibition Mangaマンガ」において、最重要出品のひとつとして扱われ、多くの注目を浴びた。

図書の収蔵については、貴重書として閲覧申請を受け付けているもののほかに、博物館本館において閲覧していただいている一般図書・雑誌がある。これも、日本語で書かれた演劇書の収蔵、および日本の演劇雑誌の収蔵についても日本一である。利用資格は、まったく不問で、身分証明書に類するものさえあれば、どなたでもご利用いただくことができる。その点では、早稲田大学内にあって、中央図書館や学部図書館以上に、最も広く一般に開かれた場として機能している。

社会一般への働きかけとしては、春秋2回の特別展・企画展を開催し、図録や関連書籍を編集・刊行してい

る。また、展示にともなう演劇講座に各界のゲストをお招きして、一般観客を無料で入れたイベントを行っている。2024年度開催の展覧会「築地小劇場100年」では、新劇の主要3劇団、文学座、俳優座、劇団民藝からそれぞれトップ俳優にお越しをいただき、演劇評論家大笹吉雄氏と館長とで劇団ごとに座談会を開催、それぞれ会場が満員となる盛況を得た。また、文部科学省から共同利用・共同研究拠点として認定をうけた「演劇映像学連携研究拠点」を研究活動の場として、広く学界全体に研究チームをつのり、公募研究によって館蔵資料を活用した調査研究と目録化・公開を推進している。ここでも、また、連携研究拠点の主催事業として、無声映画上映や、Zoomを利用したイギリスの研究者との研究的対談の実施・公開など、さまざまな事業を展開している。

資料のデジタル公開については、極めて早くから取り組んでおり、2000年前後から資料公開を始めている。館蔵の役者絵、約4800点を全点ネット上で公開したのが2001年で、後発の大英博物館、ボストン美術館等のアーカイブとともに、国際的な浮世絵研究の環境を変えたものと自負している。演劇博物館ホームページ

(<https://enpaku.w.waseda.jp/>)上で公開しているデジタルアーカイブは49件に及んでおり、早稲田大学の文化資源データベースのアクセスの96パーセントが、演劇博物館のものである。中でもとりわけ世界中からのアクセスが集中しているのは、「浮世絵データベース」となっている。2023年からはJDTA (Japan Digital Theatre Archives) を公開しており、コロナ禍での緊急舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業 (EPAD) の一環として収集された、舞台公演映像や戯曲の情報を検索・閲覧することができるとのこと。本年2025年度からは、国文学研究資料館との提携によって、貴重書約730点を画像公開しており、今後もデジタル化による資料公開は、一層の進展をはかってゆく予定である。

〈参考〉

早稲田大学演劇博物館



小さくても

きらりと光るミュージアム

—学習院の歴史と知の集積を
未来に伝える—

長佐古 美奈子

霞会館記念学習院ミュージアム、
学習院大学史料館学芸員

はじめに

2025年3月、「学習院の歴史と知の集積を未来に伝えるミュージアム」をコンセプトとした霞会館記念学習院ミュージアム（以下、学習院ミュージアム）がリニューアルオープンした。

学習院ミュージアムは学習院大学史料館（以下、史料館）がその基となっている（現在も大学組織名称としては史料館である）。史料館は1975年に大学附置研究施設として開設され、学習院の来歴に基づき、学習院関

係と皇室・皇族・

華族に関する史資

料・美術作品など

を収集保管・調査

研究・展示公開し

てきた。1985

年には博物館相当

施設に認定され、

学芸員資格取得事

務も兼務している。

史料館の収蔵史

資料・美術作品は

この50年で約25万

点にのぼり、収蔵庫・展示室共に刷新が喫緊の課題であつ

た。この度、大学図書館の移転に伴い、旧大学図書館の

建物—1963年にモダニズム建築の巨匠、前川國男に

より設計・建築—を再活用する方針で新たに整備するこ

とになった。

博物館相当施設である当館の改修にあたっては、史資料・美術作品が適切な環境で収蔵され、長く保全できる



霞会館記念学習院ミュージアム 外観

が必要になる。幸いにも一般社団法人霞会館から助成もいただき、重要文化財も展示できるスペックの施設に生まれ変わった。また学芸員課程履修の学生たちが使用する畳敷きの実習室や模擬展示のできる展示ケースも備え、学生たちの学習環境が充実した施設となった。

1 常設展示室 「学習院の豊かな学び」

1877年に華族会館（一般社団法人霞会館の前身）に

より華族子女のための学校として開校した学習院には「日本で初めて」と言われる教育やそれに関わるものが数多くある。制服やランドセル、馬術教育、東洋史、また直観教授※、海外修学旅行なども恐らく日本で初めてである。常設展示室ではこ



常設展示室

のような学習院の豊かな教育の歴史を、これまで史料館が収集した実際の史料・標本や画像を用い展示している。常設展示室は66㎡と手狭であるため、詳細な説明が必要な部分に関しては壁を取り巻く年表内に二次元コードを表示し、そこから読み取れるよう工夫した。この二次元コード方式であれば今後さらに説明項目の追加や、多言語対応などが必要になった場合にも、簡便かつ安価で迅速な対応が可能となる。

2 リニューアルオープン記念展 「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱 ―芸術と伝統文化のパトロネージュ―」

特別展示室で開催されたリニューアルオープン記念展「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱―芸術と伝統文化のパトロネージュ」は3月14日より5月17日までの会期で、1万5000人以上の方の来場を得た。

前述のように当館には天皇家をはじめ、皇族、華族の学び舎であった学習院ゆかりの史資料・美術作品など約25万点が収蔵されており、今回はそのコレクションの中

から、芸術と伝統文化のパトロネージュをテーマに絵画、工芸品、古文書、文学資料など約100件を展示した。

古来より、芸術の創作と発展には王侯貴族らをはじめ、



特別展示室

「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱—芸術と伝統文化のパトロネージュ」展

それぞれの時代に活躍をした人々が重要な役割を担ってきた。豊富な知識と高い美意識を持った彼らは、優れた芸術作品を収集し、才気溢れる芸術家を見出して、その能力が発揮できるよう惜しみなく援助した。芸術の発展は、彼らによる芸術作品の保護と、芸術家への支援—パトロネージュなしには語れない。わが国もまた、天皇家をはじめとする多くのパトロンにより、独自の文化や芸術が育まれ、これまで連綿と受け継がれてきた。彼らは伝統儀礼を重んじつつ、日常生活においては歌や文学、書画といった芸術を好み、優れた芸術作品の誕生に大いに貢献した。わが国の芸術、伝統文化も天皇家をはじめ、国家を支えた人々などのパトロネージュにより発展を遂げてきたのである。

パトロネージュの一つとして工芸職人への庇護がある。明治維新ののち、江戸時代の工芸職人らの才能と技術を守りそれを後世へと伝えるため、天皇家をはじめ宮家の人々は、彼らへ製品制作を積極的に依頼した。完成品は天皇家から宮家へ、宮家から華族家へと下賜され、また華族家でもそれに倣った品が数多く作られた。そのような展示品の中でも当館のメインコレクションである「ボン

ボンニエール」は特に人気を集めた。

ボンボニエールとは皇室・華族家などの慶事の際に配られる掌にのるほどの小さな菓子器である。菓子器なので中には菓子――主に金平糖――が入れられる。ボンボニエールという名

が示す通り西洋由来の慣習が、明治中期の日本皇室にもたらされた。皇室では明治維新で職を失った刀剣職人や金工職人などにボンボニエールの制作を依頼し、菓子器を美術工芸品の域に高め、かつ彼らの職と技術を守った。ボンボニエールは宮中晩餐会などの際に外国賓客へ配られ、日本の工芸技術を外国へPRする役目も担った。

現在でも御即位や成年式などの皇室の慶事の際に、金平糖入りのボンボニエールが下賜されている。



八稜鏡形鳳凰文ボンボニエール
大正大礼 1915年11月10日

3 霞会館記念学習院ミュージアム これからの展望

学習院大学で学芸員資格を取得した学芸員は日本全国の博物館に勤務しており、全学芸員に占める学習院大学卒業生の割合は、実は非常に高い。今後は、その卒業生達が勤務する博物館・美術館や、各地の旧華族家関係の博物館・美術館などと連携し、展覧会を開催していきたいと考えている。そのためには25万点にのぼる収蔵史資料・美術作品のデータベース化が喫緊の課題となる。幸いデータベース構築・公開に向けた中長期計画推進予算が大学内で採択され、数年後のデータベース公開を目指して現在鋭意奮闘中である。

一方、学習院ミュージアムの来観者は一般の方がその多くを占めており、教職員や学生の来観者が少ない。今後は教職員・在学生や卒業生、さらにはこれから学習院への入学を目指す方々にも親しまれる「小さくてもきらりと光るミュージアム」にしていきたい。

※直観教授…具体的な実物やものごとの現象を生徒に直接示し、触れることによって理解や体験を得られるような指導を行うこと。

建学の精神に支えられる「無形資産」

西 中 利 也

学校法人名古屋学院大学理事長

1980年3月、私は名古屋学院大学を卒業し、同年4月、再び母校の扉を叩き入職した。以来約45年の間、事務局長、常任理事を経て、昨年8月に理事長に就任した。

名古屋学院大学は1964年に開学し、昨年度、大学創立60周年を迎えた。前身は、アメリカ人キリスト教宣教師、F.C.クライン博士が1887年に設立した名古屋英和学校であり、創始者が掲げた「敬神愛人」が本学の建学の精神として脈々と生き続けている。敬神愛人の「敬神」は“Fear God”と英語表記され、「敬う」より、「畏怖する」ことを表し、人間の知識や経験に驕ることなく、「謙虚に学び続ける」ことの大切さを説いている。また、「愛人」は隣人に対する無償の愛の重要性を教えている。

本学の60年の歩みは平坦なものではなかった。開学時こそ順風満帆な船出であったが、開学間もなく財務危機が顕在化した。本学は、「部門別責任制」を大学構成員の総意により敢行し、10年以上の歳月を経てこの困難を乗り越えた。こ

の辛い経験は、大学全体、特に教職員に常に問題意識を持ち、危機を自分事として受け止め、自律的に行動するマインドを醸成した。そして、この基礎となったのが、「謙虚に学び続ける」ことを説いた建学の精神であった。

その後2000年初頭には、18歳人口急減の影響を受け、入学志願者数がピーク時の20%程度まで減少した。他に先んじて、良好な教育研究環境を実現した本学であったが、立地に起因するハンデは大きかった。再度の経営危機に際し、本学は20年ぶりの都心回帰を決断した。意思決定から開設まで4年以上を要し、法人本部を含む複数学部の移転の費用負担は軽いものではなかったが、経費の削減、給与の見直し等を実行し、実現にこぎつけた。このことは、教職員の理解と協力なしには実行できなかったことであり、開学当初の大きな試練を総力で乗り越えた経験と意識があって実現できたものと考えている。

また、時期を同じくして離籍者の増加が大き

な問題となった。この問題の解決に当たり根底をなしたのは、私たちにとって最も大切な隣人である「学生に寄り添う」ことであり、教職員全体で真剣に考え、行動した結果、離籍者数を減少させることに成功した。「学生に寄り添う」姿勢は、その後も継承され、「学生と教職員の距離が近い大学」としての評価をいただいている。そしてこれもまた、建学の精神の教えである「隣人愛」の実践によりなした業である。

建学の精神は、教育理念であり、同時に本学運営においても重要な教えでもある。そして、「敬神愛人」の教えから学び、危機を乗り越えて醸成した「無形資産」は本学のレジリエンスとして継承されるものである。

私は、本学に導かれ、歩みを共にしてきた。私立大学を取り巻く状況がますます厳しさを増していく中でのかじ取りを託された今、母校でもある本学に報いることは、「恩返し」ではなく、「ペイフォワード（恩送り）」として、授かった教え、善意や恩をさらに良きものに発展させ、次

の世代に受け継いでいくものと考えている。

現在本学は、9学部9学科に6200名を超える学生が学ぶ中規模大学として円滑に運営されているが、今後、大学を取り巻く状況は、向かい風ばかりである。厳しい条件下ではあるが、「敬神愛人」の建学の精神と、それに導かれ醸成された「無形資産」を力強い両翼として、向かい風を揚力に変えるべく、尽力したい。

最後に、苦難の克服に尽力された先人が、「名古屋学院大学20年史」の発刊に寄せた聖句を紹介する。

「涙と共に種まく者は喜びと共に刈りとらん」

（詩編126編より）

大学を起点とする〴〵出会い〴〵のデザイン

デジタル技術の進展により、マッチングアプリやSNSを通じたつながりは日常化し、人と人との出会い方や関係の築き方は大きく変化している。「婚活実態調査2024（リクルートブライダル総研調べ）」によると、2023年婚姻者のうち、婚活サービス（婚活サイト、アプリ等）を利用した人は、45・2%を占め、出会いの主流の一つとなりつつあることが明らかとなった。少子化や個人化、そして人間関係の希薄化が進む現代において、「人と人をつなぐ機能」を大学が再構築できるのか。出会いを支えるマッチング技術や仕組みは、婚活支援に限らず、キャリア、地域定着、卒業生ネットワークの活性化といった多様な文脈において、大学の可能性を広げつつある。



互いに卒業生という信頼できるコミュニティの中で、共通の価値観やアイデンティティを共有しながら安心して関係を築ける環境を活かし、大学と同窓会・卒業生団体が連携して、結婚やパートナー探し、キャリアやビジネスに関するマッチング、同世代・異業種とのネットワークづくりを支援する取り組みが広がっている。

さらに、学生や教員と地域課題を「マッチング」することで解決を図る取り組みも始まっており、地域社会と大学をつなぐ新たな動きとなっている。本企画では、大学をきっかけとした「人と人をつなぐ仕組み」の実践事例を取り上げるとともに、マッチングの制度設計やその社会的意義といった研究の側面も踏まえながら、大学が果たしうる「出会い」のデザインという新たな役割について、大学関係者の皆さまとともに考える機会としたい。



CONTENTS

「ゆる婚」

―同窓会主催の婚活イベント―

渡邊 英司 上智大学
ソフィア会事務局長

愛大ビジネスクラブ

―基本理念は、『出会い』『絆』『相互扶助』―

八木 好郎 愛知大学同窓会会長

現代に生かす

福澤諭吉の「人間交際」

―新事業創出を支援するメンター三田会―

宮地 恵美 一般社団法人メンター三田会会長

マッチング理論による大学業務の改善

野田 俊也 東京大学大学院
経済学研究科講師

「ゆる婚」

―同窓会主催の婚活イベント

渡邊 英司

上智大学ソフィア会事務局長

はじめに

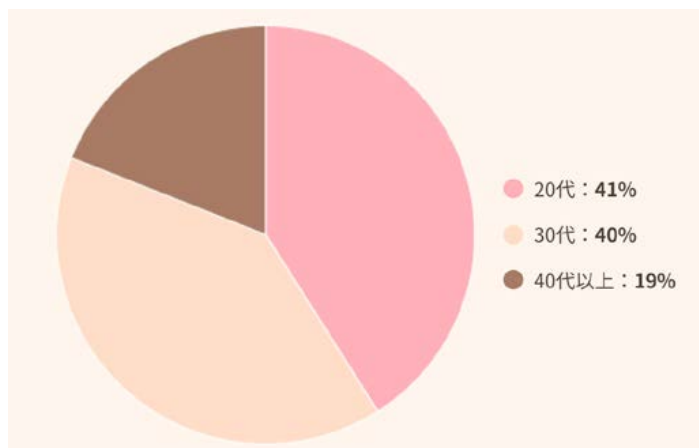
上智大学ソフィア会（以下、ソフィア会）は、全卒業生が加入している上智大学の同窓会組織であり、現在の会員数は1万4000人以上である。ソフィア会は「会員相互の親睦」と「大学への貢献」を目的として掲げ、様々な取り組みを実践している。毎年5月の最終日曜日には、ホームカミングデーイベントとして「オールソフィアンの集い All Sophians' Festival (ASF)」を開催している。

「ゆる婚」とは

①概要・特色

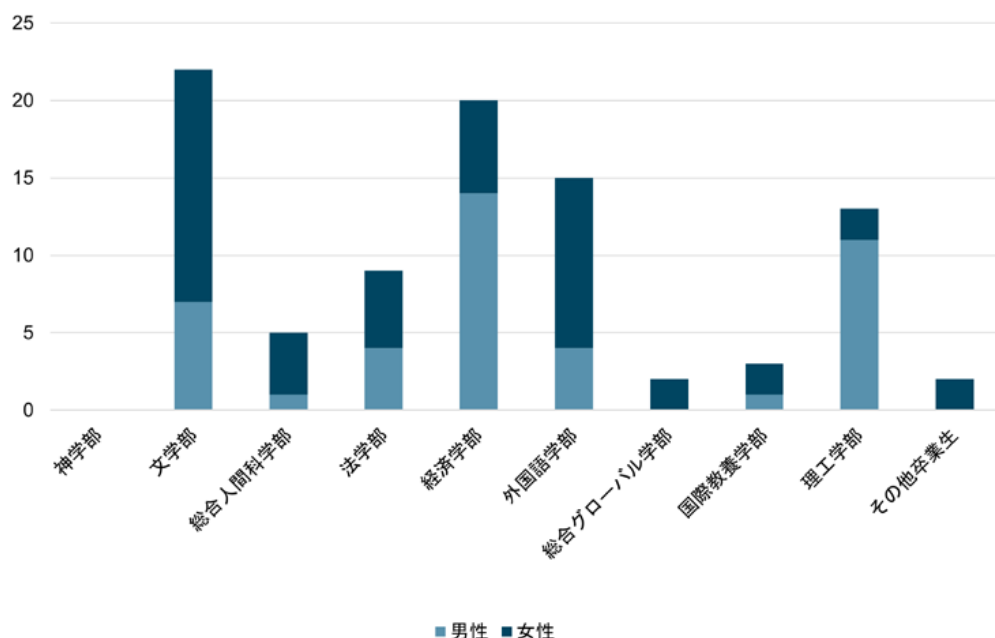
「ゆる婚」は、ASFで実施される上智大学卒業生限定の婚活イベントである。ASFの人気企画の一つとして、2012年度から開始され、コロナ禍であった2020年度を除き、2021年度はオンラインで、それ以外は対面で毎年開催されている。2025年度は13回目の開催となった。

同年度は、男女25名ずつが参加する2時間のセッションを午前と午後に分けて2セット開催した。プログラムは三段階で構成されており、まずは自己紹介カードを用いて共通の話題を見つけるための2分間2対2の対話を全員と実施する「ぐる



〔図1〕過去の参加者年齢層

ぐる自己紹介」から始まり、グループごとにマジョリティとなる回答を予想してポイントを競う形式の「マジョリティゲーム」、自由に移動し1対1でも複数人でも気になる相



[図2]過去の学部別参加者割合

手とじっくり話せる「フリートーク」を経て、最後にマッチングという流れである。

過去の参加者を年齢別に見ると、20代後半から30代前半が中心であり、幅広い年代が参加している[図1]。学部別に見ると、男性は経済学部や理工学部、女性は文学部出身者が多い傾向にある[図2]。結果として、毎年10組から20組のカップルが成立しており、カップル成立率は20%〜40%と高水準である。(イベントの詳細はASF2025特設サイト「#ゆる婚」(<https://sophiakai.net/asf2025/yurucon/>)を参照。)

②推進体制

ASFの運営は、ソフィア会の常設委員会である事業企画委員会の下に設置されたASF実行委員会が担当している。2025年度は、60名弱の卒業生と200名を超える現役学生で構成されており、現役学生は11月に実施される学園祭の運営を担う「ソフィア祭実行委員会」が200名弱、オンライン中継をサポートする「上智大学放送研究会(SBC)」が10名弱という内訳である。

これらのメンバーを実行委員長と総指揮の下に、「ロジ」「企画」「会計」「渉外」「組織」「広報」などの大枠と、

その下部に機能別のチームを設け、各チームには社会人責任者と学生チーフの下に担当メンバーを配置し、同窓会事務局員4名がサポートする形で組織化している。

「ゆる婚」は、企画統括1名の下、社会人1名、学生1名、同窓会事務局員1名が中心メンバーとなって企画や準備作業を担い、開催当日はさらに社会人3名、学生十数名が加わって運営している。

③開始のきっかけとその反響・効果

開始のきっかけは、婚活パーティーが流行し始めた2010年代初頭の時流に乗ったものである。近年は婚活イベントやマッチングアプリなどを活用したパートナー探しが一般化しているため、「ゆる婚」への応募者も多く、本年度は定員100名（男女各50名）のところ、男性は1.2倍、女性は2倍を超える応募があった。

これだけの参加者を集める背景には、社会全般に出会いの場が少なくなっているという状況も影響していると推察される。参加者は当初の想定以上に真剣であり、「ゆる婚」というよりも「ガチ婚」の様相を呈している。前述の高いカップル成立率に加え、その後の真剣交際・成婚に至ったカップルも少なからず存在しており、婚活イ

ベントとしては驚異的な成果を上げている。

この成功の要因は、共通の出身校であることが安心感となり会話のきっかけになるなど、「卒業してみてわかる同窓生の良さ」があると考えられる。また、母校という特別な場所での開催に加え、2025年度の参加者募集ウェブサイトでも特集した成婚者による具体的な成功事例の紹介なども、参加を検討している卒業生（ソフィアン）にとって強力な誘因となっていると想像される。

④現状の課題

「ゆる婚」は、前述のとおり数字等を見る限り大成功しているイベントであるが、継続的に運営していくうえでは様々な課題も浮かび上がっている。

例えば、結婚や恋愛に関わる極めてセンシティブな個人情報を取り扱うというリスクや、学生が運営に参画しているが故のリスク（卒業生が真剣だけに運営側にも真剣さが常に求められ、落ち度や甘えが許されない）といった、実運営上のリスクが存在している。

また、実行委員会に参画する卒業生はあくまでもボランティアベースであり、特に20代から30代の比較的若手の卒業生は、本業や家族に関する周辺状況の変化も多

いため、継続的な参加やモチベーションの維持が難しい。加えて、実運営を支えている学生が毎年入れ替わるため、継続的な運営体制の構築が困難であるという課題を常に抱えている。

さらに言えば、現状への期待が高いため、幅広い世代の参加者を募るための新たな仕組みの導入など、企画のブラッシュアップやフォーマットの変更が難しいという側面もある。

⑤今後の展望

今後の展望として、同窓会がこのイベントをどのように活用・拡充していくかという観点から、二点を挙げたい。

まず、活用という観点では、参加者には「ゆる婚」をきっかけとして継続的な同窓会活動への参画を期待している。そのためには、受け皿となるイベントや企画についても検討する必要がある。また、絶対数としては少数と思われるが、将来的に結婚に至ったカップルの子どもが両親の母校に入学・卒業して同窓会員となり、「ゆる婚」を契機に大学・同窓会との関係が親から子へと引き継がれていくことも夢ではないだろう。

次に拡充という観点では、「ゆる婚」のフォーマット

を活用した「結婚」以外のつながりをベースとした卒業生交流の場を新たに創出していく可能性がある。例えば、同年代・異世代間交流の場、同業種内・異業種間交流の場、趣味や嗜好をベースとした交流の場の創出などが考えられる。ここでは、他大学の先行事例も大いに参考にしたいと考えている。

将来的には、「ゆる婚」で培ったノウハウを活かしつつ、新たなチャレンジを続けることで、冒頭に述べた「会員相互の親睦」と「大学への貢献」というソフィア会の活動目的の具現化につなげたいと考えている。

最後に

本稿の執筆にあたっては、ASF実行委員会で長年総指揮を務められた金谷武明氏（現日本経済大学経営学部教授）のほか、企画統括の西本氏、広報担当の池田氏・笹尾氏、ソフィア会事務局の面々など、多くの関係者からご助言をいただいた。末筆ながら、この場を借りてご協力いただいた皆様に謝意を表したい。誠にありがとうございました。

愛大ビジネススクラブ

― 基本理念は、『出会い』『絆』『相互扶助』 ―

八木 好郎

愛知大学同窓会会長

はじめに

愛知大学は1946年11月愛知県豊橋市に誕生した。

その前身ともいえる東亜同文書院（後に大学）は、1901年中国・上海に設置され、日本の海外高等教育機関として、最も古い歴史と伝統がある。

2026年11月には愛知大学創立80周年、東亜同文書院設立から125年を迎える。

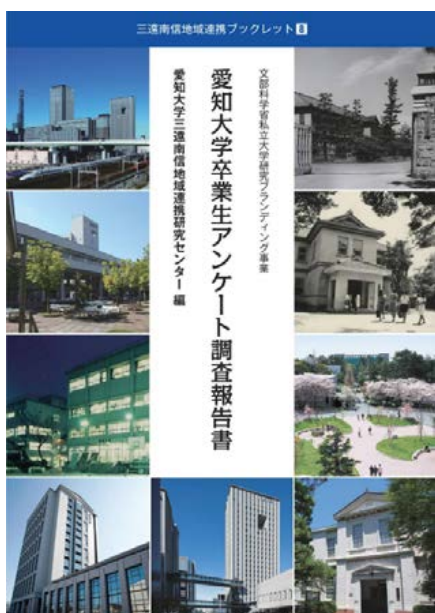
1 愛大ビジネススクラブの設立経緯について

愛知大学の卒業生は16万人を超え、全国に57支部と海

外に7支部が活動している。また、サークル、ゼミ、職域等による部会組織として92部会が同窓会活動をしている。支部活動の参加者は年々、高齢化が進み、顔ぶれもいつも同じような方が参加しており、現職で働く同窓生、また、女性の参加が少ない現状だ。

また、愛知・岐阜・三重・静岡県といった、同窓生が多く住む支部では、支部活動への参加者が多いものの、大学から離れた遠方の地域では参加者が減少している。

こうした状況のなか、愛知大学三遠南信地域連携研究センターが行った卒業生アンケート調査報告書（2022年3月発行）「写真1」によれば、卒業生同士の連携に関して、どのような分野に参加したいかという問いに



〔写真1〕卒業生アンケート調査報告書
（2022年3月発行）

対して、「仕事関連のネットワーク」への参加を希望する回答が36・2%と最も高く、次いで、「サークルやクラブなど趣味のネットワーク」への参加を希望する回答が33・5%あった。

このアンケート調査結果から、「仕事関連のネットワーク」の組織を立ち上げることが必要と考え、愛知大学同窓会第3次活動基本方針の中に、全国または地域の企業に勤める会員及び事業を営む会員のネットワーク構築を盛り込み、同窓生同士の交流の場、さらにはビジネスマッチングができる場とすることを目標とした。

その業務内容は、登録データ等の管理、ホームページへのアクセス状況、マッチングの実績そして維持会費の新規納付金額等の分析等を行った。

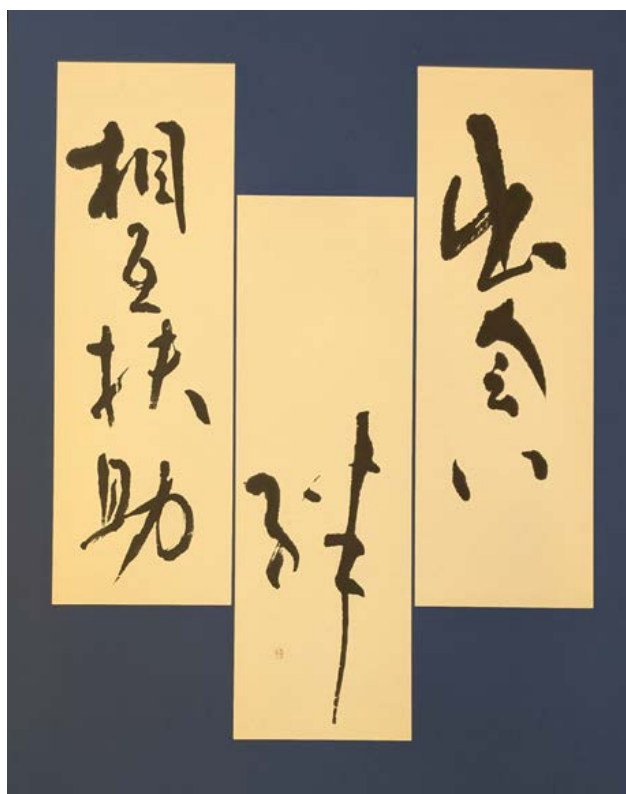
2 愛大ビジネスクラブとは

愛大ビジネスクラブは、経済・産業界、行政、およびそれらに関連するすべての分野で活躍している、もしくは、活躍されてきた愛知大学同窓生の『出会い』『絆』『相互扶助』を基本理念とした、ビジネスマッチング活動を展開す

るためのネットワークを構築し、もって同窓会の活性化と愛知大学との連携強化を図るとともに、母校の隆昌発展に資することを目的としている「写真2」。

また、本クラブは同窓生から要望があった「仕事関連および地域活動のネットワーク」への参画に応えることにより、同窓会活動への参加意欲を高めるものとしている。

愛大ビジネスクラブの活動内容は、専用のビジネスマッチングサイト（愛大ビジネスクラブ）を開設し、これを通じたビジネスや情報交換等を行うものである。



[写真2] 愛大ビジネスクラブ「三本の柱」
(寄贈: 浮舟 野田 真奈美氏)

また、現役学生に対して、リクルート情報の共有を行うことができるサイトも設けた。

こうした方針の下に、2024年1月15日に愛大ビジネスクラブを設立しスタートした。

3 愛大ビジネスクラブのホームページと、Facebookの立ち上げについて

愛知大学同窓会のホームページとは別に、愛大ビジネスクラブのホームページを作成した。

同窓生に対する愛大ビジネスクラブの周知は、全国の支部長、部会長に趣旨を説明し、同窓会会員に対して、愛大ビジネスクラブのホームページへの登録を依頼した。

登録については、最初に申請書を提出いただき、申請者の業種、維持会費の納付状況をチェックし、妥当と判断したら登録マニュアルを配信、登録者情報、リクルート情報を登録していただくようにした。

一方、登録状況については同窓生、同窓会が誰でも閲覧できるようにして、ビジネスチャンスの増加が図れるようにした。

愛大ビジネスクラブのホームページへのアクセスカウント数は、立ち上げ時の2024年は1万4186件（月間平均1182件）、2025年8月末は1万3455件（月間平均1682件）と、前年比42%の増加となった。登録者間のマッチングは、本来は登録者間、または、登録者以外とのマッチングができるサイトではあるが、登録者間で直接的なマッチングに至った成約ケースは、まだわずかである。

登録者のマッチングについて、愛大ビジネスクラブの管理者が、登録者と個別に情報交換して、適切なアドバイスをしている。

ホームページとは別に、2025年1月に愛大ビジネスクラブのFacebookを立ち上げた。

4 同窓生へ愛大ビジネスクラブについての周知、ネットワーク構築について

全国の同窓生に対する愛大ビジネスクラブを周知徹底する方法は、全国各地で開催される支部総会での報告、また、同窓会報で愛大ビジネスクラブについて、登録先一

覧表を掲載し、全国約10万人の同窓生に案内している。
登録先を見た方から、直接登録先に連絡していただき、
ネットワークが構築できれば良いが、まだ、その域には
達してはいない。

5 今後の展望について

愛大ビジネスクラブは、同窓生の『出会い』『絆』『相
合扶助』が基本の考えである。

現在登録先は57件（2025年8月末）となっている
が、1000件を目標に掲げている。

こうしたことを、各支部総会等で発表しているが、な
かなか周知徹底ができず、支部、部会での取り組み姿勢
にバラツキがある。

全国の同窓生に周知徹底する難しさがある。

こうしたなか、今後、登録先を如何に増やしていくか、
また、マッチングの成功事例を増やすことが大きな課題だ。
ビジネスマッチングの成功事例が増えてくれば、若い
経営者の同窓生、サラリーマンとして勤務している同窓
生が、愛大ビジネスクラブに参加することにより、何か

プラスとなれば、今後、愛知大学の同窓生が互いに繋が
りを増やしていただくことになると考えている。
これにより、全国の各支部の活動が一層活性化し、延
いては同窓会の基本である愛知大学の隆昌発展に貢献で
きるのではないかと考えている。

〈参考〉

愛大ビジネスクラブホームページ



現代に生かす

福澤諭吉の「人間交際」

―新事業創出を支援する

メンター三田会―

宮地 恵美

一般社団法人メンター三田会会長

1 メンター三田会とは

慶應義塾大学卒業生が集まる団体は「三田会」と呼ばれる。地域三田会は国内外各地の都市や地域に、企業三田会は企業内に、また「法曹三田会」のように職種別三田会も存在する。一人で複数の三田会に所属する人も多く「自分がいったいくつの三田会に所属しているのかわからない」という声さえ聞かれるほどである。

数多くの三田会が存在する背景には、慶應義塾創立者福澤諭吉が、卒業生との交流を重視し、各地で開かれる大

小ささまざまな同窓会（当時は三田会と呼ばれなかった）に出席したり卒業生を集めて園遊会を催したりして、卒業後のつながりを育んだことがあるとされる。そして福澤は慶應義塾に関わるすべての関係者、学生、卒業生、職員などを総称して「社中」と呼び、慶應義塾を単なる学校ではなく、学ぶ者・教える者・支える者が一体となった共同体であるべきだと考えた。「社中」メンバーが、個人の自立を尊重し互いに助け合い、社会の先導者として国を支えていくことを理想としたのである。

この理念を現代に継承し実現するために、メンター三田会は2004年に設立され、新事業創出に取り組む「社中」メンバーの支援を主な活動としている。（詳細は公式サイト：<https://www.mentor-mitakai.net/>）



2 「人間交際」と交詢社

福澤は、人と人とのつながりこそ文明の基盤だと説きこの理念を「人間交際^{じんかんこうさい}」と呼んだ。そして「社中」の枠

を超え、政治家、実業家、学者、文化人など幅広い人々が集う社交クラブ「交詢社」を設立した。「交詢社」での議論や交流は、銀行・保険・鉄道などの日本の近代化を推進する人材のネットワークを育む場となった。

新事業の創出は、経営者一人では成しえない。新しい制度を考える人、資金を提供する人、現場を支える人が揃って初めて実現する。明治期の民間鉄道設立を例にとれば、福澤がその必要性を説き、実業家の渋沢栄一が資金を集め、門下生が経営に携わった。さらに官営鉄道の指導者で「鉄道の父」と呼ばれる官僚の井上勝も協力している。こうした多様な人々を結びつけたのが福澤の理念であったと考えられる。

メンター三田会もまた同窓会の枠を超えて、世界中の起業家支援ネットワークとの連携を目指している。

3 人の強みをつないで未来を拓く

福澤は、人を結びつけるだけでなく、具体的な事業と、それを担う人材とを結びつけることにも心を砕いた。門下生の榊原浩逸が米国留学に際し、研究分野を福澤に相談し

た際のエピソードはその好例である。当初、福澤は榊原に製造業や海産物・漁具を勧めたが、榊原がこれらを得意としない、あるいは望まないことを知ると、「これからは民営の鉄道が必要になる」と鉄道経営の研究を勧めた。

この助言を受け、榊原は米国で鉄道経営を学び、帰国後は、複数の私鉄で鉄道財政・会計の専門家として幹部を歴任した。さらに岩倉鉄道学校（現・岩倉高等学校）の幹事も務め、日本の鉄道事業を支える人材育成にも貢献している。

このように福澤は門下生の性格や適性を見極め、相談に丁寧に応じることで才能を引き出し「各人の才を生かして職を分かち、互いに助け合うところに文明の本義がある」という思想を体現していたのである。

メンター三田会もまた、相談者の才を生かせるよう相談者の話に丁寧に耳を傾け、ネットワークを活用して、適切な人や情報をつないでいる。

AIが相談相手や仲介者の役割を担う時代だからこそ、人間同士が議論し、役割を分担し、協力する「人間交際」の意義はますます重要になる。メンター三田会は、その交際を担う存在として、新事業創出を目指す「社中」メンバーと共に、未来の社会を切り拓いていく。

マッチング理論による

大学業務の改善

野田 俊也

東京大学大学院経済学研究科講師

はじめに

本企画の主題は「大学を起点とする『出会い』のデザイン」だが、筆者の専門の一つはまさに、人と人とを望ましい形でつなぐ学問であるマッチング理論だ。マッチングは、望んだ帰結を達成する制度を、数理的なアプローチを使って設計するマーケットデザインという学術領域の中でも、特に盛んに研究されている応用である。学者の間で盛り上がっているだけではなく、この技術を用いて設計された制度はすでに広く社会実装に至っている。2012年にはこの有用性が高く評価され、ノーベル経済学賞の受賞テーマとなった。

筆者が所属する東京大学マーケットデザインセンターでも、単に学術的な研究を行うのみならず、マッチング理論の知見を活用し、公立高校入試への複数応募制の導入、企業や自治体の中での人材配置、保育所の入所先の調整、デューティングアプリやスポットワークアプリにおけるマッチング、修士論文報告会の自動スケジューリング、パンデミック時のワクチン接種予約システムの開発など、マッチング理論の知見を活かしてさまざまな社会的課題の改善と効率化に取り組み、成果を上げている。

大学は、まさにマッチングの塊のような場である。受験生と大学・学部、学生と授業、学生と交換留学先・インターン先など、マッチング理論の知見はさまざまな場面における制度の改善につながる。本稿では、マッチング理論がこれらの制度改革につながった事例を広く浅く紹介する。

1 大学入試・受験生と大学のマッチング

入試は受験生がどの大学に入学するかを決める手続きであり、受験生と大学（と学部・学科）のマッチングである。受験生はどの大学に行きたいかに関して志望順位

を持つ。大学は一定の評価基準を使って受験生を評価し、合格通知を出したり、不合格としたりする。受験生は、典型的には複数の大学を個別に受験し、そのうちいくつかから合格をもらい、その中で最も好きな大学に入学し、残りの合格については辞退を行う。

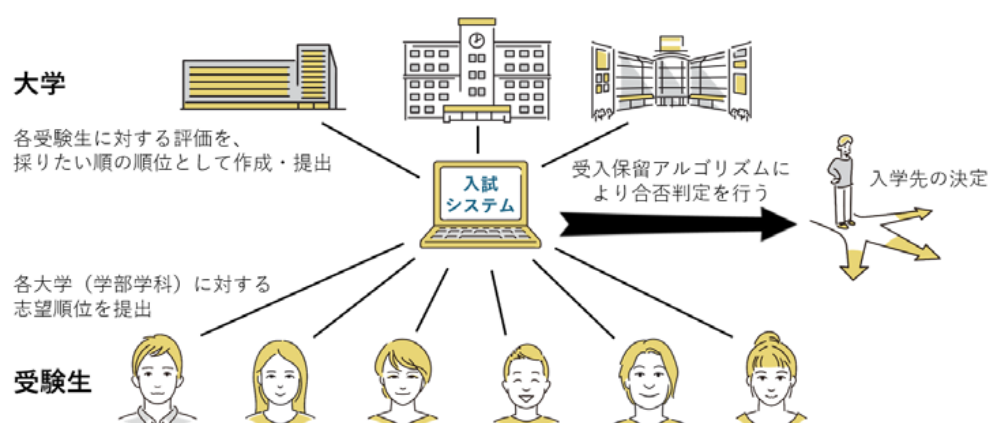
これは日本の大学入試において、極めて一般的な大学入試の形態だが、決して優れた方式とは言えない。弱点は多く、すべて挙げるには紙幅が足りないが、大学業務の観点から見ると、入学者数を調整しづらいことが課題である。合格を出しても入学するとは限らないため、一定の人数が入学を辞退することを見越して合格を出す。辞退者が多ければ追加合格も出せるが、それでも定員ちょうど的人数を採るのは至難の業だ。定員は用意した教育リソースに合わせて設定されているので、上回っても下回っても問題となる。上手く定員通りの学生を受け入れられない私立大学は、文部科学省より補助金の不交付の措置が取られてしまうため、どの私立大学も合格の出し方には苦悩しているようだ。受験生の側から見ても、私立大学が慎重に、徐々に追加合格を出す傾向を強めているため、いつ追加合格の連絡が来るのかわからないとい

う不安定な状況におかれ、精神的な負担となる。また、各大学の合格が順々にやってくる中、どの大学の合格をキープするために入学金を振り込むか悩んでしまう。

オーストラリアやハンガリーでは、この問題を解決すべく、中央機関が全受験生に対する全大学の合否判定を実施するシステムを採用している。合否判定を実施するといっても、中央機関が勝手に受験生の評価を行うわけではない。各受験生の「どの大学が第〇希望か？」という志望順位と、各大学が、各受験生に対して行った評価に基づく、「どの受験生を何番目に採りたいか？」という選抜の順位を提出させ、そのデータをもとに、一定のルールに従って、機械的に合否判定を行うのである。アルゴリズムを使い、複数の大学をまたいで集約的に合否判定を行えば、ごく短い計算時間で、すべての大学が（十分な応募があれば）定員ちょうどどの学生を受け入れるような入学先の割り振りを行うことができる「図1」。

特に、合否判定のルールとして、受入保留アルゴリズムという優れた方式を使えば、すべての受験生が、合格水準を満たしている大学の中で、最も志望度が高い大学に入学でき、しかもすべての大学は合格を出せば入学し

てくれる学生の中で、最も大学が採りたいと考えている学生を上から順に、定員いっぱいまで受け入れるような、望ましいマッチング（安定マッチング）を達成



〔図1〕受験生と大学のマッチング

できる。日本でも、「デジタル併願制」という呼び方で、公立高校入試に対して同種の方式を導入する検討が進んでおり、筆者が所属するチームも、官庁・都道府県に対してしばしば技術的な解説を行っている。大学入試でも高い効果が期待される制度であり、現場の要望によっては今後導入されることもあるかもしれない。

2 履修登録・学生と授業のマッチング

マッチング理論は、学生と授業のマッチング、つまり履修登録にも応用されている。すべての学生に、毎学期、希望する授業をすべて履修させることができれば理想的だが、授業が人気すぎる場合や、運営の都合により履修者を制限する必要がある場合には、履修を制限しなければならぬ。どの学生が、どの授業を履修するかを決める調整は、学生と授業のマッチングだ。

この履修登録の問題は、国内でもさまざまな大学で発生しており、調整の仕方もさまざまだ。単純に、定員いっぱいになるまで履修を受け付け、それ以降は履修を断る先着順方式は、申し込みの受付開始直後にシステムにア

クセスする先着競争を引き起こし、学生にストレスを与えるうえ、システム障害も発生させやすい。履修登録とは少し違う場面だが、先着順のシステムのもとでの、受付開始直後のアクセスの殺到は特に新型コロナウイルスに対するワクチン接種の予約システムの課題として、全国・全世界のレベルで問題となった。

国内で最も一般的に用いられている履修登録の方式は、おそらく抽選制だ。この方法では先着競争は起きない。

ただし抽選の設計の仕方にはさまざまなバリエーションがあり、制度設計には注意が必要だ。例えば、すべての授業について別々に（独立に）くじを引く抽選方式だと、予定していたよりたくさんの授業に当選してしまい、学期中の負担が増えてしまう学生と、すべて落選してしまつて履修する授業が不足する学生の両方が出てしまう。また、志望度が高い学生は在学中、複数回同じ授業を履修することに挑戦するかもしれないが、運が悪いと一度も当選できないまま卒業を迎えることもありうる。抽選方式を取る場合には、なるべく偏りなく当選させるための工夫を入れることが望ましい。

マーケットデザインの研究者の間で有名な履修登録シ

ステムがいくつかある。ハーバード・ビジネススクールではドラフト制が用いられている。学生が野球のドラフトのように、順に履修登録を希望する授業を指名する制度だ。例えば第一希望の授業は一巡目で指名すれば定員が埋まる前に履修登録できる可能性が高い、といった具合に、各学生が強く希望する授業を少しずつ履修させる仕組みとなっており、公平感が高い。

ペンシルバニア大学のビジネススクールでは、学生に最初に一定のポイントが「予算」として与えられ、学生が希望する授業に対してポイントを配分して履修希望を申告する仕組みが採られている。ある一つの授業を強烈に採りたい学生はその授業にほとんどのポイントをつぎ込み、そうではない学生は複数の授業にポイントを割り振る。第一希望か否かだけではなく、希望の強さも反映できる履修登録システムだ。

これらの二例をはじめ、米国を中心に、さまざまな大学でマッチング理論に基づく履修登録システムの採用事例が増えているが、どの方法が望ましいかは、学部・学科の人数や、履修制限を必要とする授業の数や定員などにも依存する。しかし、もし現行システムに課題を感じ

るようであれば、ぜひマッチング理論に基づく制度の見直しを検討していただきたい。

3 学生と「部門」のマッチング

最後に紹介するのは、学生と大学内のさまざまな「部門」、つまり学部・学科や研究室・ゼミなどとのマッチングだ。高校生は多くの場合、進学先を選ぶタイミングで専攻を細かく確定させられるだけの情報を持たない。このため、多くの大学では、学生に入学してから細かい専門を選択させる。東京大学の「進学振り分け」は、そもそも学部の選択すら大学入学後に行わせる極端な方式だが、学科や研究室・ゼミのレベルの所属先を入学後に決めさせる大学は多い。卒論・修論の指導教員選びなども同種のシステムと言えるだろう。これはまさしく、学生と学部・学科・研究室・ゼミ・教員のマッチングだ。

このマッチングには、やはりさまざまな方式が用いられている。例えば東京大学の経済学部でのゼミ選択では、基本的に、一次募集・二次募集の二回にわたり、希望するゼミに一つずつ応募する。これは筆者が所属している

部局の現行制度なわけだが、筆者はこのルールがあまり優れた方法であるとは思っていない。この方法を使うと、それぞれの「枠」で、どのゼミに応募するか、駆け引きが熾烈になる。第一志望のゼミがとても人気で、第二志望のゼミの人气がそこそこだったとすれば、第一志望のゼミにそのまま応募するのは落選のリスクが高く危険なので、妥協して第二志望にしたほうがいいかもしれない。いろいろな学生が妥協すれば、本来人气が高いゼミでも欠員が出たり、逆に人气が低いゼミが無駄に倍率が高くなってしまうという不具合が発生する。

この問題を解決する上でも、入試の節で紹介した受入保留アルゴリズムが有効だ。受入保留アルゴリズムでは、学生は希望するゼミに複数応募し、合格水準を満たした中で最も入りたいゼミに割り当てられるので、悔いが残らない。さらに、応募する際に、自分が本当に入りたいゼミを、入りたい順に希望順位表に記入して提出するのが最も得になることが数学的に証明されているので、「どのゼミを第〇志望にして応募するか」で無駄な読み合いや駆け引きが発生する余地が一切ない。

この問題に対する既存の導入事例は多岐にわたる。受

入保留アルゴリズムは、東大の進学振り分けの第二段階で導入されているほか、その拡張版のアルゴリズムは筑波大学の総合学域群に入学した学生の学類の選択にも用いられている。研究室やゼミの配属のレベルでは、筆者が把握している事例だけでも、慶應義塾大学、九州大学、横浜国立大学、お茶の水女子大学などで受入保留アルゴリズムを使った方法が採用されている。

また、同種の方法は、ゼミ等の配属の他に、大学が斡旋する交換留学やインターンシップの行き先の調整に用いることもできる。これらの問題でも、学生は行き先に関してさまざまな希望を持っている一方で、受け入れ先にも定員があるため、すべての学生の希望を叶えることはできない。このとき、受入保留アルゴリズムを使えば、留学先となる大学や、インターンシップ先となる企業の希望と、学生の行き先に関する希望をもとに、双方の希望を尊重したマッチングを出力することができる。東京大学では、東京大学マーケットデザインセンターの技術的な協力のもと、交換留学先の調整に受入保留アルゴリズムが導入されている。

おわりに

入試、履修登録、研究室、留学先の配属といった場面は、学生と何かをつなぐ重要なマッチングの場である。これらが適切に設計されるか否かは、学生の満足度や教育の質、さらには卒業後のキャリア形成に直結する。

マッチング理論、そしてマーケットデザインは、これらのマッチングに関わる制度を、数理的なアプローチを用いて科学的に設計する学術領域であり、大学業務の改善に関しても豊富な実績がある。大学が公平で効率的な「出会いの場」を創り出し、社会に対して価値を発揮するためにも、国内の大学でも、より一層マッチング理論の活用を進めてほしい。社会からの期待に応えられるよう、我々もマッチング理論の研究と社会実装の進展に全力を尽くしたい。

「私立大学のミライー研究編―」

「みる・つかう・つくる」

デジタル地図の現状と参加

瀬戸 寿一

駒澤大学文学部准教授

はじめに

私たちの生活に欠かせない存在である「デジタル地図」は、スマートフォンの地図アプリを開いて目的地への経路を検索する、SNSでは訪れた場所の位置情報を共有する、さらに配達サービスを依頼する際の正確な目標地点を指定する、といった様々な目的で用いられる。これらの日常的な行為の背後には、GIS (Geographic Information System) 技術が欠かせない。GISとは、位置に関する情報を有したデータ (地理空間情報) をデ

ジタル地図上で総合的に管理・分析・可視化するためのシステムを指す。しかし、「S」はサービスやソリューション、ソサエティ (社会) などを包括する定義として意味づけする場合もある。このような技術の進歩と社会の変化は、従来の地図をめぐる概念自体も変えつつある。かつて地図は、測量や製図技術に長けた専門家が作成し、利用者は使用するのみであった。しかし現在は、市民自身が地図の作製に参加することで、リアルタイムで情報を更新・共有できるようになった。この変化を象徴するのが、「参加型GIS」と呼ばれる新しい潮流である。

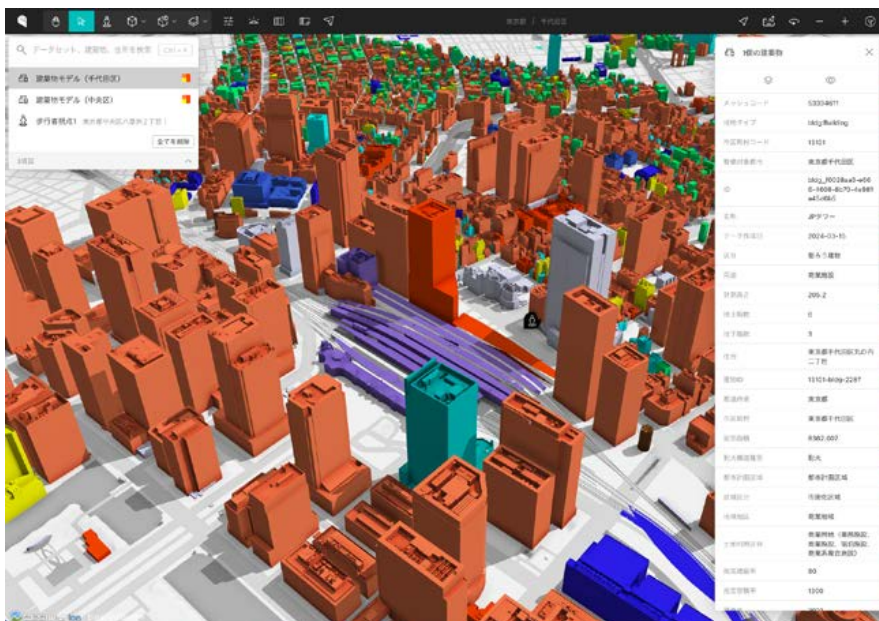
筆者が参加型GISの研究に携わるようになったきっかけは、大学で地理学を学ぶ過程にあった。地形図や都市計画図、観光地図など、地図には多様な種類と役割があることを学ぶうちに、地図そのものへの関心が深まっていった。同時に、市民が主体的に地域の課題解決や活動に関わる「参加型」の取り組みに関心を持ち、研究を進めるようになった。そうした中で、2000年代中盤に出会ったのが、世界中の誰もが自由に編集・利用・再配布できるオープンな地図作製プロジェクト「OpenStreetMap (OSM)」である。専門家だけでなく市民が協力して地

図を作り上げるという仕組みは、地図への固定観念を再考するものであった。今日では技術の進歩によって、スマートフォン一つあれば、OSMに限らず、誰もが地図の編集あるいは地域情報の発信・共有に参加できる時代が到来している。しかし、技術的な可能性と実際の市民参加の広がりの間には依然として大きなギャップがある。それらを埋め、多様な人々が地図を通じて社会に関わる仕組みをつくるのが、研究の原動力となっている。

1 「みる」デジタル地図の多様化

現代のデジタル地図は、単に地理的な位置関係を示すツールではない。様々な情報を重ね合わせて分析することで、私たちに新たな視点を提供する。例えば、地域ごとのリアルタイムな気象情報や避難所を重ね合わせた地図、交通渋滞の状況を色分けした地図、地域の様々な施設とその周辺の不動産価格を示した地図、など多岐にわたる。さらに新しい動向として注目されるのは、リアリスティックな3次元地図の登場である。国土交通省が推進する「PLATEAU（プラトール）」プロジェクトは、2020年から日本全国の3D都市モデルをオープンデータとして地方自治体ごとに

整備するもので、国内200都市を超えている。3D都市モデルは建物の高さや形状だけでなく、一部の地域では道路や樹木など都市空間のあらゆる要素がデータとして整備され、都市計画や防災シミュレーションなど様々な分野でのデータ活用が期待されている「図1」。



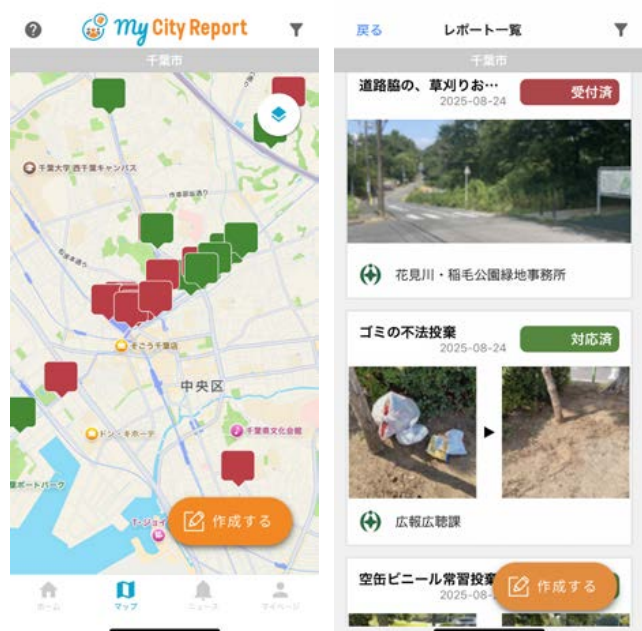
【図1】Project PLATEAUの3次元都市モデル(東京駅周辺)

デジタル地図はさらに、創造的な表現とコミュニケーションのプラットフォームへと進化している。例えば2025年7月にリリースされ一時SNSで話題となった「wplace」は、世界地図上にドット絵を描き、他のユーザーと共有できるサービスである。これは地図を一種のキャンバスとして、個人の体験や創作物を地理的文脈の中で表現する新しいアート形態といえる。このような方法は、Instagramを始めとする各種SNSでの位置情報共有機能にも通じており、ある場所に対して複数の人が異なる季節や時間帯の投稿（作品）を重ねることで、その場所の多面的な魅力が浮かび上がる。このような使い方により、デジタル地図は現実世界を客観的に映し出す記録だけでなく、主観的な体験や感情を共有する場へと変貌しているとも言える。

2 「つかう」参加型GISの社会的実践

参加型GISは、1990年代前半から欧米を中心に研究が始まったが、当初は専門家が使うシステムのインターフェースを分かりやすくし、都市計画など市民参加の現場にGISを導入する重要性が背景となっていた。

日本国内でも、これまでに様々な参加型の取り組みが実施されている。例えば千葉市の「ちばレポ」（現在はMy City Report for citizensというサービスに統合され、30自治体に広まっている）は、市民が道路の損傷や不法投棄などの課題をスマートフォンアプリから撮影・報告し、その情報を受け取った行政の担当部署が対応して市民にフィードバックする仕組みである。本アプリは、「図2」に示すように地図上で報告があった箇所をステータス（受付中・対応済み等）ごとに色分け表示し、実際の現場の



〔図2〕My City Reportの地図と投稿画面(千葉市周辺)

状況を写真と文章で確認できるようにしている。さらに千葉市ではゴミ拾いや草刈りなど、市民自らによって解決できた地域課題を投稿する「かいけつレポート」も受け付けており、市民と行政のコミュニケーション手段の一つとしての役割も担っている。

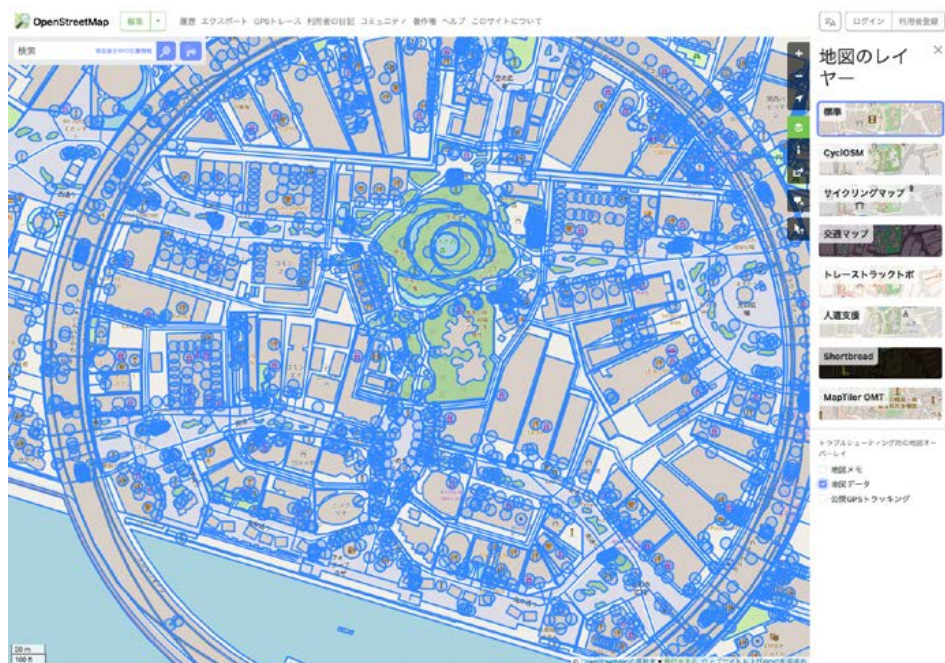
民間主体での位置情報や地図を介した参加型活動も近年では増えている。例えばウェザーニューズ社の「ウェザーリポート」は、市民からの天気情報の投稿を集約し、数や範囲に限りのある観測地点から得られる情報をカバーすることで、きめ細かな気象サービスを提供している。また「Yahoo!防災速報」等の災害情報共有システムは、ユーザーが投稿する現地の状況写真や体験談を通して、公式情報では把握しきれない局所的かつリアルタイムでの被害状況を可視化するプラットフォームとなっている。

3 「つくる」OSMが示すデジタル地図の協働

2000年代以降、Webを通じたクラウドソーシングにより、国や地域を超えた参加が可能になった。一般市民が自発的に生成し、Web上で膨大に蓄積された地

理空間情報は「ボランティア地理情報（VGI）」と呼ばれ、そのデータを生成する一人ひとりが情報センサーの役割を果たして地理情報を収集・共有する時代が到来した。

ボランティア地理情報の代表例として、冒頭に紹介したOSMプロジェクトは特筆に値する。この活動は2004年に当時イギリスの大学生であったスティーブ・コーストによって始められ、今や世界中で約1000万以上の編集アカウントが登録される巨大プラットフォームとなっている。OSMの大きな特徴は、二次利用可能なライセンス（ODbL）に基づく地理データベースとして整備・提供されている点にある。背景地図だけでなく、営利・非営利を問わず誰でもデータを自由に利用・加工・再配布できるのだ。OSMのデータ作成方法は多岐にわたり、衛星画像から建物や道路をトレースする方法、衛星測位（GNSS）を伴ったスマートフォンアプリや紙地図による現地調査など様々な手法が用いられている。既存の地図では網羅できないような、ミクロな対象物も地図データ化することが可能である。「図3」は2025年大阪・関西万博会場周辺の様子を示しており、複数の編



【図3】OpenStreetMapの地図データ(夢洲周辺)

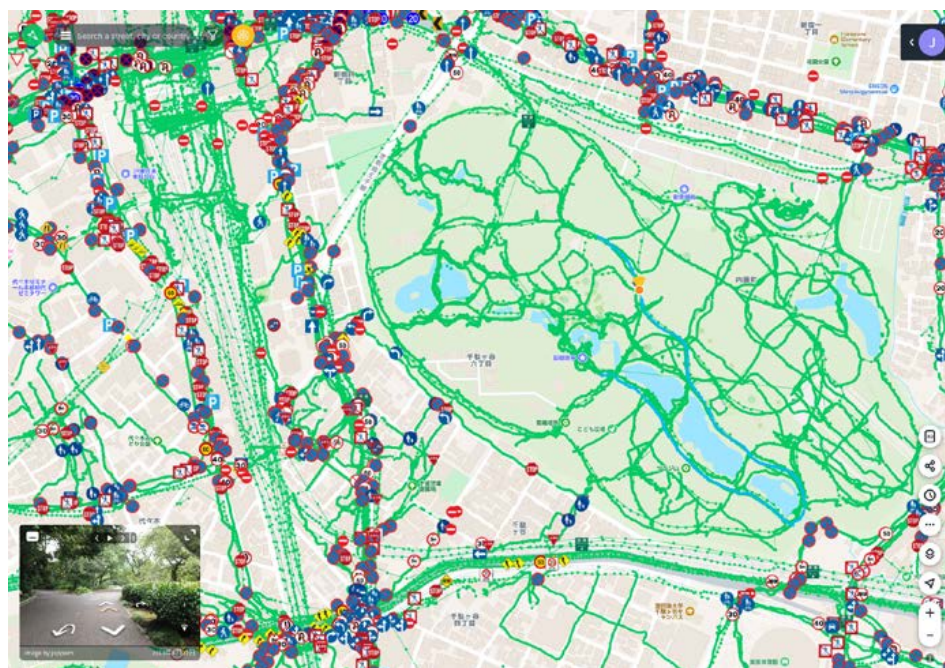
集者によって日々更新された履歴が記録されている。さらに地図に関するクラウドソーシングは、景観写真の分野においても世界中で急速にデータが蓄積されている。その代表例が2013年より開始された「Mapillary」

と呼ばれるサービスだ。これは主に街路単位での景観画像を共有するプラットフォームである(2025年8月時点で20億枚以上)。景観画像のオープンデータ化(原則的にCC-BY-SA 4.0)と、画像を教師データにした機械学習による高度な物体検出に取り組んでいる。

「図4」はMapillary上に蓄積された様々なユーザーからの投稿写真の位置情報と、その画像データを基に自動抽出された道路標識を示している。このように、今やデジタル地図の「つくり手」は利用者である私達自身でもある。誰もが制限なく自由に利用できるデジタル地図は、社会生活を維持する上で重要になっている。

ところでOSMが日本で特に注目を集めた契機は、東日本大震災を始めとする大規模災害の発生時であった。世界的にも2010年のハイチ地震において、発災直後から世界中のボランティアが衛星画像を基に被災地の地図を作成し、現地で活動する国境なき医師団などの支援団体に提供されたことが知られている。これらの取り組みは「クライシスマッピング」と呼ばれ、世界各地で災害対応だけでなく、人道支援のための地図作成が組織的に行われている。特に、国家的な地図作製機関が存在し

ないアフリカなどの地域では、OSMで作成された地図が唯一の詳細な地図として機能する場合もある。他方、災害時の正確かつ迅速な情報共有には課題もある。OSM自体がボランティアに基づくため、被害の程



〔図4〕Mapillaryの景観写真の分布(新宿御苑周辺)

度にもよるが、現地（住民）からの直接的な情報提供には限界が大きい。したがって遠隔からの情報、例えば再利用が許可された衛星画像や航空写真等に頼らざるを得ない。また、被害状況をOSM上に反映する上では、被災前の段階での充実度も重要となり、対象となる地域の地理的特徴に知識がある人々と協働も欠かせない。平時からの継続的なマッピング活動が極めて重要なのだ。

4 学生の反応から見る参加型GISの可能性

本稿で解説した様々な参加型GISの事例について、筆者は学部1年生の入門講義から紹介している。過年度の講義で学生から寄せられたリアクションペーパーからは、次のような若者世代の認識や期待感が窺える。最も多かった反応は、多くの学生がOSMの存在自体を初めて知ったという意見であった。特に「ウィキペディアのように誰もが参加できる地図」という概念に強く興味を引かれ、新鮮な驚きを示した学生が多数いた。ある学生は「様々な人の視点が合わさり、専門家だけでは作れない全く新しい地図が作れる」と、市民参加の意義や可能性を理解していた。

全体的な特徴としては、「更新」というキーワードについてよく言及され、次いで「地域」や「災害」なども多かった。学生たちは、OSMが毎日更新される理由を「世界各地で毎日起きている変化を伝えるためではないか」と考察した。また、「いつでもどこでも地図が作れる」ということは、正式な調査を行わずとも世界中で起きていることがそのまま地図に反映されるということか」と言及する学生もいた。

災害支援への活用にも強い関心が集まり、「災害時の避難場所などを書き込んでおくこともできる」や「過去に起こった災害についてその土地の地図に情報を載せておくことは有用」といった具体的なアイデアも提案された。

その他、「場所」という概念を占有する独占企業があつてはならない」や「場所は私たちの共有財産であり、ボランティアや寄付による活動によって維持されるもの」といった、OSMの理念や社会的意義を正確に把握する意見も見られた。また身近な地域での活用方法について「ウォーキングを通して住んでいる土地を知る活動」や「地域の出来事をまとめるアーカイブ」など、具体的な提案も寄せられた。これらの意見は、学生たちが参加型地

図を単なる技術としてではなく、地域課題の解決手段として捉えている証と考えられる。

5 参加型によるデジタル地図の課題と未来像

参加型GISは、地図分野の技術革新を超えて、社会のあり方そのものに影響を与えつつある。本稿で紹介した実践を通じた展望として、筆者の論文[※]を手がかりにいくつかの方向性について考察する。第一にデータ取得のリアルタイム性の向上により、人が手作業で行うマッピングを超えた取り組みが考えられる。例えばIoTセンサーや自動運転車両からの情報を統合し、常に最新の地域の状態を反映する動的な地図の実現が期待される。またこれらの技術は、深層学習や大規模言語モデル（LLM）を援用した自動マッピングなど、「Geo-AI」と総称される新しい研究とも関連している。第二に、デジタル地図の個人化・カスタマイズ化である。多くの一般図は汎用的に用いられるために作製されるが、利用者の目的や嗜好の多様化にに応じて、必要な情報だけを選択的に表示するような、地図インターフェースの開発が進むだろう。実際に、OSMをベースマップとして活用するアプリケーションやWebサービスは多

岐にわたっており、地図としての見せ方や使い方もサービスによって異なっている。

他方で、参加型GISを中心とするデジタル地図には重要な課題も多く、情報の正確性やデジタルデバイスなどの課題も顕在化している。前者はOSMなどに限ったことではないが、偽情報を含む意図的なデータ破壊（バンダリズム）への対応、後者は地図の未整備な地域やオフライン下での利用など、すべての人がデジタル地図の恩恵を受けられる環境整備が喫緊の課題である。

地図には、人々が空間を認識しコミュニケーションを図るツールとして機能した歴史的経緯がある。その本質的な価値はデジタル時代でも失われることはない。今後は、デジタル公共財としての役割をより一層果たしていく上で、すべての人々が主体的にデジタル地図を「みる・つかう・つくる」という三つの行動に積極的に関われるような環境づくりに期待したい。

※ 瀬戸寿一(2024)「ボランティア地理情報とつながるOpenStreetMapの活動展開と研究動向」『GIS理論と応用』32(2) pp.11-22.
<https://doi.org/10.5638/thagis.32.47>



「私立大学のミライー教育・地域連携編―」

共通基礎科目

「人間学」での全学的挑戦

赤澤 清孝

大谷大学社会学部長

はじめに

大谷大学は1665年、京都・東六条に開創された東本願寺の学寮をその淵源とし、1901年に近代的な大学として開学した。現在は、京都市北区にキャンパスを置き、文学部、社会学部、教育学部、国際学部^{よこ}の4つの学部と大学院を持つ学生数3157名（2025年5月1日現在）の大学である。親鸞の仏教精神に基づき、人材^たではなく、人物^{ぶつ}の育成を目標とする学び「人間学」を教育・研究の根幹としている。2018年には、大谷大学を象徴する新メッセージとして「Be Real 寄りそう

知性」を作成。「真実」と「現実」をしっかりと見据えながら、他者に寄りそう知性を育むことで、あるべき人間や社会の姿を追求していく本学の教育姿勢を示している。また、2015年には、「地域連携室（コミュ・ラボ）」を設置し、実践的な学びと地域貢献の両立を目指した地域連携事業を展開している。正課授業などと連動して実施する「地域連携プロジェクト」は、過疎地域の活性化、子育て支援、コミュニティラジオを通じた地域情報発信など13のプロジェクトを行っている。

1 祇園祭ごみゼロ大作戦の概要

これから紹介する「祇園祭ごみゼロ大作戦」も地域連携プロジェクトのひとつである。京都では7月に世界有数の伝統祭事である祇園祭が開催される。祭りの山場となる山鉾巡行^{やまぼこ}前の宵山行事期間中は、多くの露店が四条烏丸から広範囲にわたって立ち並び、国内外から多くの来場者が訪れる。しかし、来場者数に比例して課題となるのが、紙やプラスチック容器などの廃棄物である。清掃ボランティアらの活動により、散乱ごみなどは減ったものの、可燃ごみの量は増える一方であった。そこで2



〔写真1〕リユース食器で焼きそばを提供する露店
(写真提供:一般社団法人祇園祭ごみゼロ大作戦)



〔写真2〕エコステーションでの活動の様子

実施年	2013 年	2014 年	2019 年	2024 年
取組開始からの年数	開始前	1 年目	6 年目	11 年目
全体の廃棄物量(kg)	57,330	42,560	32,280	31,760
可燃ごみの量(kg)	55,780	34,430	29,080	28,390
来場者数(人)	500,000	620,000	330,000	487,000
リユース食器導入量(個・数)		215,000	188,400	204,400
リユース食器導入店数〔露店〕		212	151	198
リユース食器導入店数〔露店以外〕		0	42	34

〔表1〕祇園祭ごみゼロ大作戦の実績

出所:「祇園祭ごみゼロ大作戦2025 ボランティアスタッフ当日活動概要」一般社団法人祇園祭ごみゼロ大作戦(2025)より筆者作成

014年、京都市や環境NPO、京都環境事業協同組合、露天商組合が実行委員会を組織し、使い捨て食器に代わって繰り返し洗って使用可能なリユース食器を露店に導入するなど、ごみの減量と散乱ごみの防止につながる祇園祭ごみゼロ大作戦をスタートした「写真1」。現在は、先述の実行委員会を基盤に組織化した一般社団法人祇園祭ごみゼロ大作戦(2017年設立)がその運営を担う。毎年延べ2000人を超えるボランティアの協力を得て、

烏丸通など主要な場所にリユース食器の回収やごみの分別回収を行うエコステーションを配置し、ごみの減量を呼び掛けている「写真2」。その結果、可燃ごみの量は開始前の2013年の約56トンから2024年には28トンと半減し、20万(個・枚)を超えるリユース食器が活用されるなど、大きな成果を生んでいる「表1」。

2 共通基礎科目「人間学」での展開

大谷大学では、地域に根ざしたPBLとして、2015年よりこの取り組みと連携した地域連携プロジェクトを発足し、筆者が担当者となった。プロジェクト開始当初は、主に社会学系の学生を対象とした正課授業として実施したが、幅広い学部・学科の学生からこの授業を受講したいという要望もあったことや、大学としてPBLを全学的に拡大する方針などもあり、2017年からは全ての学部・学科の学生が履修する共通基礎科目に開設する「人間学Ⅱ」として開講した。本学では、共通基礎科目として1年次に仏教思想を通じて人間に関する考察を深め、他者と共に生きる社会への問題意識を養う「人間学Ⅰ」、2年次以降に様々な学問分野が示す多様な人間観にふれるなかで自己を見つめ直し、現代の諸問題への関心を喚起する「人間学Ⅱ」を学修する。「人間学Ⅱ」は20テーマで開講されており、学生が任意に選択できる。

筆者が担当する「人間学Ⅱ-9」では、「行政や企業、住民組織、NPO等による環境問題の解決に向けた取り組みを学ぶとともに、野外イベントや祇園祭での環境対

策活動（ごみ削減）への参加を必須とし、その経験をレポートにまとめることで環境問題や、その解決に向けて取り組む市民活動を深く理解すること」を目的として開講している。その根底には「地球温暖化問題やごみ問題など、現在の環境問題は人の生活様式、社会システムそのものに原因があり、これを解決していくには、市民一人ひとりの意識と行動が必要である」という考えがある。受講生は全学部から毎年合計100名程度である。また授業では、環境問題のほか、疫病退散を祈る神事としての祇園祭行事や山鉾巡行に関わる町衆の想いなども学ぶことができ、歴史ある祭の一端に学生自身が関わる意義を理解させている。

活動本番を控えた7月上旬には、運営団体から取り組みの背景やこれまでの成果、当日の運営体制や集合時間・場所、エコステーションでの活動の詳細、持ち物、安全管理や保険についてなど、約90分間の説明を行い、実践活動への意識を向上させる「写真3」。当日の活動はシフト制で概ね3時間程度とし、時間帯は正午開始から21時開始まで5つの区分を設けている。学生には、夜間の歩行者天国に合わせて多くの来場者がやってくる夕方

から夜間のシフトでの活動を担当してもらう。当日、学生らはそれぞれ事前に指定された集合同場所に赴き、現場のボランティアリーダーに到着を告げ、その後グループに分かれて担当のエコステーションでリユース食器の回収や来場者へごみの分別

を促す。終了後はボランティアリーダーに完了報告を行い、現地で解散という流れである。なお、シフトの登録や当日の受付（チェックイン、チェックアウト）は運営団体が提供するVolalogというウェブサービスを利用している。これによりシフトへの登録および当日の出席状況などを、パソコンやスマートフォンからリアルタイムで確認できるようになっている。

参加学生には、活動終了後に活動報告レポートの作成を課している。当日の活動場所や活動内容、感想のほか、



[写真3]運営団体によるオリエンテーションの様子

改善点の提案も求める。最終講義では小グループを作り、各自のレポートの内容をピアレビューし、教員からの総括コメントで締める。

なお、学生の感想や活動の改善点については、翌年以降のプロジェクトの運営がよりよいものになるよう、教員から運営団体にフィードバックしている。

3 祇園祭ごみゼロ大作戦の成果

これらの取り組みの成果は多岐にわたる。まず、地域社会にとっては、先にも述べたようにごみの量が大幅に削減された。また、地域住民の負担減にもつながっている。祇園祭の宵山行事の翌日7月17日は山鉦巡行が行われる。祇園祭ごみゼロ大作戦が行われるまでは、宵山の歩行者天国終了後、美しい環境で山鉦巡行をするために、住民の方々が翌日の早朝まで清掃活動をされていた。しかし、この活動開始後はその負担が大幅に軽減されたと聞く。そして、宵山行事を楽しむ観光客や飲食物を提供する露天商に、環境負荷の低減と豊かな暮らしの両立を目指す生活様式について考える機会を提供することにもつながっている。さらに、近年は外国人観光客も多数来

場しており、活動の様子を撮影するなど、SNSで投稿している様子も見られた。これにより世界各地にも同様の取り組みが生まれる可能性も秘めている。

運営団体にとっては、1日1000人、2日間でのべ2000人規模のボランティアを要する取り組みに、本学からコンスタントに100名規模の学生の参加があることは、安定した事業運営をすすめる上で心強いであろう。

また、学生は環境問題を座学で学ぶだけでなく、問題解決のために行動することで、「社会に貢献できた」という満足感を得ている。山鉾町の住民やエコステーションを利用する観光客から「ありがとう」「がんばって」という励ましの言葉をもらって有実感を感じている学生も多い。また、全学科の学生が受講できる授業であるため、普段は交流の少ない他学部とのグループディスカッションや、当日のエコステーションでのチーム活動を通して交友関係も広がっている。さらに、当日の活動場所によっては社会人や他大学の学生とチームを組むこともあり、多様なつながりを得る機会にもなっている。もちろん、学生自身が日々の生活において、環境への配慮を意識する行動を心がけるようになったことは言うまでもない。

ちなみに、大谷大学では授業とは別に、この祇園祭ごみゼロ大作戦への協賛も行っている。協賛の便宜として大谷大学からの参加学生は、肩口に大学ロゴを入れたスタッフシャツを着用して活動している。また一部のエコステーションでは大学ロゴのバナー掲示もなされている「写真4」。積極的に活動に参画する姿を祇園祭へ来場の方たちにPRすることで、大学の社会認知度向上にも寄与している。オープンキャンパスなどでも、高校生や保護者から「この活動で大谷大学の取り組みに興味を持った」「大学生になったら参加してみたい」という声をいただくこともあった。

4 PBL成功のポイント

このPBLは毎年100名規模の学生が受講している



〔写真4〕エコステーションでのPRの様子

が、その成功のポイントを以下に挙げておきたい。

まずは、参加する社会貢献活動が学生にとって興味深く、かつ無理のないものであることが挙げられる。具体的には、日本三大祭りのひとつである祇園祭に関われること、ごみ削減という身近な暮らしの問題がテーマであること、活動時間も3時間程度と負担が少ないこと（実際は猛暑の中での屋外活動は過酷であったが）などである。また、「ボランティア活動に興味はあるが参加する機会がつかれなかった」「二人で参加することに躊躇していた」という学生にとって、授業の一環としてチームで活動をするPBLの仕組みは、社会活動参加への心理的ハードルを下げ、挑戦を後押しするものとなっている。さらに、受講後に環境問題や地域の行事などでボランティアとして活動を始めた学生も少なくない。

授業の運営という面では、地域連携室の役割も大きい。地域連携アドバイザーという専門性を有するスタッフが、運営団体との丁寧な連絡調整、学生の登録状況の確認、活動当日の様子の記録、学生のフォローなど、多岐にわたって多忙な教員を支えてくれている。

おわりに

筆者は大学教員として勤務する以前は、地域のNPOの代表者を務めていた。そのため、様々な社会貢献活動の経験や地域とのネットワークを有している。こうした背景もあり、連携先の地域側のニーズや事情をうまく掴みながら、大学と地域、双方にメリットのあるPBLが企画できている。しかし、そのようなケースは非常に稀である。教員、あるいは学生、地域の側に負担が大きいPBLは継続することが難しいのが常だ。大学、学生、地域社会の三者にとって意義のあるPBLを進めていくためには、大学として、教員をバックアップする組織・運営スタッフの充実などが欠かせないであろう。

〈参考ウェブサイト〉

一般社団法人 祇園祭ごみゼロ大作戦 <https://www.gion-gomizero.jp/>



社会に役立つ人材を育てる

八木 茂典

中央大学理工学部准教授

はじめに

私は、医療機関の副院長職から2021年に転身し、現在は総合大学の理工学部体育教室に所属している。専門は「スポーツ医学」「リハビリテーション学」で、共通教育科目を担当している。授業を担当するにあたって、まずは大学体育について勉強する必要があった。

1. 大学体育の立ち位置

大学体育は、大学設置基準の大綱化（1991年）で大きく変化した。それまでは大学卒業のための要件として「120単位及び体育の4単位」が定められていたが、大綱化を経て体育の単位はそこから外された。入学定員数に応じて体育担当の専任教員数が定められていたが、これも廃止された。

大綱化以前（1947年）は、結核が流行した時代背

景から、大学体育の目的は健康な学生を育てることだった。しかし、大綱化によって、その役割は保健センターや学生生活課のものとなり、大学体育が担うものではなくなった。そうすると、大学体育の存続のためには改めてその必要性を示さなければならないが、説得力のある答えは示されず、私立大学の多くで体育は「選択」科目となり、体育教員の数も削減された。

大学進学率が過半数を超え、新規労働者を供給する中心となった大学に対し、産業界から社会人基礎力の育成に関する声が強くなった。2006年、大学は「教育を通じて、自立した市民や職業人として必要な能力を身につけさせること」を示した。実行に当たって、2016年「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」が制定され、各大学ではディプロマ・ポリシーに沿った教育の提供が必要になった。

歴史が示すように、時代背景が異なれば、育成する人材像も異なる。教育は「社会に役に立つ人材を育てる」ものであり、本学では、体育を「他者や異文化に対する理解力を備え、他者と円滑にコミュニケーションを図る

ことができる」力を養成する科目として位置づけている。

2. 社会経験を生かした授業

次に私は、大学での授業の進め方について学ぶ必要があった。それまで教え方についての指導を受けた経験はなかった。2024年に私大連FD推進ワークショップに参加させていただく機会を得て、そこで初めて授業を行う際のコツを2点ご教授いただいた。1点目は、「この授業で何を伝えたいのかを明確にする」ことである。多くの学生は大学卒業後、社会に出る。そのため、私の授業は「社会に役立つ人材を育てる」ことをゴールとした。2点目は、「自分にしかできない授業をする」ことである。まだまだ大人と接した経験の少ない20歳前後の学生に対して、20余年の社会経験を持つ私だから提供できる授業があるはずであると感じ指導いただいた。

医療機関では患者のコミュニケーション力を評価し、カルテに記録している。コミュニケーションは、「発話」と「理解」との2つから成る。「発話」とは自分の考えや感情を相手に伝える行為であり、どうすれば相手にうまく伝わるかを優先して考える必要がある。「理解」とは相

手の発話の背景にある意図や感情まで把握することである。つまり、コミュニケーションとは、お互いに相手の心を読むために頭をフル回転させて、人と人とのあいだに共通のものをつくりあげる作業だといえる。これらの能力を「教え」、「育てる」ことが、大学体育の目的だと考えた。

3. コミュニケーション力を育てる

学生は多様なバックグラウンドを持ち、異なった出发点からこれらを目指すことになるため、その道順は一人ひとり異なる。具体的には、左記のような手法を用いている。

まず、2人1組でペアとなり、1分間お互いに自己紹介する。次に、4人1組となり、先ほどのペアの相手のことを他2人に対し、「この方は〇〇で……」と他者を紹介する。その後、4人1組で「Yes and（いいね、さらに）」ゲームを行う。例えば「新しいスマートフォン開発のアイデアを出してください」というテーマを設定したとする。1人目の人が「スマートフォンで撮影したお菓子がその場で実物となって現れ、食べることができる

といいよね」というアイデアを発表する。現実的である必要はない。2人目以降は、どんなアイデアであっても「いいね」と他者の発言に共感し、「さらに、こんな機能がついているともっといいよね」とアイデアをプラスしていく。

さらに、個々にプレゼンテーションの機会を設けている。話す相手が、1人、2人、3人の少人数、大人数と変化するれば、相手に合わせて話し方や、場合によっては話す内容も変化する。プレゼンテーションにあたっての十分な準備も必要になる。聴く側には、目を見る、頷くなど傾聴力が要求される。感想や意見を求める場合もある。教員が伝えることよりも、周りの友達の発言や行動から学ぶことの方が大いに有効であると感じている。

4. 「正解」ではなく「選択」

医療の世界では、間違った治療をすれば患者に不利益を与えてしまうので、常に「これでいいのか?」という自問自答と闘っている。「この治療法は死亡する確率が10%あります」と言われたとき、90%は成功するので「治療をする」と答える人もいれば、10%も失敗の可能性が

あって怖いので「しない」と言う人もいる。医療従事者はエビデンス(科学的根拠に基づいた知識)、臨床家の経験、患者の希望などを考慮し、現時点でその人にとってよいと思われるものを「選択」するのであって、「正解」があるわけではない。

大学での教育においても同じことが言える。高校までの教育は、全国一律の教科書を使って「正解」がある世界だけを扱っている。しかし、大学の教育では教員がその内容は面白いし学ぶ意義も大きいと思うものを取り扱うことが多い。そこで学ぶ内容は、その分野の主流の考えではなく少数派のものかもしれない。そうすると、授業で得た内容をどのように捉え、生かすかを、学生が自分の頭で考えることになる。大学は、学生が自ら思考し、「選択」する必要がある場所なのだ。

目まぐるしく社会が変化する現代、若者たちは厳しい選択を迫られていると思う。かつての第1次、第2次産業革命によって多くの農民が工場労働者となった。2015年の株式会社野村総合研究所は、第4次産業革命において、2030～2040年に日本の労働人口の49%がロボットやAIに代替されると発表している[※]。既存

の職をめぐって激しい「椅子取りゲーム」争いをするか、時代の変化に対応して新しい職へ行くか、自分で選ばなくてはいけない。新しい環境は誰だって怖いし、初心者なのでダメダメな部分が露呈する。しかし、「今のままでは良くない」と思った日から成長ははじまる。解のない時代の中で、学生には、自分の意志で選択し、失敗を怖がらず歩んでいってほしい。

おわりに

私の授業の履修者の多くは1年生だ。2025年、初めて担当した学生が卒業生となり、複数人が「先生の授業が一番役に立った」と伝えてくれたことは、非常に嬉しく思う。しかし、私の授業に否定的な教員、学生も存在する。様々な考え方があるので、日々勉強し、アップデートした授業を提供するしかない、と思っている。

最後に、私大連FD推進ワークショップ運営委員の先生方、事務局の皆様、一緒に学んだ参加者の先生方、送り出していただいた本学関係者に感謝申し上げます。

心・社会・身体 の健康づくりに寄与する

はじめに

聖カタリナ大学人間健康福祉学部は、2025年4月から「聖カタリナ大学健康社会学部」に名称を変更するとともに、既存の社会福祉学科と人間社会学科の教育内容を発展的に融合した「現代人間学科」を新たに設置する。この「健康社会学部」には、「現代人間学科」と現行の「健康スポーツ学科」の2学科を置き、学部教育研究をさらに進化させる。

1 学部開設のねらい

テクノロジーが目まぐるしく進化を続け、グローバル化の動きも活発化する中で、私たちの住み暮らす社会は日進月歩でより複雑なものへと変化しつつある。加えて、自然災害の激甚化（例…豪雨災害の頻発化・大

規模化）といった事態から見て取れるとおり、私たちの社会を取り巻く自然環境もまた、よりアンコントロールなものとなりつつある。

そのように、社会と環境の両面において激動の時代を生きる私たちは、かつてないほど大きなストレスに日々さらされており、これまでも増して、健康リスクの高まりが懸念されるところである。人々の健康を維持・増進・回復することは、現代社会の喫緊の課題と言えるだろう。

1948年に発効された世界保健機関（WHO）憲章では、前文において「健康」を次のように定義している。「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう」（日本WHO協会訳）。今もなお世界中で広く使われているこの定義から、「健康」というものが「身体」の次元のみならず、「心」や「社会」の次元にも関わるものであることが分かる。

「心の健康」「社会の健康」「身体の健康」。これら3つの健康づくりに資する人材を輩出することを通じて、地域社会に広く貢献したい。そうした思いから、本学部は開設された。

2 各学科の特徴

このたび新たに設置された現代人間学科では、「社会・データ」「心理・メンタルヘルス」「ソーシャルワーク」の3コースが置かれ、心と社会の健康づくりに資する人材を養成する。ここで、心の健康づくりとは、心理教育や自殺予防活動、支援者のメンタルヘルス等を推進することの謂であり、社会の健康づくりとは、地域活性化や共生社会、ワークライフバランス等を推進することの謂である。本学科の特徴は、これらの健康づくりの基盤となる、社会学、データサイエンス・プログラミング、心理学、社会福祉学といった複数分野の多彩な専門知識・資格を得ることができる点にある。数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）修了証明書、データサイエンス・AI実務ポート、ITパス

ポート、社会調査士、認定心理士、公認心理師（国家試験受験資格「大学における必要な科目」）、社会福祉士国家試験受験資格、社会福祉主事任用資格、介護職員初任者研修修了証明書等の取得を目指すことが可能である。

また、健康スポーツ学科では、「健康・レクリエーション」「コーチ・マネジメント」「教職」の3コースが置かれ、レクリエーション教育・トレーニング教育・スポーツ教育の推進、生活習慣病やフレイルの予防・啓蒙等、地域の人々の身体の健康づくりに広く貢献できる人材を養成する。中学校・高等学校教諭一種免許状（保健体育）、健康運動指導士受験資格、健康運動実践指導者受験資格、ジュニアスポーツ指導員受験資格、スポーツコーチングリーダー資格、レクリエーション・インストラクター資格、パラスポーツ指導員（初級）資格、社会福祉主事任用資格等の取得を目指すことが可能である。学生たちには、本学部で心・社会・身体の健康づくりについて学び、現代社会が直面する喫緊の課題解決に大いに貢献できる人材に成長してほしいと願う。

[青山学院大学]

キャンパスを見守り続けるイチョウ並木

青山学院大学 政策・企画部 大学広報課

1 青山キャンパス

イチョウ並木の歴史

青山キャンパスの正門から間島記念館へと続く、青山学院を象徴するイチョウ並木は、1926年に整備されたものである。1923年の関東大震災で本学は甚大な被害を蒙ったが、復興計画のもと現在の大学1号館と2号館が建てられ、青山学院第5代石坂正信院長の案により、イチョウの苗木も植えられた。苗木は、当時の中学部の生徒たちと教職員の寄付によって買入れられた。

その後の第二次世界大戦による空襲で、イチョウ並木も被害を受けたが、1947年、中学部の父兄会からの援助によって緑化運動を開始し、再び元の姿へ

と蘇った。戦後の混乱期にあっても、自然と調和した学びの場を取り戻そうとする教職員や保護者の思いが、再生に結実したのである。

そして今もなお、青山キャンパスのメインストリートは本学のシンボルであり、秋には鮮やかに色づいたイチョウ並木が訪問者を迎えている。

また、青山学院創立100周年にあたる1974年10月に制定された校歌の一番の歌詞にも、「忘れじ緑の銀杏の並木」というフレーズが登場する。これは、イチョウ並木が単なる景観ではなく、青山学院の歴史と精神を象徴する存在であることを物語っている。

2 大学公認キャラクター「銀ニャン」

2012年には、ゆるキャラ「銀ニャン」が誕生した。銀杏の実をモチーフにした猫のキャラクターで、学生たちの創造力と愛校心が形となった存在である。

また、「銀ニャンフェス」というイベントでは、本学の学生が中心となり、学生らが構内で拾った銀杏を学生食堂や青山キャンパス周辺の飲食店に提供し、メニューに加えていただくという活動も行った。匂いなどの理由か

ら敬遠されていた銀杏を地産地消の食材としてとらえる
学生の発想が光った。

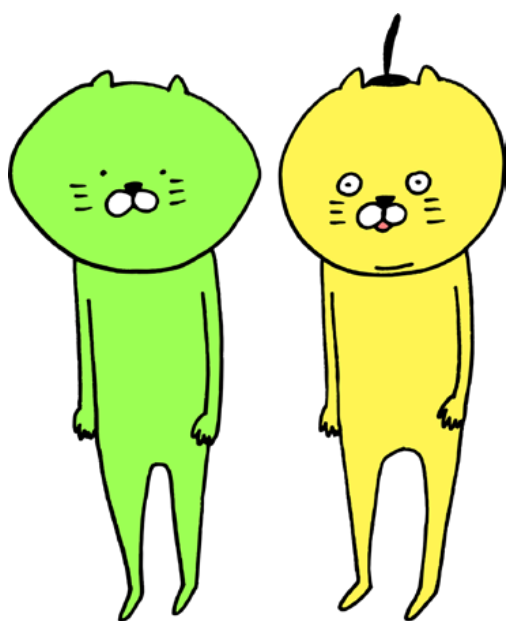
そのほか、グッズやLINEスタンプなども制作され、
学内外で人気を集めている。

さらに、青山学院創立150周年を記念して、2024年にはこの青山キャンパスの歴史を象徴するイチヨウの葉を集めて抽出した染液を使い、今治産のタオルを染めた黄色いハンカチ「青山の銀杏染めタオルハンカチ」が製作・販売された。この記念グッズは、イチヨウ並木の美しさと歴史を日常の中で感じられるアイテムとして、多くの学生や卒業生に親しまれている。

3 青山学院の歴史と精神を体現するメインストリート

たくさんのイチヨウの木が植えられた本学のメインストリートは、現在も学生たちをはじめ、多くの方々に親しまれている。四季の移ろいを感じながら、学生・教職員といった本学の構成員と校舎をつなぐ場所であり、青山キャンパスの中心地、学生たちの憩いの場所であるとともに、卒業生にとっては思い出が詰まった帰郷の道でもある。メインストリートのイチヨウ並木は、単なる景

観としてでなく、青山学院の歴史と精神を体現する存在として、今も静かに私たちに語りかけている。



公認キャラクター「銀ニャン」



青山キャンパスのメインストリート

[広島修道大学]

紡ぐ繋ぐハーモニーロード —個性が奏でる美しいハーモニー—

吉田 輝美 広島修道大学事務局長兼財務部長

1 歴史と経緯

学校法人修道学園は、1725（享保10）年、広島藩五代藩主浅野吉長が藩校「講学所」を開設したことを淵源とし、今年で創始300周年を迎える。原子爆弾の壊滅的被害からの復興や学制改革等を経て現在に至り、広島経済界の強力な支援の下、7学部4研究科を擁する広島修道大学、修道中学・高等学校及び広島修道大学ひろしま協創中学・高等学校を設置している。

1974（昭和49）年、広島修道大学は広島市中心部（観音キャンパス）から現在の西風新都地区（沼田キャンパス）へと総合移転を果たす。当時は公共交通機関も充分に整備されていなかったため、通学手段としてバス運行会社と特定契約を締結し、スクールバスを運行させていた。

1994（平成6）年、本学に隣接する広島広域公園内で「第12回アジア競技大会広島1994」が開催されることになり、交通インフラとして広島市中心部と会場を結ぶ新交通システム「アストラムライン」が開通した。そして同年9月、スクールバスの全4路線はその役目を終了した。

2 キャンパスデザインの先駆け

アストラムラインの開通前、アストラムライン終点の修道大学前駅舎予定地からキャンパス中心部までの全長約350mの既設道は鬱蒼とした木々に覆われた幅員11mの車道で、徒歩による通学には適していなかった。そのため、総工費7億5600万円という大規模な中央道路整備・植栽工事が計画された。既設道を7～8mに減幅し、新たに8mの歩道を造成、グリーンベルトを設けて歩車分離を完成させ、樹高12～14m、幹周1～1.4mのイチヨウ52本を歩道沿いに2列に配しイチヨウ並木とした。周辺にはクスノキ、タブノキ、カシ、モミジなど27

種類の中高木約800本を植え、キリシマツツジ、西洋シヤクナゲなどの低木、モスフロックス（芝桜）・マツバギクなどの地被類^{ちひるい}を広範囲に配して景観を整えた。歩道は「備前焼」による特殊レンガを特注で製造し、通学の足元を彩った。それまで無頓着だった大学の「表玄関」に新風を吹き込んだのである。

3 ハーモニーロード

1994（平成6）年10月28日、正門から本館前まで続くイチヨウ並木の中央道路が完成し、沼田キャンパス20周年記念式典にて、中央道路の愛称を「ハーモニーロード」とした。本学商学部2年生の発案であり、沼田の地に集うさまざまな個性、これらの個性が奏でる美しいハーモニーの象徴として名付けられた。

本学の建学の精神は、古典の一つ『中庸』の「天命之謂性 率性之謂道 修道之謂教」に由来する。これは「人間にはそれぞれの天性がある。天性を伸ばすのが人間の道である。その道をしっかりとしたものに整えるのが教育である」という意味である。学生一人一人の個性を育んでいく建学の精神は、ハーモニーロードにも息付いている。

4 記念碑と季節の移ろい

ハーモニーロードには、様々な記念碑が設置されている。本館前に故田中好一理事長胸像、体育館前に第12回アジア競技大会記念碑及びハーモニーロード中央には本学卒業生である吉田拓郎氏の歌碑がある。また、完成翌年には広島市「ひろしま街づくりデザイン賞」の緑化推進部門に選出されている。

最後に特筆すべきは、イチヨウ並木、その四季折々の自然の美しさである。春には新芽が活き活きと芽吹き新学期の始まりを予感させ、夏には直射日光を木漏れ日に和らげて一瞬の涼を与え、秋には天も地も黄金に染め、冬には深々とした白銀の世界に溶け込んでいく。表情豊かに変化するイチヨウ並木は、幾年も巡りゆく学生たちの姿を見守り続けているのである。



ハーモニーロードの銀杏並木

[武蔵野大学]

苗木から育てた銀杏並木

伊藤 泰彦 武蔵野大学学生部長・工学部教授

はじめに

本学武蔵野キャンパスには、正門から続く、学祖の雅号を冠した雪頂講堂へと向かう銀杏並木がある。銀杏の樹々は、春には新緑の青葉が瑞々しさを醸し、夏には暑さを和らぐ緑陰空間をつくり、秋には黄金色の彩りを演出し、冬は陽だまりを生み出す。秋は、黄金色に染まった枝木の葉、直後に訪れる落ち葉の絨毯がとても綺麗だ。スマホで撮影する学生たちの姿も見られ、微笑ましく思う。

1 緑豊かな武蔵野キャンパスと銀杏並木の経緯

本学の前身「武蔵野女子学院」は、関東大震災の翌年19

24年に、築地本願寺の境内で創設された。その5年後、1929年に保谷村（現・西東京市新町）に移転した。この地が、銀杏並木のある本学武蔵野キャンパスである。今は立派な樹々が林立する環境だが、キャンパス内の案内板には、「当時は、一面『茅萱（チガヤ）』の原野であったその中に山桑が二本だけはえていたそうである」との記述がある。「武蔵野女子学院五十年史」（1974年編）には、2代学院長・鷹谷俊之先生の回想録がある。保谷移転前の1926年、築地から遠足をして、黒松苗2500本を植えたことに始まり、創立10周年の1934年、医師・富永置三氏より藤28本と銀杏苗31本が寄贈され、銀杏は道の両側に植えたと紹介している。銀杏並木は、本学が小さな苗木から育んできたのである。

2 原風景と当初のキャンパス計画から並木道を振り返る

キャンパス周辺の原風景を辿ってみる。この地は、八代將軍徳川吉宗の享保の改革により、1724年から上保谷新田として開発（1736年に検地）された歴史を持つ。キャンパス南東の正門は、五日市街道と玉川上水の分流・千川上水に接している。そのいずれも、江戸の

発展を支えるインフラである。上保谷新田は、五日市街道沿いの路村と上保谷村の散居村の特徴が混在した地域のように、本学キャンパスはちょうどその境界に位置している（「新座郡上保谷新田絵図」1869年9月、小平市立図書館所蔵）。つまり、前述の「一面茅葺の原野」は、何もない更地ではなく、近世江戸の生活を支える水利と生業を礎にした、恵みの土地なのである。

その地を得た本学が、キャンパスの未来像を当時どう描いたのか考える。このキャンパスの計画図面として、1927年作図の「武蔵野女子大学建築設計図」が残る。その図には、設計者に菅原栄蔵、顧問に伊東忠太の名が記されている。伊東忠太は、法隆寺の柱のむくりを古代ギリシャのエンタシスが伝播したものと唱え（「法隆寺建築論」1893年）、20世紀初めに世界一周の建築視察旅行を敢行した。その後、日本・西洋・アジア・イスラムなど多様なモチーフを用いた建築家として知られる。旧真宗信徒生命保険株式会社本館（現・本願寺伝道院、1912年）、旧東京商科大学（現・一橋大学）兼松講堂（1927年）、築地本願寺（1934年）などが、その例である。さて、先のキャンパス計画図だが、そのまま

には実現していない。計画の特徴を、正門から北西へ延びるアプローチと広場が作る中心性すると、正門から講堂へとキャンパス中央を貫く並木道が、その特徴を継承しているといえるのではないだろうか。

さて、あらためてキャンパスの樹々を眺めてみた。白檜・すだ椎・小檜・棕木・桜・楓・榎・黒松・赤松・大王松・ヒマラヤ杉・メタセコイヤ・ドイツ唐松・青桐・鈴懸の木・ユーカリ・楠・菩提樹・泰山木・椿・金木犀など多種多様。キャンパスの緑は、屋敷林・雑木林といった武蔵野の原風景、伊東忠太的な植栽の異文化混淆、建学の精神の縮図のようである。その中で、銀杏並木は、多様な立場や願いを繋ぎとめるキャンパスの基軸といえよう。本学は、昨年度創立100周年を迎えた。銀杏の根回りの整備などを施しながら、この銀杏の並木が次の100年に向けて保全されることを願っている。



紅葉の銀杏並木



銭湯ペンキ絵師

田中 みずきさんに聞く

〔聞き手〕 川島 葵さん フリーアナウンサー

A large mural on a building wall depicts Mount Fuji with snow-capped peaks and a blue sea scene with waves and a small boat. The mural is painted in a style that blends with the building's architecture, which includes a dark door and a window with a decorative border.

光を描き出し

くつろぎの空間を演出する

銭湯ペンキ絵師

C L O S E U P

たなか・みずき

1983年生まれ、大阪府出身。幼少時から東京に在住。2006年、明治学院大学文学部芸術学科卒業。2008年、明治学院大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了。大学在学中に卒業論文の調査を通して知り合った銭湯絵師・中島盛夫氏に弟子入り。8年半の修業の後、2013年に独立。著書に『わたしは銭湯ペンキ絵師』（秀明大学出版会）。

日本に3人の銭湯ペンキ絵師への道

川島 本日は、日本に3人しかいない銭湯ペンキ絵師の一人である田中みずきさんにお話を伺います。先ほど、神田にある銭湯、稲荷湯に描かれたペンキ絵を拝見しましたが、雄大な富士山の姿に目を奪われました。素晴らしいペンキ絵を描かれる田中さんですが、子どもの頃から絵を描くことが好きだったのでしょうか。

田中 絵を描くのも好きでしたが、小学生の頃は漫画を描くのが大好きでした。時間さえあれば落書き帳にひたすら漫画を描いていましたね。子どもの頃は、体が弱かったので病院によく行き、お医者さんに憧れていたのです。次第に家で漫画を真似して描くようになり、お医者さんより漫画家になりたいと思うようになりました。

川島 明治学院大学文学部芸術学科を卒業されていますが、美術の道を志したきっかけは何だったのでしょうか。

田中 新聞社に勤めていた父が美術の記事を書いていたこともあって、よく美術展に連れて行ってくれました。美術に触れるうちに、自分でも作品を作れたら面白そうだなと思うようになったのです。美術の歴史を知っていれ

ば面白い美術作品が作れるのではないかと思ったことと、学びながら自分の作品を作る時間が取りたいと考えていたことから、明治学院大学文学部芸術学科を志望しました。高校時代に読んでいた美術関連の本を執筆した先生方が在籍していたことも、魅力の一つでした。

川島 明治学院大学で学んで良かったと思ったことは、どんなことでしょうか。

田中 大学では興味ある授業に積極的に参加しました。例えば、四方田犬彦元教授が高校生の頃に読んでいた名著を読み解く講義はとても印象に残っています。毎週、先生の著作『ハイスクール・ブッキッシュライフ』（講談社、2001年）に出てくる本の中から課題の本が1冊ずつ取り上げられていくのですが、そのおかげで今までになかった視点で本を読むことができるようになりました。本が書かれた時代背景や作中に出てくるモチーフの文化的な意味などを知ると、面白さが倍増しました。そうして



田中 みずきさん

視野を広げていったことが、今の仕事にもつながっているように思います。また、明治学院大学では、学生がそれぞれ興味や関心を持つことを頑張っていて、サークルやアルバイトに熱中している学生もいました。大学時代に、いろいろな価値観を持った人がいて、いろいろな生き方があるのだと気付けたことは、私にとって大きな刺激になりました。大学生活は、社会に出る前に「社会で生きること」を考えるきっかけの一つになったと思っています。

川島 美術に関してはどのようなことを学ばれたのですか。

田中 3年次から山下裕二先生のゼミに所属し、日本美術史を学びました。入学当初は、「自分の作品を作って新しい世界を見せたい」と考えていたのですが、大学で学ぶうちに美術史がどんどん面白くなって、のめり込んでしまいました。研究書を読むと、昔の作品に対して、新しい視点での解釈が次々に与えられている。私も自分なりのものの見方で、過去の作品を解釈してみたいと思ったのです。私は現代美術がとても好きだったのですが、美術史を学ぶことで、歴史に基づいて現代美術を捉えられるようになるのではという期待もありました。

銭湯につかって体感

ペンキ絵の

インスタレーション※

川島 銭湯に興味を持つようになったきっかけは何だったのでしょうか。

田中 卒業論文のテーマを決めるのに悩んでいた時に、ひたすら好きなアーティストや作品を書き出していったんです。それを俯瞰してみると、銭湯をモチーフにした作品を作っている現代美術家の名前がいくつかあることに気付きました。その時、「私は銭湯をモチーフにした作品に興味があるのかもしれない」と考え、銭湯のペンキ絵に注目し始めたのです。

川島 田中さんにとって、銭湯は縁のあった場所だったのでしょうか。

田中 家の近くに銭湯があったのですが、昔ながらの趣のある建物だなと思うくらいで、一度も行ったことはありませんでした。しかし、卒業論文のテーマとして考え



川島 葵さん

るようになってからは、1日に2〜3軒は回るようになりました。

川島 そこで初めて実物のペンキ絵をご覧になったかと思いますが、最初にどんな印象を受けましたか。

田中 ペンキ絵の存在自体は、映画やドラマ、漫画などに出てくるのを見て知っていましたが、実物を目にする、全く違う印象を受けました。初めて行ったのは近所の銭湯だったのですが、浴室の照明が薄暗かったんです。富士山と雲が描かれていたのですが、薄暗がりの中にペンキ絵が輝いているように見えました。さらに、冬だったため湯船から湯気がモワーツと立ち上がり、絵の中の雲と重なるように見えた時、「これはインスタレーションだ！空間全体が作品になっている！」と思いました。しかも、それが一過性の展示ではなく、ずっと存在し続けているのです。風景を見ている疑似体験のようだけど、ちゃんと「絵」としてそこにある。その感覚がとても面白く、「何だ、これは？」と思ったのが率直な感想です。

川島 これまでたくさんの美術館やギャラリーを巡り、インスタレーションという表現も見えて来られたと思います



ですが、それとはまた違う感覚を得られたのですね。

田中 「こんな形でこんな作品が?!」とびっくりしてしまいました。それから、なぜ富士山をモチーフにしているんだろう？ どういう風に描かれているんだろう？と

次々に疑問が湧き、ペンキ絵の資料を読むようになりました。

川島 どのような資料があるのですか。

田中 ペンキ絵について研究している先人の書籍を読んだのはもちろん、昔はペンキ絵が広告の役割を果たしていたので、それに関わった企業が持っていた資料を見せてもらったり、当時を知る人にインタビューをしたりしました。そうすると、書籍には載っていない、例えばペンキの値段などを知ることができたのです。企業の方も最初は「何をしにきたんだろう？」という感じでしたが、「学生さんが頑張っているんだから」と協力してくれるようになりました。講義がない時は国立国会図書館に通って、ひたすら新聞や雑誌を調べて、ペンキ絵に関する広告などの資料を探していました。

川島 その好奇心の強さは、幼いころからのものでしょうか。

田中 大学で学ぶ中で開花したと感じています。先ほどお話した四方田先生の講義で聖書が題材になったことがあり、その時、ある学生が先生に対してとても掘り下げた専門的な質問をしたのです。私も事前に課題箇所

文献を読むなど準備をしていたのですが、文化的な話題には比較的強い方だといううぬぼれが崩れ去るくらいに、質問の意味することが分かりませんでした。先生はその質問に対してご自分の考えを述べられたのですが、そのやり取りがとても面白くて衝撃的でした。この経験に単純に感動して「自分もああいう質問がしたい」と思い、とにかく先生に質問しようという気持ちになったのです。ただ、質問をするには、資料をしっかり読み込まないといけませんし、質問の立て方や質疑応答の広がりも考える必要があると分かってきて、それを繰り返すうちに自分で調べて問いを立てるというやり方が身に付いたのだと思います。

銭湯ペンキ絵師となる決意 8年半の修業を積んで独立

川島 学びを通して銭湯のペンキ絵に出合い、在学中に銭湯絵師の中島盛夫さんに弟子入りされたそうですね。二足のわらじを履くのは大変だったかと思いますが、なぜ在学中のタイミングだったのでしょうか。

田中 卒業論文を書くためにペンキ絵の制作現場を見学させていただくことを続けていました。しかし、当時からペンキ絵職人は3人だけで、業界には若手がおらず、皆さん高齢でした。「このままだとペンキ絵の文化がなくなってしまう。何とか残したい」と考えた時、自分がペンキ絵師になるのが一番早いのではないかと思ったのです。元々、私は絵を描くのが好きでしたし、作品を作りたいという思いがありましたから。

川島 それまでペンキで絵を描かれた経験はあったのですか。

田中 全くありませんでした。師匠は迷うことなく、スムーズに絵を描き進めていたので、簡単に描けるものだと思っていましたが、後になってその大変さを実感しました。

川島 大学院にも進学され、卒業後は就職されましたが、何か事情があったのでしょうか。

田中 師匠から「ペンキ絵一本では食べていけないと思うから、安定した収入のある仕事を別に持ちなさい」と言われて、就職活動も始めました。ありがたいことに美術系の出版社に拾っていただき、編集者として勤めるよ

うになります。しかし、仕事しながらでは、ペンキ絵の修業には年に数回しか行くことができなかったのと、客観的にこの仕事に向いていないのではと思ったこと、そして体調を崩してしまったこともあって、アルバイトをしながらペンキ絵の修業に専念するようになりました。

川島 修業時代にはどのようなことをされていたのでしょうか。

田中 最初は荷物を運んだり、現場が汚れないようにシートで養生をしたりすることから始まりました。今思えば、仕事に必要な道具やその保管場所を覚えるための訓練だったのだと思います。この作業を通じて、効率を意識するようにもなりました。職人さんによって作業の仕方が異なるのですが、師匠の場合は浴槽の上に長い木の板を並べて、足場を組んでいましたので、その設置作業も修業の一環でした。

川島 修業をする中で驚いたことや意外だったことはありますか。

田中 作業の様子は大学生の頃に見ていたのですが、銭湯のペンキ絵は1日で描き終えるのです。ペンキが下に垂れていくので、天井に近い上部から下に向かって描き



進めます。下の方はペンキが垂れても描き直せますから。朝8時に現場に入って、夕方6時には作業が終わるのですが、その間に男湯と女湯の両方にペンキ絵を描き終えるんです。

川島 たった1日で描き上げるというお話を聞いて、私もとても驚きました。そうした技術を、どのようにして磨いていったのでしょうか。

田中 最初は空の部分だけ描かせてもらいました。空は1色で表現するので、ミスをしても直すことができます。空を描く作業を通して、ペンキを使うことに慣れていき、徐々に海や松など周辺のモチーフを描かせてもらい、最後に富士山を描かせてもらうという形で修業が進みました。

川島 初めて1人でペンキ絵を描いたのはいつですか。

田中 修業を始めて7年目のことでした。最初はとても焦りましたね。1日で終わらせられると思っていたのですが、壁が傷んでいたこともあり、なかなか作業が進まない。半分は描き上げているはずの時間になっても、全然、壁面が埋まっていない。休んで冷静に考える時間もない中で、何とか夜10時に作業が終わり、ヘトヘトになって家に帰りました。帰りながら「本当にちゃんと描けたの

だろうか」と思い悩んでいたのを覚えています。

心地よい光を表現し

見る人の気持ちを明るくしたい

川島 ご著書を読んで知ったのですが、ペンキ絵は1年から数年で描き換えるんですね。私は10年に1回くらいのペースで描き換えるものだと思っていたので驚きました。

田中 とにかく効率を重視するので、時間がない時は古い絵を塗りつぶすこともせず、上からそのまま絵を描いていくこともあります。前の絵がもったいないと思うこともありますが、銭湯のペンキ絵は「描き換えていく文化」なので、新しく描いていくことに専念しています。

川島 銭湯で入浴されるお客さんは、お湯につかってペンキ絵を眺めながらいろいろなことを考えるのでしょうかね。

田中 ペンキ絵がある銭湯の空間には、いろいろな時間軸が重なっているように思います。ペンキ絵は初夏の風景を描いているはずなのに、富士山の山頂は雪をかぶっているなど、実際にはあり得ない時間が混ぜ合わされていることもあります。そこにさらにお湯につかるお客さん

の時間が重なる。そうしたいろいろな時間の流れを意識しながらペンキ絵を描いています。

川島 確かに、富士山というモチーフは旅先で眺めたり、何かの時に目にすることが多いですから、見る人の人生や思い出を重ねることがあるのかもしれませんが。先ほど稲荷湯のペンキ絵を拝見したのですが、朝日を浴びる富士山が、まるで呼吸をしているかのように生き生きと感じられました。



神田の稲荷湯では、過去に田中さんが描いたペンキ絵の写真でクリアファイルを作成

田中 そう言っていただけだと、とてもうれしいです。

私はペンキ絵を描く時に、色を描くことで光のようなものを描き出したいと思っています。光は、一番時間を感じさせるものだと思うのです。「晴れた朝は明るい」「夕

日がきれい」といったふうに、時間を分かりやすく表現できますし、感情を強く動かすものだと思います。銭湯の場合は、縁起物として朝日を受ける富士山の姿を描くのですが、その光をうまく表現して、見た人に明るい気持ちになってもらいたいと考えています。

川島 近年は映画やご当地キャラクターとコラボレーションをしたり、ペンキ絵のワークショップを開催したりするなど、ユニークな活動もされていますね。特に印象に残っている作品はありますか。

田中 ペンキ絵を描く時には、毎回、銭湯のオーナーやそのご家族とじっくり相談しながらデザインを練るので、どれも忘れることができない思い出深いものになっています。コラボレーションをする時も、映画作品について



勉強したり、ご当地キャラクターが生まれた地域に関する資料を読んだり、制作する前に自分が納得できるように下調べをしています。

川島 学生時代の経験がそこでも生かされているのですね。最後に、学生をはじめとした若い世代に向けて、メッセージを頂けませんか。

田中 なかなか人生が思い通りに進まないと思っている人も多いかと思いますが、生きていく上で自分が「必要がない」と思った経験が、後で意味を持つこともあります。私も、大学では今の自分に必要なさそうな講義をたくさん受けました。でも、そこで新しい発見があり、今につながる学びがありました。皆さんには、人生を効率で考えるのではなく、興味を持ったことにどんどん挑戦してほしいと思います。

川島 同年代の私にも響くメッセージをありがとうございます。ます。これからもすてきなペンキ絵を描き続けてください。
※作品が置かれる空間全体を一つの作品として、体験的に鑑賞させる芸術表現。

専修大学

ばば すぎお
馬場 杉夫

専修大学 学長



佐々木重人前学長の任期満了に伴い、9月1日付で馬場杉夫教授が学長に就任した。

馬場学長は1966年生まれ。1989年慶應義塾大学商学部卒業、1995年同大学院商学研究科後期博士課程単位取得退学。同年、専修大学経営学部講師として着任。その後、助教授を経て、2003年に同学部教授。2005年慶應義塾大学にて博士（商学）取得。専修大学経営学部長、学校法人専修大学理事、同評議員、専修大学大学院経営学研究科長を歴任。

専門は経営学（人的資源管理、戦略マネジメント）。主な著書に『なぜ組織は個を活か

せないのか』（中央経済社）などがある。

専修大学は1880年創立。建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉えなおした「社会知性の開発」を21世紀ビジョンとして掲げる。専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核とし、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野からの独創的な発想で主体的に社会の諸課題解決に取り組む人材を育む。

新学長のもと、多くのステークホルダーとの対話を通じて、これまで以上に地域や社会の期待に応え、学生がもっとも成長できる大学を目指す。



私大連Presents 学長インタビューシリーズ

学長 ときどき 私

YouTubeで
配信中！



〳 私立大学の多様な個性を支える学長とは、どのような人たちなのか。その個性や素顔に迫ります。〵



Vol.13 松山大学
池上 真人 学長（専門：英語教育学）

成功するまで続ければ、それは失敗ではない

ネットとは違う、リアルな人とのつながりを広げてほしい

Vol.14 文教大学
宮武 利江 学長（専門：日本語学）



都会への一極集中を脱して、豊かな地方をつくるのが重要

Vol.15 東北学院大学
大西 晴樹 学長（専門：イギリス社会経済史）



3学長が並ぶ
バラエティ豊かな番外編
学長ときどき私
「一問一答編」
もオススメ！

永尾 比奈夫（ながおひなお）

天理大学学長。’90カリフォルニア大学サンタバーバラ校大学院修士課程修了。天理教海外部次長、学校法人天理大学専務理事等を経て、’23より現職。

小原 克博（こはらかつひろ）

同志社大学学長。’96同志社大学大学院神学研究科博士課程（後期課程）修了。博士（神学）。’24より現職。主著『宗教のポリテイクス』。

小林 至道（こばやしのりみち）

青山学院大学アカデミックライティングセンター助教。’13青山学院大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。修士（教育学）。関西大学ライティングラボ特任助教を経て、’17より現職。

飯野 朋美（いのともみ）

津田塾大学ライティングセンター客員講師。津田塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得満期退学（米文化）。特任助教、特任講師を経て、’20より現職。

太田 裕子（おたゆうこ）

早稲田大学グローバル・エデュケーション・センター准教授。’09早稲田大学大学院日本

語教育研究科修了。博士。主著『はじめて「質的研究」を書く』あなたへ』など。

土屋 和代（つちやかずよ）

東京大学大学院総合文化研究科教授。カリフォルニア大学サンディエゴ校歴史学研究所博士課程修了。Ph.D.（歴史学）。主著に『福祉権運動のアメリカ』など。

松田 美佐（まつだみさ）

中央大学文学部教授。’96東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。主著『うわさとは何か』など。

勝島 啓介（かつしまけいすけ）

京都精華大学 京都国際マンガミュージアム事務局長。’01京都精華大学大学院芸術研究科造形専攻修了。

茂木 正人（もてきまさひと）

東京海洋大学海洋環境科学部門教授。マリンサイエンスミュージアム館長。’97東京水産大学大学院博士後期課程修了。博士（水産学）。共著『食材魚貝大百科』など。

不動 真優（ふどうまゆう）

国立音楽大学楽器学資料館主任学芸員・課

長補佐。’00国立音楽大学教育学部リトミックス専修卒業。’12より楽器学資料館勤務。

宮田 真也（みやたしんや）

学校法人城西大学水田記念博物館大石化石ギャラリー学芸員・理学部助教。’14早稲田大学創造理工学研究科地球・環境資源理工学専攻博士課程修了。博士（理学）。

児玉 竜一（こだまりゆういち）

早稲田大学文学部教授、演劇博物館長。’98年、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。歌舞伎学会会長。編著に『能楽・文楽・歌舞伎』（教育芸術社）など。

長佐古 美奈子（ながさこみなこ）

霞会館記念学習院ミュージアム、学習院大学史料館学芸員。’84学習院大学文学部卒。’85より現職。主著『改訂新版』ボンボニエールと近代皇室文化』など。

西中 利也（にしなかとしや）

学校法人名古屋学院大学理事長。’80母校である学校法人名古屋学院大学に入職。事務局長など歴任。’12理事に就任。’248月より現職。

渡邊 英司（わたなべ えいじ）

上智大学ソフィア会事務局長、上智学院総務局ソフィア連携室主幹。’95上智大学文学部社会科学科卒業後、上智学院入職、’23より現職。

八木 好郎（やぎ よしろう）

愛知大学同窓会会長。愛知大学法経学部経営学科卒業。

宮地 恵美（みやち えみ）

一般社団法人メンター三田会会長。’82慶應義塾大学大学院工学研究科修士課程修了。

野田 俊也（のだしゅんや）

東京大学大学院経済学研究科講師。’19スタンフォード大学経済学部博士課程修了。博士（経済学）。ブリティッシュコロンビア大学を経て、’11から現職。

瀬戸 寿一（せと としかず）

駒澤大学文学部准教授。’12立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。博士（文学）。東京大学C S I Sを経て、’21から現職。

赤澤 清孝（あかざわ きよたか）

大谷大学社会学部部長。’00立命館大学大学院修士課程修了。修士（政策科学）。’14大谷大学に着任。’25より現職。共編著『新・学生のためのポランティア論』など。

八木 茂典（やぎ しげのり）

中央大学理工学部准教授。’11東京医科歯科大学医歯学総合研究科生体支持組織学系専攻博士単位取得満期退学。’21より現職。

大黒屋 貴稔（おおぐら やたとし）

聖カタリナ大学健康社会学部部長・教授。’06早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。早稲田大学助手等を経て現職。専門は国際社会学等。

吉田 輝美（よしだ てるみ）

広島修道大学事務局長兼財務部長、学校法人修道学園法人事務局次長。

伊藤 泰彦（いとう やすひこ）

武蔵野大学学生部長・工学部教授。’96東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了。修士（工学）。専門は建築学・こども環境学。

田中 みずき（たなか みずき）

銭湯ペンキ絵師。’08明治学院大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了。在学中から銭湯絵師・中島盛夫氏に師事。8年半の修業後独立し、多彩な活動を展開中。

川島 葵（かわしま あおい）

上智大学文学部卒業。東海ラジオアナウンサーを経てフリーに。藤井聡太王位就位式や吉沢亮トークショー司会などで活躍。TBS Podcast『Voicy』番組も持つ。

（お断り）本稿は、お書きいただいた資料から、できる限り統一して掲載いたしました。

会長の動き

- 9月16日(火) 第5回常務理事会、第5回理事会に出席
- 10月7日(火) 第6回常務理事会に出席
- 10月21日(火) 第7回常務理事会、第6回理事会に出席

開催報告

- 9月8日(月) 理事長会議
- 9月11日(木)～12日(金) 学生支援研究会議
- 9月19日(金) 第1回人事労務部門実務担当者情報交換会「職員人事考課制度改正について」事例紹介と留意点解説
- 9月22日(月)～10月31日(金) 令和7年度第1回「国の補助金等に関する説明会（オンデマンド配信）」
- 10月27日(月) 国際連携委員会シンポジウム
- 10月31日(金) (経営委員会) 大学経営に関する情報交換会

加盟大学学長インタビュー動画
「学長ときどき私」を公開

この動画は、私大連会員大学の学長にフォーカスし、学長としてのお仕事、研究者としての活動、プライベートの過ごし方などをお伺いし、学長の魅力を伝えることを通じて、私立大学での多様な学びや学ぶことの楽しさなど、私立大学の魅力を視聴者にお届けしています。

新たに東北学院大学 大西晴樹学長へのインタビュー、一問一答編を公開、今後も随時公開予定です。

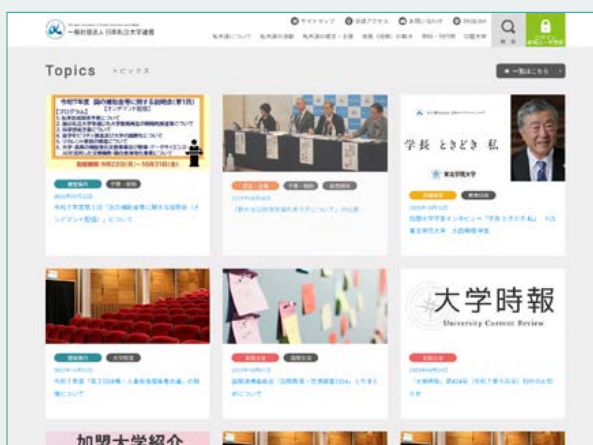


<https://www.youtube.com/playlist?list=PLXbCoVKSQta1Rlej5Na3BL2SaCdVsiht>



<https://www.shidairen.or.jp/>

詳細は、私大連Webサイトをご覧ください。



座談会 「生成AIで何が変わるか?—事務室の日常から—」

特集 「大学がまちにひらく—キャンパスから広がる関係性—」

小特集 「大学発マスコットキャラクターの現在地」

だいがくのたから 東海大学

大学点描 中央大学

クローズアップ・インタビュー 鈴木 志保子さん

(公立大学法人神奈川県立保健福祉大学大学院 保健福祉学研究科研究科長、公認スポーツ栄養士)

編集後記

◆今回、各大学の専門ミュージアムの多様性に驚いた。そして特集6校の事例に関しては、各大学の特徴とミュージアムの専門性がとてもマッチしていると感じた。自校の特色を活かしながら資料を収集し館を運営している。今後も大学の個性を表現したようなミュージアム運営を続けてほしい。また、多くのミュージアムでは海外からの来館者が増えている。京都国際マンガミュージアムに至っては、年間の総来館者数の約3割、8万人もの海外の方々が来館しているそうだ。おそらく旅先としての京都自体の魅力や世界での日本マンガの人氣も影響しているのだろうが、大学が運営しているミュージアムでグローバルに通じる魅力的なコンテンツを用意していることに感嘆した。大学がミュージアムを運営することは、大学の持つ知識や文化を発信することにもつながる。将来的には国内外の一般のミュージアムとの連携などにも期待したい。〈広報・情報委員会大学時報分科会委員・早稲田大学エクステンションセンター事務局長コンティニユーイング・エデュケーション推進室課長小泉邦人〉

◆大学を起点とする「出会い」と聞いて、皆様は何を思い浮かべるだろうか。在学中の友人や恩師との関係にとどまらず、卒業後にもさまざまな「出会い」が生まれている。市場や個人の希望を最適な出会いに導くマッチング理論は、より公平で納得感のある制度を実現する仕組みだという。すでに保育所の入所や入試のほか、特定の科目に希望が集中した際に学生の意向をできるだけ反映しながら履修者を調整する履修制限の仕組みにも応用されている。学生だけでなく、大学と卒業生をつなぐ関係の中でも人生のパートナー探しやビジネスの協業や創業支援など、マッチングの場は広がり続けている。人と人を結ぶ大学の力を改めて感じるところだ。今後はAIが、プライベートなマッチング領域にも関わる時代になるだろう。一方で数字では測れない「相性」や「直感」も変わらず大切にされるはずだ。技術と人間的な感覚、両方の行方を静かに見つめていきたい。〈広報・情報委員会大学時報分科会委員・慶應義塾広報室長河越英代〉

◆文章を「書く」、絵を「描く」と同じく、でも全く違うことのようにとらえていたが、共通点が多いのでは?と感じた座談会とインタビューとなった。田中みずきさんは元々絵を描くことが好きだったとのことだが、絵を描くためにはスキルはもちろんのこと、感性や知的好奇心、何よりも「考える」ことが求められていることを知る機会となった。座談会では、生成系AIの登場がもたらす書くことへの影響についても話題となったが、生成系AIが学べるべき文章が枯渇する未来予想において、人間が書く良質な文章がより一層求められ、重要性を増す可能性についても語られた。どちらも「考えてかく」ことが重要であるが、一方において自分らしさも表れる「かく」ということ。田中さんのお話からは、さまざまなヒントが溢れているように感じた時間となった。インタビューは、神田稲荷湯をお借りして撮影を行った。ペンキ絵の中で交錯する時間軸、小さく描かれた狐もぜひご覧いただきたい。〈日本私立大学連盟事務局 加賀崎奈美〉

一般社団法人 日本私立大学連盟 加盟大学一覧

※ 大学名ABC順 / ※ } は同一学校法人 (118大学 令和7年11月20日現在)

愛知大学
亜細亜大学
青山学院大学
跡見学園女子大学
梅花女子大学
文教大学
筑紫女学院大学
中京大学
中央大学
大東文化大学
獨協大学}
獨協医科大学}
姫路獨協大学}
同志社大学}
同志社女子大学}
フェリス女学院大学
福岡大学
福岡女学院大学}
福岡女学院看護大学}
学習院大学}
学習院女子大学}
白鷗大学
阪南大学
広島女学院大学
広島修道大学
法政大学
実践女子大学
上智大学
城西大学}
城西国際大学}
順天堂大学
金沢星稜大学

関西大学
関西学院大学
関東学園大学
関東学院大学
慶應義塾大学
敬和学園大学
神戸女学院大学
皇學館大学
國學院大學
国際武道大学
国際基督教大学
駒澤大学
甲南大学
久留米大学
共立女子大学
京都産業大学
京都精華大学
京都橘大学
九州産業大学
松山大学
松山東雲女子大学
明治大学
明治学院大学
宮城学院女子大学
桃山学院大学
武蔵大学
武蔵野大学
武蔵野美術大学
名古屋学院大学
南山大学
日本大学
日本女子大学

ノートルダム清心女子大学
大阪学院大学
大阪医科薬科大学
大阪女学院大学
大谷大学
追手門学院大学
立教大学
立正大学
立命館大学}
立命館アジア太平洋大学}
龍谷大学
流通科学大学
流通経済大学
西武文理大学
聖学院大学
成城大学
聖カタリナ大学
成蹊大学
西南学院大学
聖路加国際大学
聖心女子大学
専修大学}
石巻専修大学}
芝浦工業大学
白百合女子大学}
仙台白百合女子大学}
昭和女子大学
創価大学
園田学園大学
大正大学
拓殖大学
天理大学

東邦大学
東北学院大学
東北公益文科大学
東海大学
常磐大学
東京女子大学
東京女子医科大学
東京経済大学
東京国際大学
東京農業大学}
東京情報大学}
東京歯科大学
東洋大学
東洋英和女学院大学
東洋学園大学
豊田工業大学
津田塾大学
和光大学
早稲田大学
山梨英和大学
四日市大学}
四日市看護医療大学}

大学時報

University Current Review
2025/11月号

第74巻425号(通巻438号)
令和7年11月20日発行

編集人 音好宏(上智大学文学部教授)

発行人 高橋智幸(関西大学学長)

発行所 一般社団法人 日本私立大学連盟

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25
私学会館別館
電話 03-3262-8672 FAX 03-3262-4363
<https://www.shidairen.or.jp>

編集 株式会社 WAVE

〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田3-3-20
明治安田生命大阪梅田ビル 3階
〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-2-1
住友不動産虎ノ門タワー 20階

松田美佐(中央大学文学部教授)
須藤智徳(法政大学多摩事務課課長)
藤野圭(上智大学ダイバーシティ・サステナビリティ推進室室長)
玉村まゆか(関西大学総合企画室広報課長)
中谷良規(関西学院広報部企画広報課課長)
河越英代(慶應義塾広報室長)
野見山智道(明治大学経営企画部広報課長)
大野百合子(立教学院総長室渉外課課長補佐)
勝屋藍太(立命館大学総合企画部広報課長)
山田健太(専修大学文学部教授)
高橋慈海(大正大学理事長室室長)
大谷奈緒子(東洋大学社会学部教授)
中條賢二(津田塾大学経営企画課課長)
小泉邦人(早稲田大学エクステンションセンター事務長兼
コンティニューイング・エデュケーション推進室課長)
春名貴明(日本私立大学連盟事務局)
加賀崎奈美(日本私立大学連盟事務局)
長尾早姫(日本私立大学連盟事務局)
吉田匡孝(日本私立大学連盟事務局)

